

図24 昭和63年度平城京内発掘調査位置図（1：50000）

表4 昭和63年度 平城京内発掘調査地一覧(1988.4.1～1989.4.21)

調査次数	調査地区	面積(m ²)	調査期間	発掘担当者	備考	掲載頁
186	左京三条二坊	3,800	1988.4.1～ ～1989.4.21	玉田 芳英	そごう建設地	46
186補	左京三条二坊	1,050		花谷 浩	そごう建設地	46
190	左京三条二坊	2,700		玉田 芳英	そごう建設地	46
				井上 和人		
193	左京三条二坊	2,460		花谷 浩	そごう建設地	46
195	左京三条二坊	2,100		井上 和人	そごう建設地	46
				佐川 正敏		
197	左京三条二坊	3,460		佐川 正敏	そごう建設地	46
200	左京三条二坊	310		佐川 正敏	そごう建設地	46
				小池 伸彦		
199	頭塔	300		2.13～4.21	巽 淳一郎	史跡整備
191-1	右京三条一坊十六坪	150	4.1～4.15	綾村 宏	藤村義光宅	88
191-3	左京四条二坊十五坪	161	4.15～5.17	小林 謙一	西口利夫宅	89
191-6	右京一条二坊三坪	156	6.29～7.8	田辺 征夫	(有)武田	92
191-7	左京九条一坊八坪	75	9.19～9.21	田辺 征夫	谷口鉄工	122
191-10	法華寺旧境内	50	12.12～12.26	毛利光俊彦	小島・梅原宅	122
191-11	左京八条一坊六坪	300	1.7～2.7	巽 淳一郎	(株)かつや	93
次数外	西大寺境内	330	7.20～9.20	上野 邦一	防災工事	104
	薬師寺西面回廊	350	11.30～1.11	千田 剛道	伽藍復興	113

1 左京三条二坊一・二・七・八坪の調査

第186次・190次・193次・195次・197次・200次

1 はじめに

1986年、平城京左京三条二坊一・二・七・八坪にまたがる地にそごうデパートの建設計画が具体化された。敷地面積は40,000㎡に及び、そのうち30,000㎡を越える範囲について、少なくとも2年半の期間で発掘調査を行なうこととなった。調査は、1986年9月30日から継続しており、1989年3月末までに約30,000㎡について調査が終了した。1987年度までの調査（第178次、184次、186次北区）の結果、奈良時代の前半にこの地に4町を占める邸宅が存在し、出土した木簡からその主が長屋王であったことが確認されるとともに、邸宅内の遺構配置や変遷も明らかになっている（『昭和62年度平城宮跡発掘調査概報』）。1988年度の調査は一・二坪、条坊関係遺構を中心として、約16,000㎡の面積について行なった。1989年3月末までに検出した遺構は、掘立柱建物170棟以上、条坊に開く門3棟、

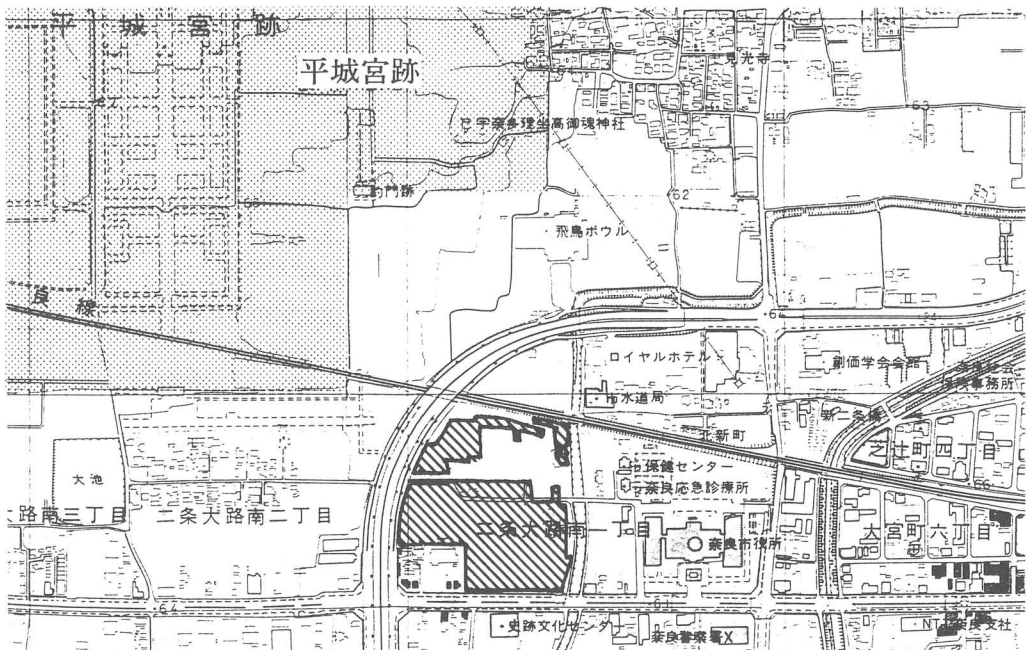


図25 調査位置図（1：10000）

掘立柱塀60条以上、井戸40基、二条大路と南側溝、東二坊坊間路と両側溝、坪境小路2条およびその側溝4条、多くの溝、土坑などにおよぶ。古墳時代の掘立柱建物が1棟、溝1条、旧河川が1条あるほかは、全て奈良時代以後のものである。奈良時代以後の遺構は、重複関係、配置や、敷地の大小により、大きくA期～D期の変遷をたどる。

今年度の調査は、面積が広く、かつデパートの建設が本格化したこともあって、調査地が各所に分散している。そのため、まず最初に調査の概要を次数ごとに記し、その後に全体の変遷を見ていくことにする。また、1965年に第32次調査として左京三条二坊の西北隅を調査しているので、関連する部分についてもあわせて考察する。なお、遺構番号は仮りの番号を基本としたが、32次調査で検出した遺構については平城宮遺構番号を用いた。また、記述は1989年4月末までの知見に基づくものであり、遺物に関しては現時点での総括を行なったものもある。

2 調査の概要

第186次・190次調査

184次調査区の西に約3,800㎡の範囲で186次調査西区、その北に接して約2,700㎡の範囲で190次調査区を設定した。186次調査西区が二坪の北半部、190次調査区が一・二坪の坪境小路と一坪の南半部にほぼあたる。186次調査西区の東¹/₃は昨年度に調査が終了し、今年度はその西側を調査した。検出した遺構は、掘立柱建物30棟、掘立柱塀15条、坪境小路1条、井戸4基、多数の溝、土坑などである。

第186次補足調査

184次調査区と186次調査北区の間に残った未調査部分の調査。面積は1,050㎡。検出した遺構は掘立柱建物5棟以上、塀10条以上、坪境小路1条、井戸3基、溝、土坑などである。

第193次調査

条坊関係遺構の調査を目的として、七・八坪の東辺と八坪の北辺に調査区を設定した。当初はA区～C区までであったが、調査の進展につれて新たな調査区を設定する必要が生じ、D区とE区を設けた。

A区 東二坊坊間路西側溝と七・八坪坪境小路東端部分の調査を目的とするL字形の調査区。調査面積は770㎡。掘立柱塀1条、門1棟、溝7条、道路2条、土坑等を検出した。

B区 A区の北、長屋王邸（三条二坊八坪）の東北隅に設けた調査区。調査面積は700㎡。宅地の東北隅を確認したほか、二条大路南側溝と、その北側の東西大溝、東二坊坊間路西側溝、築地雨落ち溝の他、掘立柱建物6棟以上、掘立柱塀3条と、東二坊坊間路西側溝や東面築地東雨落ち溝に注ぐ木樋暗渠2基、古墳時代の建物1棟と溝1条などを検出した。

C区 二条大路上の、一・八坪坪境小路北延長部に設けた調査区。調査面積は100㎡。32次調査では路面上に掘立柱建物を確認しているが、今回は二条大路の路面を検出したにとどまる。それとともに、坪境小路の側溝は二条大路上には延びないことも確認した。

D区 A区の西側に隣接する調査区。建設にともなう掘削工事が始まったため行なった立会調査である。面積は、770㎡。検出した遺構は、掘立柱建物11棟以上、掘立柱塀4条以上、井戸2基、土坑、溝など。

E区 A区の北、186次調査北区の東方で、1987年度に「長屋皇宮」木簡が出土した井戸からは約45mを隔てる位置にある。D区同様調査対象外とした地区であるが、機械掘削中に大量の木簡を含む溝を発見したことから急遽設定した調査区である。面積は120㎡。検出した遺構は、溝2条、井戸1基である。柱穴もいくつか検出したが、建物にまとまるものはなかった。

木簡が出土したのは幅3.0～3.4mの南北方向の溝SD140で、21m分を調査した。南端には溝底の立ち上がりがあり、調査開始時点では、遺物を含む暗褐色の粘質土が約2mほど西に折れて続いていた。調査区内では北限を検出しておらず、総延長は未確認である。約20m北方にあるB区ではこの溝を検出していないので、総延長が40mを越えることはないようである。

溝の深さは最も深い北端で80cmあり、堆積土は4層に分かれる。上から3層目が木簡を大量に含む木屑層で、現場で木簡として識別して取り上げた数でも、ゆ

うに1000点を越えた。土器、瓦、木器をも多量に含んでおり、遺物は一括して捨てられた状況を示す。木屑層の発掘はこの層を土ごと採取し、室内で洗浄、選別する方法をとった。その量は整理用のプラスチックコンテナ約1000箱にのぼる。

第195次・197次調査

190次調査区の北方に2,100㎡で195次調査区を、その東に3,460㎡で197次調査区を設けた。186次調査北区では、一・八坪の坪境小路に重なる位置に掘立柱塀による通路状の区画を検出しており、その区画と二条大路との関連を探るこ

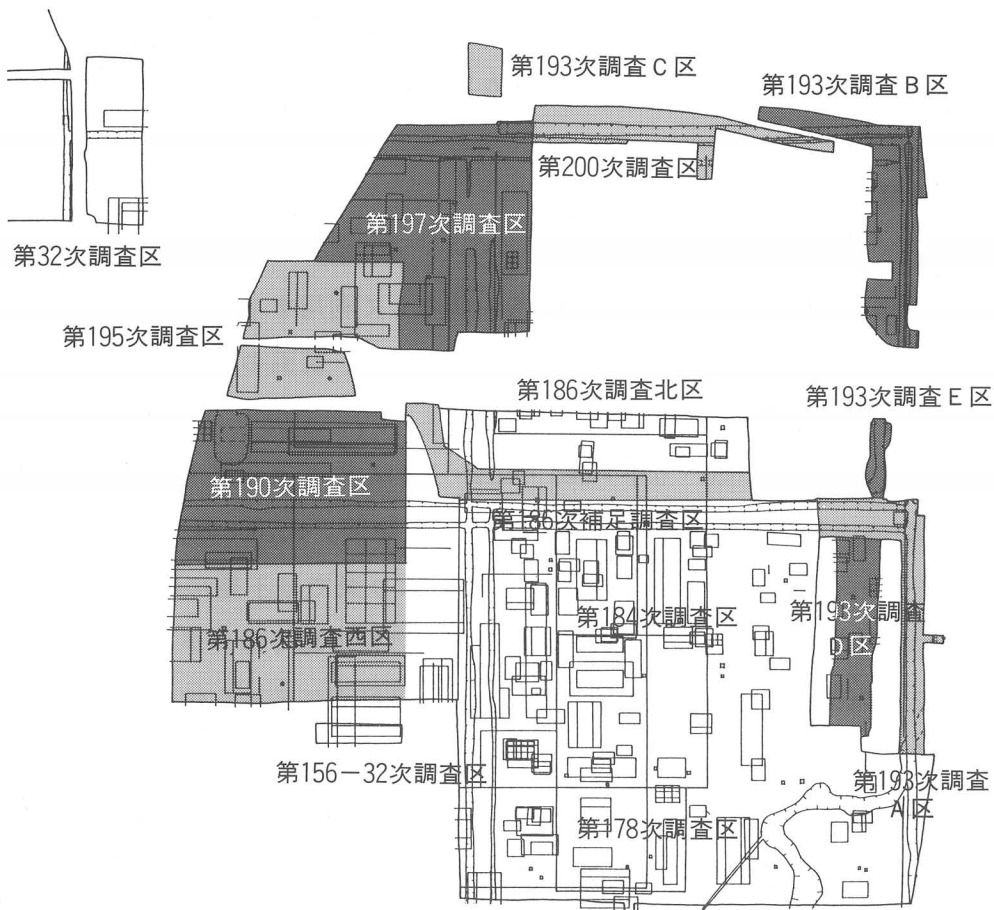


図26 調査区位置図

とと、一坪の様相を明らかにすることを目的とした。発掘区の東半部は、調査着手前には建設工事のための資材置き場になっており、建設業者が土壌硬化剤で固めていた。そのため、表土を除去する段階で土が塊状になって剥離してしまい、遺物包含層と浅い遺構は消滅してしまった。検出した遺構は、掘立柱建物23棟、掘立柱塀9条、門1棟、築地1条、井戸8基、および溝、土坑などである。

第200次調査

193次調査B区と197次調査区の間、二条大路南側溝およびその北側の東西大溝の調査。面積は約310㎡である。東西大溝からは、それまでの調査で、木簡などの豊富な遺物が出土していたので、溝を完掘して遺物を取り上げることと、長屋王邸内の区画の東限を限る塀SA045と北面築地との関係を明らかにすることを目的とした。

3 遺構の変遷

A 期

奈良時代前半。坪境小路がなく、4町を一体として利用する。長屋王の邸宅の時期が中心となる。敷地内を掘立柱塀によって区画し、区画の変遷と建物の配置により、さらにA1期～A3期にわけられる。

A1期 掘立柱塀SA030・031・060・104・145などによって敷地内を区画する。柱間は、SA030は18尺等間で、他は9尺等間。SA060の柱穴の平面形はSA104の取り付けから西では方形だが、それより東では不整な円形をしている。断ち割り調査の所見から見ても、同じ位置での柱の建て替えがあり、A・Bで区別する。以下、記述の煩雑を避けるために、各区画に名称を付けることとする。SA030・031・060A・080により囲まれた、7間×5間の主殿SB070を含む区画を「中心区画」、その西方のSA080・060Aと、おそらくSA030の延長によって囲まれるものを「西区画」、SA060A・104・145による区画を「西北区画」とする。

各区画や建物の配置関係は以下の通りである。まず、中心区画は東西345尺、南北400尺となり、SA080は二坪を条坊計画上で東西に3：2に分割する位置

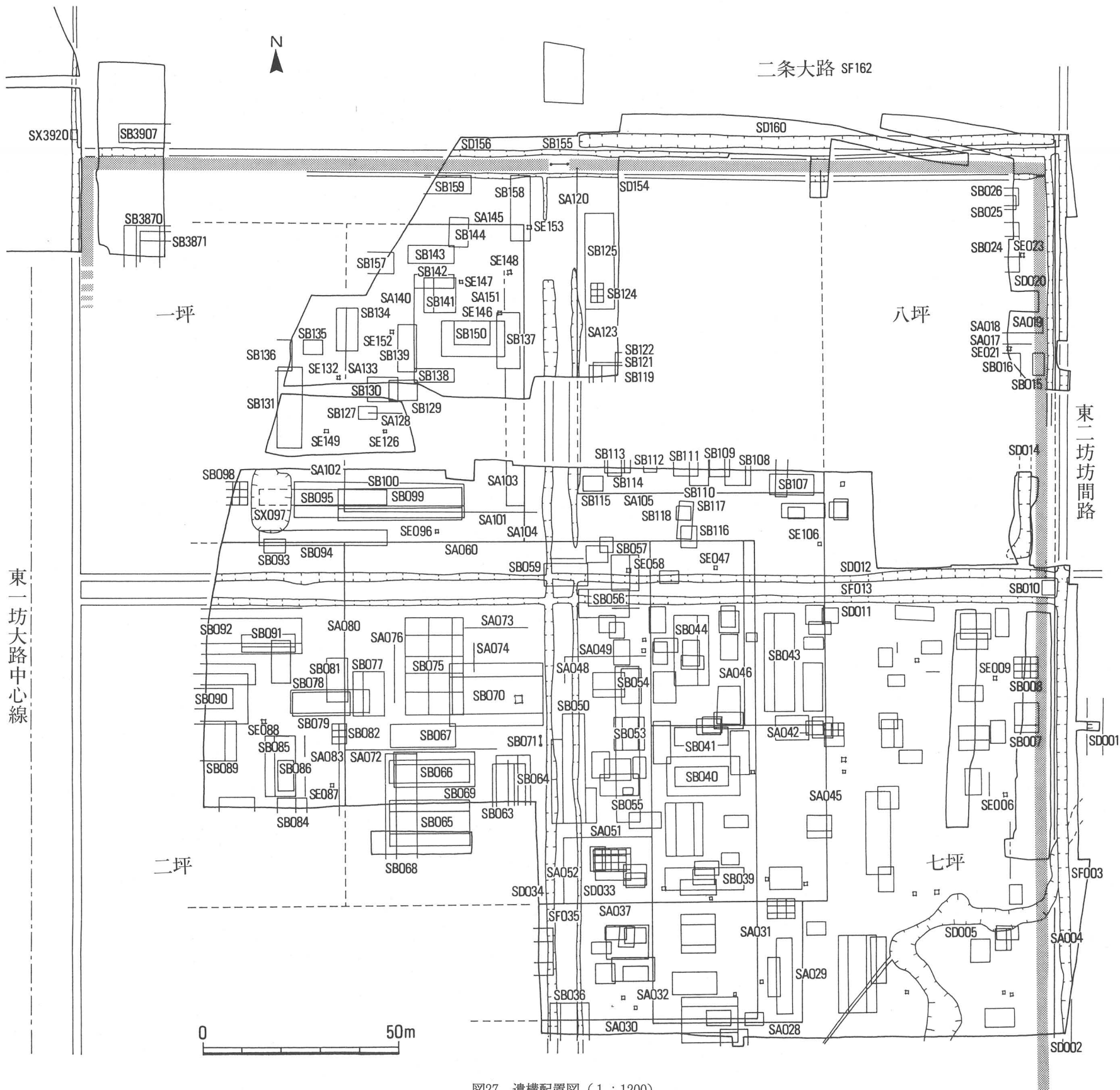


図27 遺構配置図 (1 : 1200)

にある。また、中心区画の区画塀とSB070の関係をみると、SA031は東妻から180尺、SA030は南庇から250尺、SA060Aは北庇から100尺と、いずれも完数值となる。さらに、西北区画の東を限るSA104は、SA060AとSA031の接点から西へ200尺の位置にあり、西北区画の南北長は240尺になるなど、計画的な配置をしていたことがわかる。

中心区画には、主殿SB070の西に4間×3間の西庇付南北棟SB077がある。東には東脇殿SB050と桁行13間の大規模な南北棟SB055がある。他に区画の北隅の4間×2間の東西棟SB059など、いくつかの建物が配される。SB070の北側柱から30尺の位置には目隠しの塀SA073、南側柱から20尺の位置にはSA072がある。SA072は西でSA080に取り付き、東はSB070の東西の中心線上まで延びる。

西区画にはSB085・090・092が建つ。SB090は柱穴の多くを後世の攪乱によって失うが、身舎の柱間が8尺、庇の出が11尺の4間以上×4間の四面庇付東西棟に復原できる。東の妻柱は、SB070の西の妻柱から200尺の位置にある。SB092は9間以上×3間の南庇付東西棟で、北の側柱とSA060との距離は60尺。北に10尺を隔てて塀がある。SB085は5間×3間の西庇付南北棟で、東に2条の目隠しの塀がある。

西北区画には、SB098・100・131・138・142がある。SB100は16間×3間の長大な南庇付東西棟で、2間ごとに間仕切りがある。総長43.2mにおよび、平城京のこれまでの調査の中では最長の建物である。SB098は2間以上×3間の総柱建物で、倉庫であろう。SB138・142は柱筋を揃えて南北に並ぶ3間×1間の東西棟で、双方の西妻にSA140が取り付く特殊なものである。また、西北の隅には、第32次調査で検出したSB3870がある。3間以上×3間以上の南北棟で、少なくとも西に庇がある。SB3870の北妻はSA145の延長上から約1mほど南にずれるが、SA145がSB3870に取り付く可能性は否定できない。

八坪は調査面積が少ないために詳細は不明であるが、閉塞した区画をつくる塀は検出していない。SB119、SA123、SB125が南北に連なり、SA104と

ともに北門からの通路を区画する。その南方にはSB 112・113が東西に並ぶ。また、

「長屋王家木簡」が出土した溝SB014はこの時期のものである。

東二坊坊間路西側溝沿いには、八坪にSB 015・016とS A 017・018・019、七坪には倉庫と推定されるSB 007・008がある。

SB008は総柱で、3間×3間と推定され、SB007は3間×4間で、南に庇か縁がつくと考えられる。両者は柱筋を揃えて南北に並び、間隔は約20尺である。SB007の柱穴を覆う土坑から、平城宮Ⅱ～Ⅲの土器と、軒丸瓦6225A（平城宮軒瓦編年第三期）が出土した。

邸宅を限る施設とし

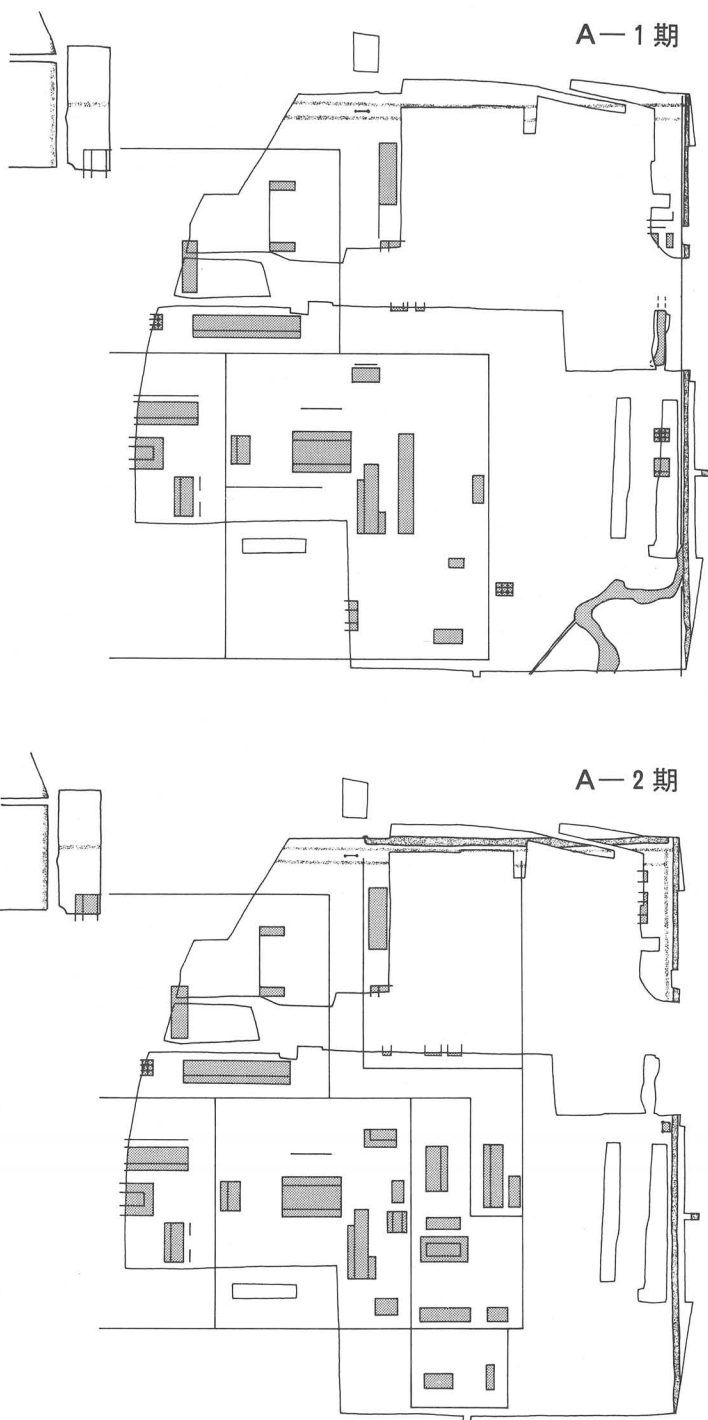


図28 遺構変遷図Ⅰ（1：3000）

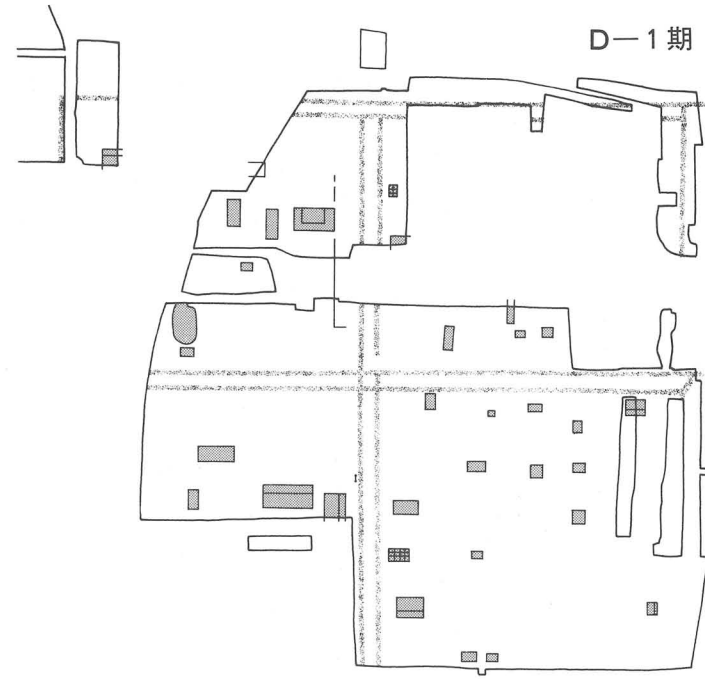
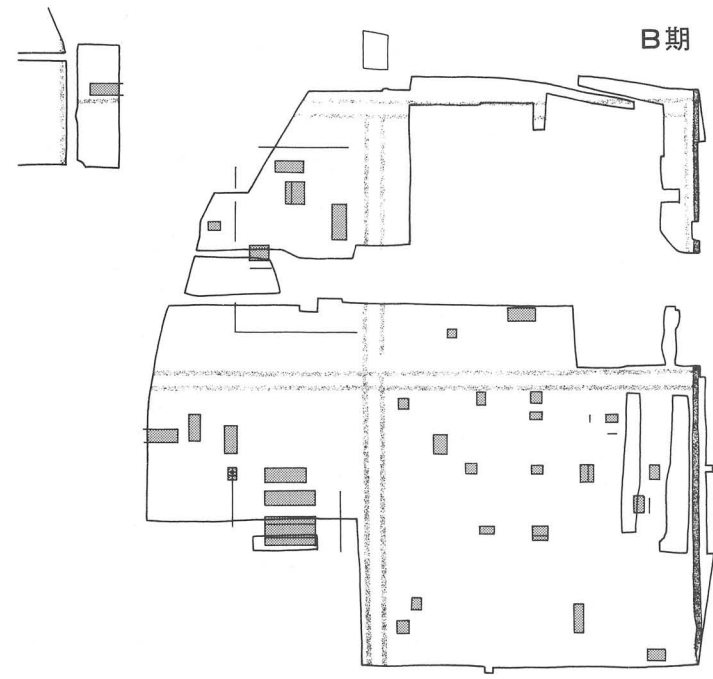
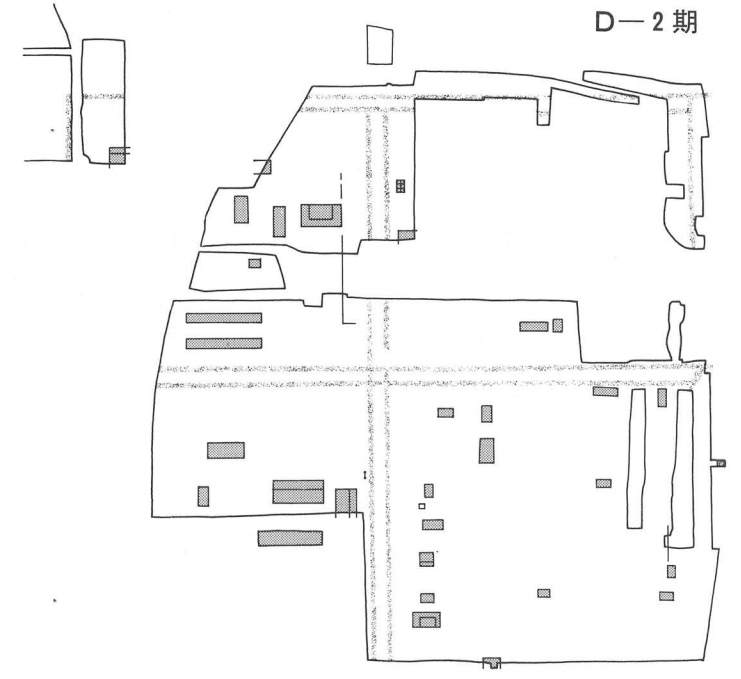
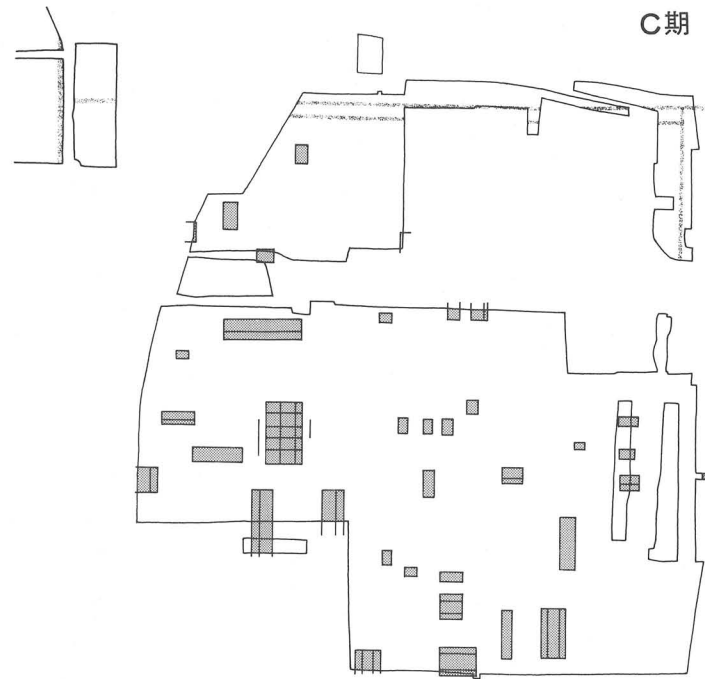
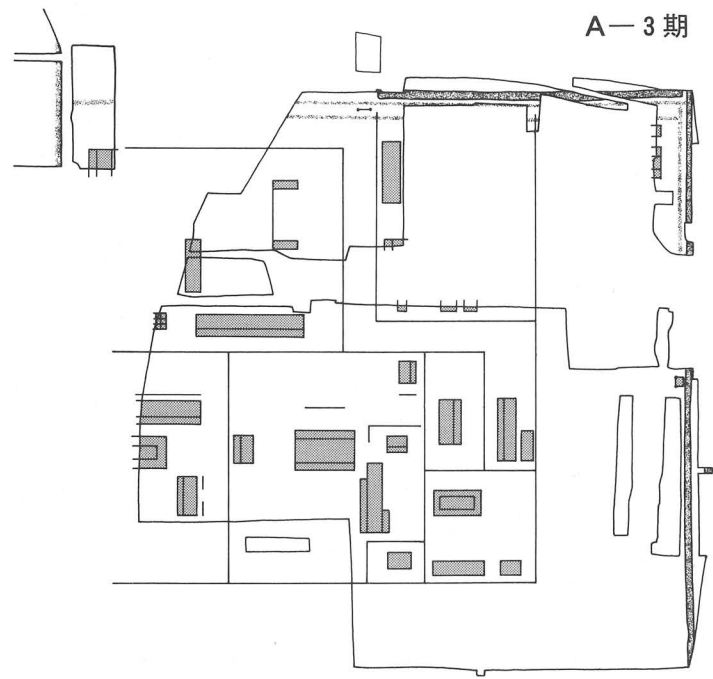


图29 遺構変遷図Ⅱ (1 : 3000)

ては、東二坊坊間路沿いに東面の掘立柱塀SA004がある。西側溝の溝心から西へ10尺の位置にあり、柱間は約5.6m（19尺）となる。旧流路SD005を埋めた整地土上には柱穴がなく、その南と北に延びる。193次調査B区で検出した東面築地の東雨落ち溝SD020より古い。この塀は二条大路沿いにはめぐらないので、北面は当初から築地であると推定される。SA004は北面築地との取り付きを越えて、さらに1間北に延び、SD160に柱穴が切られる。北面築地には、一坪と八坪の境界部に北門SB155が開く。これは、柱間が13尺の棟門である。柱穴の抜取穴から出土した土器により、奈良時代中頃には廃絶することがわかる。大路に門を開くことができるのは、『続日本紀』天平3年（731）9月2日の条の記事によれば三位以上の貴族に限られており、長屋王は平城遷都当時は従三位式部卿であったので、この規定にふさわしいことになる。発掘調査でこのことを確認できた意義は大きい。

A 2 期 邸宅内の区画を改変する。南限の塀SA030は100尺（11間）北に移し、SA037とする。東限の塀SA031は約60尺（7間）東方に移し、SA045とする。SA045は、七坪を条坊計画上で東西に二分する位置にあり、北面築地に取り付き、一部に改修の跡がある。SA037の南にはSA028・029・032による一画（南区画）が附属する。SA032はSA037を越えて北の区画塀SA060に取り付く。その結果、A1期の中心区画は分割され、新たに「東区画」が形成される。SA060Aは東を1間短くしてSA060Bに改修され、SA046・042に連なる。また、新たにSA105・120をつくり、北門からの通路を区画するとともに、「東北区画」を形成する。中心区画と東区画をあわせた大きさは、東西405尺、南北300尺で、東北区画は東西210尺、南北265尺の大きさである。

中心区画では、SB055・059を取り壊し、SB053・054・056に建て替える。SA072は撤去する。東区画には、SB040・041（双堂）やSB039・044などを新たに建てる。東北区画では、SB112・113をSB108・110・114に建て替え、SA123は撤去する。邸宅の東端の倉庫SB007・008は取り壊される。また、SB015なども取り壊し、北方にSB024・026を建てる。西・西北区画では、建物の建て替えはない。

東二坊坊間路沿いの堀SA004は築地に改修する。それに伴ない、邸宅内東南隅の河川SD005を埋め立てる。築地には、七坪と八坪の境界部に東門SB010が開く。控え柱付の棟門で、柱間は約12尺あり、控え柱は東10尺の位置にある。この門は、坪境小路を新たに設置したB期に撤去される。北面築地の北雨落ち溝SD156は、東面築地東雨落ち溝SD020と合流したのち、東二坊坊間路西側溝に注ぐ。南雨落ち溝SD154は、暗渠で東面築地をくぐり、東面築地東雨落ち溝SD020につながる。

A 3 期 南区画とその内部の建物を撤去し、中心区画と東区画内で配置を改変する。東区画では、双堂の後殿SB041を取り壊し、SA042をSA032まで延ばす。また、SA051・052・048・049をつくり、さらに小さな区画に分割する。中心区画では東北隅のSB056をSB057に建て替える。

B 期

奈良時代中頃。各坪の間に坪境小路を設け、1町以下の規模の宅地となる。今年度の調査は一・二・八坪について行なったので、それを中心に述べる。

一坪 東半部に、SA101・102・133・145により構成される断続的に続く区画がある。その中にSB130・137・141・143を配し、SA133の西にはSB135がある。また、32次調査で検出した二条大路上の建物SB3907は、柱穴から出土した土器の年代から、この時期に属する。その西方の東一坊大路東側溝には、橋SX3920をかける。

二坪 7間×4間で南北庇付の主殿SB065と、7間×2間の後殿SB066、柱間が20尺等間で3間×1間の東西棟SB067が坪の東半部に南北に並ぶ。1町規模の大規模な宅地である。西には、SB081・082・084などが配される。総柱建物SB082は布掘り状の基礎地業を行ない、南妻にSA083が取り付く。A期の区画堀SA080の柱穴は、SB082と重複した部分では同一平面上で検出できなかったので、SB082は基壇状の盛土の上に建っていたと見られる。

七坪 小規模な建物が散在し、配置に規格性は見られない。

八坪 調査面積が少なく、詳細は不明であるが、SB107・118がある。また、

二条大路南側溝の北の東西大溝SD160はこの時期に埋められる。

条坊関係遺構 一・二坪と七・八坪の坪境小路SF013（三条条間北小路）、一・八坪と二・七坪の坪境小路SF035（東二坊坊間西小路）と両側溝がつくられる。規模は、側溝の心々でSF013が約6m、SF035が7mである。東二坊坊間西小路の側溝は北の方で途切れているが、これは表土を除去する段階で硬化面とともに剥離したもので、本来は北面築地の南雨落ち溝SD154に続くものであろう。

C 期

奈良時代後半。坪境小路が廃され、宅地の規模が拡大する。二・七坪は坪境小路上の建物SB036の存在によって一体の敷地であったことがわかるが、一・八坪との関係は確認できなかった。しかし、坪境小路の側溝がそれぞれ新旧の2時期あること、この期に属する遺構と坪境小路の側溝との位置関係から、再び4町規模の宅地になると推定できる。

中心的な建物は、二坪の北半部で検出したSB075である。5間×3間の掘立柱建物になると思われるが、従来の知見では捉えきれない平面形をもつ。まず、柱間は場所によって違いがある。南北方向は、南から18尺、16尺、14尺、18尺、14尺であり、東西方向は東から10尺、19.5尺、19.5尺となる。また、南から2間目と5間目の柱筋は、柱間が5間となる。西には2間の塀SA076が10尺の距離であり、柱間は南から25尺、23尺となる。東には23尺の柱間で1間の塀SA074が10尺離れてある。SB075を一棟の建物と見れば、面積は長屋王の主殿に匹敵するが、どのような構造になるかは今後の検討課題である。また、南北方向の柱間の違いを重視すれば、北に身舎が3間×1間で南北に庇が付く東西棟、南に3間×1間の東西棟が並ぶとするのも一案であろう。SB075の南方には、9間以上×3間で西庇付の南北棟SB068と、おそらく同規模になると思われる、東庇付の南北棟SB064が北の妻の柱筋を揃えて東西に並ぶ。SB075の西にはSB078・089・091がある。SB089は7間×2間の東西棟で、東西2間目に間仕切りがある。一坪には、A期のSB100と同じ位置にSB099がある。12間×3間の南庇付き東西棟で柱筋は西でやや南にふれる。桁行の柱間は西から11間は7～8尺

だが、東の1間は20尺となる。他にはSB129・136などがある。八坪にはSB108・110・115・122がある。SB108とSB110は南の柱筋を揃える。

D 期

奈良時代末から平安時代初頭。坪境小路が再び設けられ、1町以下の規模の宅地になる。一・二坪の坪境小路の側溝には、それぞれ一坪と二坪から注ぐ木樋暗渠を検出し、八坪の東端にも木樋暗渠があるので、少なくとも一・二・八坪は築地で囲われていたと見られる。B期と同様、坪ごとに記述を行なう。

一坪 さらにD1期、D2期の2小期に分けられる。

D1期 坪の南部に10間×2間の同規模の東西棟SB094・095が、20尺の距離で柱筋を揃えて南北に並ぶ。柱間は桁行が10尺、梁間が6尺である。坪の東部には5間×3間の三面庇付東西棟SB150がある。東庇の出は12尺、西庇の出は11尺、他の柱間は10尺等間である。東庇は一・八坪坪境小路心から西へ30尺、南庇はSB094の南側柱から北へ150尺の位置にある。また、東庇に柱筋を揃えて南北塀SA103・151がある。SB150の西には、20尺を隔てて5間×2間の南北棟SB139が建つ。他に、SB127・134・157があるが、主殿は発掘区の外にあると思われる。また、第32次調査で検出したSB3871もこの時期のものであろう。なお、SE132から「官厨」と書いた墨書土器、SE096から「地子米」と記した木簡が出土した。

D2期 SB094・095を取り壊して、3間×2間の東西棟建物SB093と池状の遺構SX097をつくる。SB134は東側柱が改修される。他の遺構はそのまま存続する。

SB158とSB159は北面築地南雨落ち溝より新しく、平安時代のものと思われるが、規模や配置から見て、D期に属する可能性もある。

二坪 B期の後殿SB066とほぼ同じ位置に、7間×3間で北庇付の主殿SB069がある。東には、4間以上×3間の東に庇が付く脇殿SB063が建つ。SB069の身舎の北側柱とSB063の北妻は柱筋を揃える。西の脇殿はなく、主殿を中心とした左右対称の配置にはならない。他にSB079・086があるが、遺構の密度

は希薄である。七坪との坪境小路には、棟門SB071が開く。

七坪 D1期～D2期の2小期に分けられるが、両期ともに小規模な建物が散在するだけで、配置に規格性は見られない。

八坪 SB117・121などが散在する。

4 条坊関係遺構

東二坊坊間路と両側溝、二条大路と南側溝、および三条条間北小路、東二坊坊間西小路とその両側溝を検出した。

東二坊坊間路 193次調査A区、B区と198次調査区で道路面と東西両側溝を検出した。西側溝SD002は、193次調査A区では検出面で幅が3m、深さ1～1.2mあり、約70mを発掘。溝の堆積は、最上層（茶灰色土）、上層（灰色粘土）、中層（暗灰色粘土）、下層（暗灰色砂）の4層に分かれる。中層の暗灰色粘土は、調査区北端から10mほどまでではなく、それ以南に堆積している。上層～下層が溝の流れにともなうもので、最上層は溝を埋めた土である。193次調査B区では、幅が検出面で2.0～2.4m、底で1.4m、深さは約0.9mあり、60mを発掘した。堆積土はA区と同じく4層で、最上層（暗黄褐色砂質土）、上層（黒灰色粘質土）、中層（暗灰色砂質土）、下層（暗灰色粘質土）に分かれ、最上層は溝の埋め立ての土である。中層はA区に比べて遺物の量が多い。なお、193次調査B区では、西側溝が二条大路を越えて北へ続くことを確認している。

東側溝SD001は、193次調査A区中央で東に延ばしたトレンチで確認した。深さ約1m、幅4m以上。溝の東側の肩は調査区外にあり、検出できなかった。東西両側溝には含まれる東二坊坊間路は、側溝心々で9m（25大尺・30小尺）と推定され、路面幅は5.5mとなる。また、193次調査B区の南で行なった立会い調査でも東二坊坊間路の西側溝と東側溝を確認した。路面幅は約5.8mであり、A区で検出した路面幅とほぼ同じである。

東側溝は奈良時代を通じて存続するが、西側溝は奈良時代中ごろには埋められる。193次調査B区では、西側溝が廃絶した後、二条大路に面する築地の北雨落ち溝の最上層と暗渠で東面築地をくぐる南雨落ち溝が、西側溝を埋めた上を横断

してさらに東へ流れることを確認した。

二条大路 193次調査B区と、197次・200次調査区で道路面と南側溝SD156、193次調査C区で道路面を検出した。SD156は、幅が検出面で1.3m、深さは0.6mである。また、南側溝SD153のすぐ北で東西方向の大きな溝を確認した。このSD160は幅2.6m、深さ0.9mあり、全長120mをほぼ全掘した。193次調査B区の調査の結果、この溝は西側溝の1.2m西で途切れており、西側溝には流入しないことが判明した。また、西は北門のすぐ東で終わっている。溝の堆積は、最上層（暗褐色砂質土）、上層（炭層）、中層（木屑層）、下層（黒灰色粘土層）の4層に分かれ、上層～下層から木簡、土器、瓦、木器が、最上層からは土器、瓦が多量に出土した。最上層は最終の埋め立ての土で、奈良時代後半の遺物を含む。上層～下層の遺物は奈良時代中頃のもので、年代的な差は顕著ではない。これは、上層～下層が2年程で埋まった状況をすという花粉分析の結果（天理参考館金原正明氏による）とも矛盾しない。

SD160は、当初、二条大路の南側溝ではないかと想定していた。ところが、東西の両端で完全に途切れ、また途中で流入、流出するような施設もないことがわかった。南側溝に相当するのは、SD156であると考えられ、SD160の性格については、出土遺物の整理がまだ十分でなく、また、現在（1989. 5）、二条大路北側溝想定地で発掘調査（第198次）を進めていることもあり、それらの成果をまって明らかにしてゆく必要がある。

三条条間北小路 193次調査A区で七・八坪の坪境小路の路面と南北両側溝を検出した。側溝は上下2層ある。下層の側溝は、まっすぐ東にのびて東二坊坊間路西側溝に注ぐ。上層の側溝は、南側溝は東二坊坊間路の西側手前で北に折れ、北側溝に合流する。北側溝はすでに廃絶した東二坊坊間路西側溝の上を越えて東に延び、東二坊坊間路東側溝に流れ込むと推定される。道路の規模は、側溝の心々で約6mである。

190次調査区では、一・二坪の坪境小路の路面と南北両側溝を検出した。道路の規模は側溝の心々で約6m、路面幅は場所によって違うが、2.5～5mである。

また、路面上には東西、南北方向の溝状遺構があるが、その性格は不明。

東二坊坊間西小路 197次調査で一・八坪の坪境小路の路面と両側溝を検出した。規模は側溝の心々で約6m、路面幅は約4mである。

なお、今年度の調査区から、合わせて18基の井戸跡が見つかった。そのうちの4基は井戸枠が抜き取られていた。残りの14基については、規模、構造を表に示しておく。 (玉田芳英・花谷 浩)

表5 井戸の構造と規模(単位はcm)

遺構番号	井戸枠の構造	規 模	掘形の規模 (NS×EW 深さ)
SE006	縦板組み隅柱横棧どめ・方形	65×65	185×203 (不整円形) ?
SE009	縦板組み隅柱横棧どめ・方形	65×65	180×160 (方形) 273
SE021	縦板組み隅柱横棧どめ・方形	73×64	245×190以上 (不整円形) 218
SE023	上段一縦板組み隅柱(横棧どめ?)・方形 下段一円形曲物2段積み重ね 底に円礫を敷く	74×74 81	350×329 (円形) 158
SE106	縦板組み隅柱横棧どめ・方形	68×75	236×214 (不整方形) 251
SE047	縦板組み隅柱横棧どめ・方形	85×85	253×250 (不整方形) 164
SE058	縦板組み隅柱横棧どめ・方形 底に直径43cmの円形曲物	84×81	193×170 (不整方形) 113
SE096	縦板組み隅柱横棧どめ・方形 底に直径68cmの円形曲物・円礫を敷く	75×72	206×216 (不整円形) 292
SE126	縦板組み隅柱横棧どめ・方形	92×85	186×201 (隅丸方形) 196
SE149	円形曲物2段積み重ね	52・53	155×161 (不整円形) 69
SE132	一木くり抜き・円形	101～109	410×350以上 (不整円形) 306
SE146	円形曲物	58	直径 176 (不整円形) 186
SE148	縦板組み隅柱横棧どめ・方形 底に直径68cmの円形曲物	78×95	155×148 (不整方形) 140
SE153	円形曲物2段積み重ね	64・57	直径 72 (不整円形) 78

5 出土遺物

瓦塼類

今年度に実施した調査でも、これまでと同様、大量の瓦塼類が出土した。各調査区から出土した軒瓦の数量は別表に示したとおりであり、軒瓦以外に多量の丸瓦、平瓦と、若干の鬼瓦、熨斗瓦、面戸瓦、塼が出土している。丸瓦、平瓦と塼には施釉製品があり、軒平瓦にも三彩を施したものがある。

今年度の調査で出土した軒瓦の主要なものを図30・31に掲げた。図30-1・2は、軒丸瓦6272型式A種（以下、「型式」と「種」を省略する）と軒平瓦6644A。長屋王邸の屋根を飾った軒瓦の一組である。

5は6644Aと同文の軒平瓦6644B。焼成前に平瓦部を斜めに切り落とした隅軒平瓦で、顎部も同様に斜めに削り落とす。凹面に模骨痕と粘土板の合わせ目が残る。6644BはA種と同じく7回反転の偏行唐草文だが、これは右端の1単位がなく、6単位となっている。「長屋王家木簡」出土溝SD014から出土した。6644にはB種の他、A種にも隅軒平瓦がある。

3は軒丸瓦6271C。外縁に面違い鋸歯文をおく複弁6弁の軒丸瓦である。C種は6271の中では最も小型である。東二坊坊間路西側溝から出土した。4は、姫寺（左京八条三坊十五坪）と同範の川原寺式軒丸瓦。複弁8弁で、外区は斜縁の面違い鋸歯文である。

図31-1は6348Aa。外区に唐草文と線鋸歯文をおく複弁7弁の軒丸瓦である。

2は6308Iで6682C（12）と組み合わせる。左京二条二坊十二坪で多量に出土した。6291Aa（3）は、6681A（9）と組み合わせる。平城宮第一次大極殿西方官衙（第194次調査）出土瓦（本書P24参照）など、平城宮と同範の瓦である。

4は重圈文軒丸瓦の6012C。第2・第3圈線間がわずかにふくらむ。重郭文軒平瓦6572C（8）と組み合わせると推定できる。

6282G（5）は、6721Ga（11）と組み合わせる。6282-6721は北面築地周辺などを主体に多量に出土したが、なかでもこの2種が最も多い。

6は6316E。平城宮内で多く出土するほか、大和郡山市松尾寺に同範品がある。

7は大型軒丸瓦6225L。10は軒平瓦6688Ab。軒丸瓦6135Aとセットである。
13は6691B。

調査地の軒瓦概観 左京三条二坊一・二・七・八坪での、178次調査から200次調査までの9次にわたる調査で出土した瓦埴類は膨大な量にのぼる。ここでは、これまでに出土した軒瓦をとりあげて、気のついた点を二、三述べておきたい（表6～9）。なお、表は調査回数ごとに集計し、それを一・二・七・八坪の坪ごとにふりわけている。

これまで出土した軒瓦は、既整理分で軒丸瓦877点、軒平瓦878点、合計1755点にのぼり、平城京内の調査としては最も量が多い。出土点数を1a当たりの点数で計算すると、5.9点を数える。左京二条二坊十二坪（奈良市水道局）の14.3点には及ばないが、左京二条二坊十三坪（5.7点）や左京四条二坊七坪（6.1点）とほぼ同じで、平城京内でも最大級の密度である。これは調査区内に坪境小路と北面、東面の築地塀が含まれたことにもよるのであろう。事実、二条大路に面する宅地の北面築地を含む、193次調査B区と200次調査の出土量は、1a当たり各々20.6点、12.6点と群を抜いている。

しかし、井戸や柱穴、宅地内部の整地層、包含層からの軒瓦の出土もかなりの量にのぼり、6225型式L種（図31-7）や6304型式L種のような鳥衾瓦と推定される大型軒丸瓦が含まれていることと、鬼瓦が出土していることは、建物の屋根にも瓦が使われていたことを示している。宅地全体の軒瓦の密度を、1a当たりの出土量で平城宮内の各所と比較すると、居住区域の内裏内部（5.1点）や、官衙区画の大膳職地区（5.0点）といった地域の値に近い。これらの地域には掘立柱建物が建ち並んでおり、左京三条二坊一・二・七・八坪でも同じ様な軒瓦の使われ方がなされていたことが推測できる。

さらに、6644型式に隅軒平瓦（図30-5）があることは、奈良時代の初め、つまり長屋王が居住していた時期に総瓦葺建物が邸宅内にあったと考えるのが自然である。もちろん、この問題を検討するには、これからの整理による丸瓦、平瓦の数量分析を待たねばならないが、神亀元年（724）の太政官符によって平城京

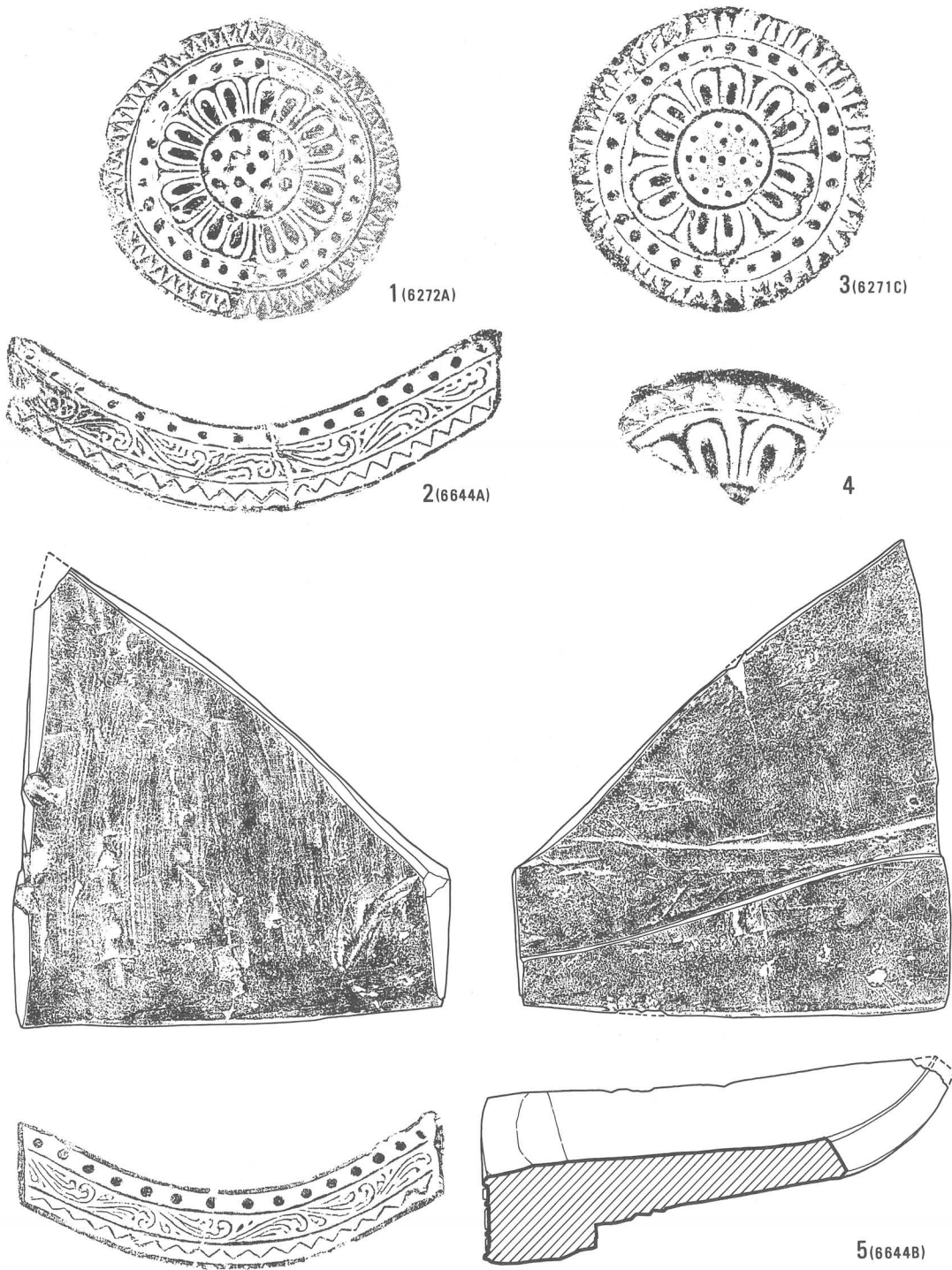


图30 出土軒瓦 I (1 : 4)

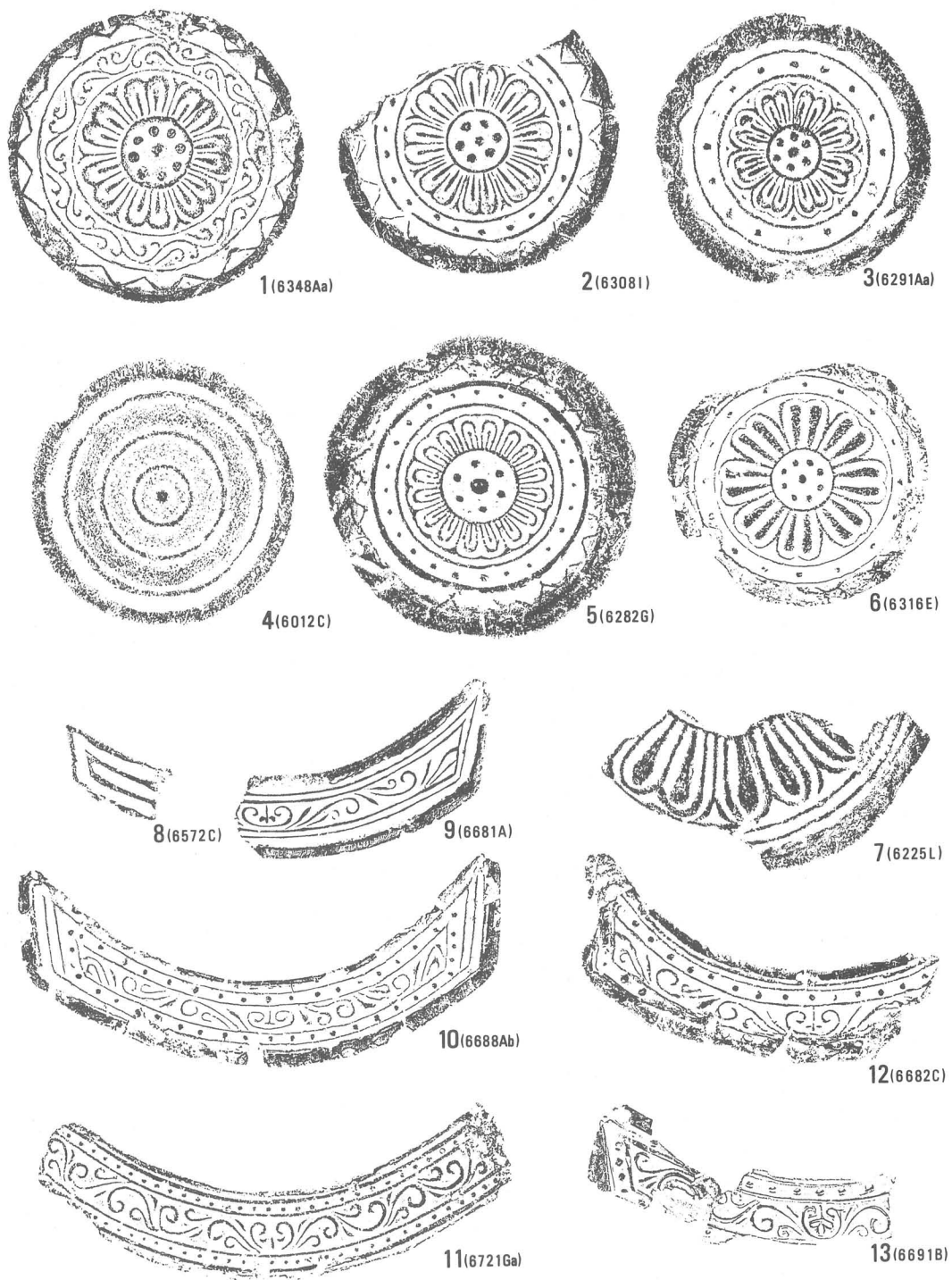


图31 出土軒瓦Ⅱ (1 : 4)

に瓦葺建物が奨励される以前に総瓦葺建物が存在していたことが明らかになれば、その意義は大きい。

次に、軒瓦を時期別に見てみると、平城宮軒瓦編年第Ⅰ期（和銅元年～養老4年）が約15%、第Ⅱ期（養老5年～天平17年）が約31%、第Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）が約38%を占める。第Ⅳ期（天平宝字元年～神護景雲年間）の軒瓦は約3%にすぎず、第Ⅴ期（宝龜年間以降）の軒瓦は出土していない。

この数字を見て気付く特徴の一つは、第Ⅰ期の軒瓦が多いことである。平城京内で第Ⅰ期の軒瓦の比率が10%を越えるのは、これまで例がない。たとえば、調査区の南に隣接する左京三条二坊六坪（宮跡庭園）では、第Ⅰ期の軒瓦は全体の8%、左京二条二坊十二坪では約6%にすぎず、左京三条二坊十五坪（現奈良市役所）では第Ⅰ期の軒瓦は1点も出土していない。

しかも、左京三条二坊一・二・七・八坪の場合、第Ⅰ期の軒瓦では、6272-6644の組み合わせが約半数を占め、平城宮と同範の6284-6664の一組は数が少ない。6272-6644の一組は、藤原宮式軒瓦の文様に類似するが、これまで藤原宮での出土例はなく、平城京内での出土が顕著な軒瓦である。平城京では、観音寺推定地（右京九条一坊十一～十四坪）南辺の九条大路北側溝から比較的多量に出土した。平城京外では、採集資料ではあるが、軒丸瓦6272Aが大窪寺（橿原市）から、6272Bが安倍寺（桜井市）と片岡尼寺（王寺町）から出土している。「長屋王家木簡」には「片岡司」がみえ、片岡尼寺の同範瓦はそれとの関連で注目される（大窪寺と安倍寺の瓦を調査するにあたっては、天理参考館、近江昌司先生、太田三喜氏にお世話になった）。

第Ⅱ期と第Ⅲ期には、平城宮と同範の軒瓦が主体を占める。第Ⅱ期には、6311-6664 D・F、6313-6685、6285 A-6667 A、6135-6688、6308-6663 A・B、6291-6681の組み合わせがある。6285 A-6667 Aの一組が平城宮での出土が少ないのと、他に平城宮内では出土しない6308 I-6682 B・Cの組み合わせがごくわずかにある以外は、いずれも平城宮で多用される瓦である。この6組のうち前2組は養老～神龜年間頃までのものであるが、後3組は長屋王自尽後の天平年間

表6 次数別軒丸瓦出土点数

次数 形式	七 坪			八 坪			二 坪		一 坪			合 計
	178	184	193 -AD	186 -Nホ	193-B	200	186-W	190(S)	190(T)	195	197	
6273	2				2	1			1		4	10
6274	4							1				5
6275	9	3		3	3		1		4		4	24
藤原宮式	18	3		6	7	2	1	1	7		9	54
6272	20	19	1	4	2		5					51
6284	2	5			2			1	2	1	4	17
第 I 期	40	27	2	11	11	2	6	2	11	1	19	132
6135	1	15	1		3	5	5	10	5	1	9	55
6285	4	2		3								9
6291								1	2		4	7
6308	1	9	2	5	4	4	3	1	6	2	17	55
6311	6	8	4	3	11	3	3	3	1	1	11	49
6313	3	5	1	1	2	4	2		2	2	9	31
6314	1		1	1	4		1					9
第 II 期	18	46	10	20	28	16	16	17	17	7	52	247
6131	1	1		1		1	1			1	6	12
6133	2	4	1	3			1		1	1		13
6225	6	34	4	2	6	4	3	8	6	2	7	78
6282	5	34	4	16	32	20	7	9	14	6	49	196
6316	4				1	4			1		2	12
6320		1							1			2
第 III 期	21	77	10	23	39	29	13	17	23	11	65	328
第 IV 期	4	2					1			1	1	9
第 V 期												
合 計	104	192	27	74	92	48	52	41	61	25	102	877
	323			214			93		247			

表7 次数別軒平瓦出土点数

次数 型式	七 坪			八 坪			二 坪		一 坪			合 計
	178	184	193 -AD	186 -N木	193-B	200	186-W	190(S)	190(T)	195	197	
藤原宮式	2	10		3	3	1	1			1	4	25
6644	11	21	6	9	1		1	2	3	2	4	60
6664	2	13		8	1	2	7	1		2	4	40
第Ⅰ期	16	48	6	19	5	3	9	3	3	5	13	130
6663AB	1	9	3	5	1	3		3	1	1	14	41
6664DF	8	12	4	6	9	9	3	1	6	18	13	89
6666		2	1				3			1		7
6667	9	6	1		5		1				3	25
6671		9	2		2							13
6681	5	6	1	2	1	1			1	4	2	23
6682	1	2	1	1	1	5	1	1		2	3	18
6685	2	7	3	5	5	1	4	2		1	4	34
6688	1	13			1	1	4				6	26
第Ⅱ期	29	74	18	21	27	20	16	7	8	29	48	297
6663	13	17	3	3	3	2	1	8	3	1	10	64
6691	5	15		15	1	2	3		3	2	9	55
6719		4								1	2	7
6721	16	44	11	15	21	9	16	10	11	5	46	204
第Ⅲ期	36	80	13	33	25	14	21	18	17	9	68	334
第Ⅳ期	6	17	3	1	4	1	2			1	2	37
第Ⅴ期												
合 計	110	243	43	85	66	40	53	30	29	44	135	878
		396		191			83		208			

表8 次数別・時期別 軒瓦出土点数

次数 時期	七 坪			八 坪			二 坪		一 坪			合 計
	178	184	193-AD	186-Nホ	193-B	200	186-W	190(S)	190(T)	195	197	
第Ⅰ期	56	75	8	30	16	5	15	5	14	6	32	262 (14.9%)
第Ⅱ期	47	120	28	41	45	36	32	24	25	36	100	534 (30.4%)
第Ⅲ期	57	157	23	56	64	43	34	35	40	20	133	662 (37.7%)
第Ⅳ期	10	19	3	1	4	1	3			2	3	46 (2.6%)
第Ⅴ期												
総 計	214	435	70	159	158	88	105	71	90	69	296	1755 (100%)
	719 (41.0%)			405 (23.1%)			176 (10.0%)		455 (25.9%)			
1aアタリ	3.1	7.3	7.6	6.1	20.5	12.6	2.8	5.5	6.4	4.2	8.6	5.9

表9 主要な軒瓦の自み合わせと その出土点数

次数 型式	七 坪			八 坪			二 坪		一 坪			合 計	
	178	184	193-AD	186-Nホ	193-B	200	186-W	190(S)	190(T)	195	197		
6272	20	19	1	4	2		5					51	第Ⅰ期
6644	11	21	6	9	1		1	2	3	2	4	60	
6284	2	5			2			1	2	1	4	17	第Ⅰ期
6664	2	13		8	1	2	7	1		2	4	40	
6311	6	8	4	3	11	3	3	3	1	1	11	49	第Ⅱ期
6664DF	8	12	4	6	9	9	3	1	6	18	13	89	
6313	3	5	1	1	2	4	2		2	2	9	31	第Ⅱ期
6685	2	7	3	5	5	1	4	2		1	4	34	
6285	4	2		3								9	第Ⅱ期
6667	9	6	1		5		1				3	25	
6308	1	9	2	5	4	4	3	1	6	2	17	55	第Ⅲ期
6663AB	1	9	3	5	1	3		3	1	1	14	41	
6135	1	15	1		3	5	5	10	5	1	9	55	第Ⅲ期
6688	1	13			1	1	4				6	26	
6225	6	34	4	2	6	4	3	8	6	2	7	82	第Ⅲ期
6663	13	17	3	3	3	2	1	8	3	1	10	64	
6282	5	34	4	16	32	20	7	9	14	6	49	196	第Ⅲ期
6721	16	44	11	15	21	9	16	10	11	5	46	204	
6691	5	15		15	1	2	3		3	2	9	55	

注) 178・184・195・197・200は各々調査次数を示す。186-Nホは186次北区と186次補足区西区を、193-ADは193次A区と193次D区を示す。また、190(S)は190次調査区のうち6AFI-S地区を、190(T)は6AFI-T地区をさす。坪境小路両側溝から出土した軒瓦は、178・184次調査と193次A区は七坪に、190次調査区は二坪に、197次調査区は一坪に含めた。

(第Ⅱ期の後半)と推定される。6135-6688、6308-6663A・B、6291-6681、の3組が第Ⅱ期軒瓦の約4割を占めていることは、長屋王の変の後にもこの地でなんらかの修造が行われていたことを示すものといえよう。

第Ⅲ期の主要な軒瓦には、6225-6663C、6282-6721の2組と、組み合う軒丸瓦が不明の軒平瓦6691Aがある。量的には、6282-6721の組み合わせが全時期を通じて最も多い。二条大路南側溝の北側の東西大溝SD160では、最上層の暗灰褐色砂質土から6282-6721が多量に出土した他、炭層、木屑層にもこの軒瓦が含まれているので、北面築地は第Ⅲ期にこの軒瓦の組み合わせが使用されているとみてまちがいない。ただし、北面築地の雨落ち溝埋土上面にあり、平城京廃絶時に屋根に葺いたままの状態で落下したと推定される瓦は、軒先にも普通の平瓦を使っているので、その後の葺き替えでは軒瓦を追加使用しなかったらしい。

また、坪境小路周辺には、第Ⅲ期の軒平瓦6691Aの分布が目立つ。6691Aは、法隆寺東院では6285Baと組み合い、その後、恭仁宮では6320Aaと組み合う。平城還都後の平城宮第二次大極殿院では6320Ab、大極殿閣門と南面回廊では6296Aと組み合うが、今調査区では、このいずれも量的に整合しない。6691Aが坪境小路の設置時期を示すとすれば、その時期は、恭仁京からの還都後であることになる。坪境小路の設置に伴って撤去される、遺構変遷A3期の中心区画南辺の掘立柱塀SA037の柱抜き穴から平城宮第Ⅲ期の軒平瓦6663Cが出土したことも、これと矛盾しない。

以上、これまでの整理過程で気付いた点を記したが、今後、丸瓦、平瓦や道具瓦の整理が進めば、さらに興味深い事実が判明し、平城京内での屋根瓦の実態を解明する大きな手がかりがえられるであろう。(花谷 浩)

土器・土製品

各調査区から大量の土器・土製品が出土した。土器はほとんどが土師器と須恵器で、少量の施釉陶器、製塩土器を含む。土製品には硯・土馬・土錘・ミニチュア土器などがある。以下、「長屋王家木簡」が出土した溝SD014、二条大路南側溝の北の東西大溝SD160、それと一坪の井戸SE096・132から出土した土

器について概観し、次いで施釉陶器について記すこととする。

SD014出土土器 和銅4年(711)～靈龜2年(716)の紀年木簡と共伴して、大量の土師器、須恵器が出土した。土師器は、杯A・杯B・杯B蓋・杯C・椀C・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・高杯・盤・甕、須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・盤・壺・甕などがある。須恵器は土師器に比べて出土量が少なく、ほぼ1割程度である。土師器杯類は、放射二段暗文や連弧暗文をもち、a手法、b手法で調整するものが多い。これらの土器は短期間に一括して捨てられた状況であり、紀年木簡を伴ったこともあって編年上の基準資料としての価値が高い。また、これまで類例の少なかった平城京内での平城宮土器Ⅰ・Ⅱの良好な資料であるばかりでなく、「長屋王家木簡」の中に、下に示したような土器の製作に関する木簡があり、対応関係が注目される。

・土師女三人瓮造女二人雇人二□(表)

・受曾女九月六日三事□□(裏)

この木簡によって、長屋王邸内には土師器をつくる女性(工人)がいたことがわかる。また、別の木簡には「奈閉作」という記述も見える。出土した土器と木簡との間に関連を認めれば、SD014から出土した土師器の食器や煮炊具は、これらの工人の製作による可能性があることになる。土師器の生産に関する文献資料はこれまで皆無であると言える状況であり、そうした生産の実態と、生産と消費が同一遺跡内で行なわれていたことが明らかになれば、その意義は大きい。

SD160出土土器 出土した土器は、これまでに水洗が終了したものだけでも、整理箱で既に300箱を越えた。単一の遺構からの出土量としては、これまでの調査の中でも最大級のものである。溝の堆積は最上層～下層の4層に分かれ、土器は各層ともに多量に出土した。最上層出土の土器は灰釉陶器を含んでおり、最終の埋め立てに伴うものである。上層～下層の土器はほぼ平城宮Ⅱ・Ⅲに限られ、天平3～10年(731～738)の紀年木簡を共伴した。土器には層位ごとに年代の違いは認められず、上層～下層ともに平城宮Ⅱ・Ⅲの土器が混在して出土するという状況にある。また、層位を越えて接合する例もあり、上層～下層の土器は一

括品としての性格をもつと考えられる。完形品で出土したり完形に復原できる土器が大量にあり、かつ土師器、須恵器ともにほとんどの器種を揃えることから、なんらかの場所で使用していた一式の土器を、不用になったので一括して廃棄したものであると推定できる。総長120mにおよぶ溝を完掘したので、土師器、須恵器ともに器種構成を知ることができるなど、資料的価値は高い。また、器形、胎土や調整から東日本で作られたと思われる土器も一定量存在していること、黒色土器A類も出土していることなど、興味深い事実もある。

このように、SD160出土の土器は質・量ともに豊富な良好な資料である。数量的な分析をはじめとして、これからの検討で明らかになることに期待される。また、共伴した大量の木簡との関連も興味深い問題であるが、詳しい検討は200次調査の成果をまっけて行ないたい。

SE096出土土器 (図32-1~16) 土器は、掘形、井戸枠内埋土から出土し、主体は平城宮Vのものである。土師器には杯A(7・8)・杯B(2)・杯B蓋(1)・椀A(4~6)・皿A(9・10)・皿C(3)・高杯(11)・甕(12)、須恵器には杯A・杯B・杯B蓋(13)・皿B(15)・皿C(16)・壺A蓋(14)・甕がある。この井戸からは「地子米」と記した木簡が出土した。

SE132出土土器 (図32-17~31) 土器は主として井戸枠内から出土し、掘形出土の土器は少ない。井戸枠内は平城宮Vのものである。土師器には杯A(17・18)・杯B・椀A(19~25)・皿A(26・27)・高杯(29・30)・甕(28)、須恵器には杯A(28)・杯B・杯B蓋(31)・壺L・甕がある。21には「官厨」の墨書がある。

施釉陶器 SE021から三彩小壺、SD160から三彩壺、包含層から唐三彩が出土した。SE021出土の三彩小壺は、肩の張る器形で、肩部に2個、胴部下半に1個の把手が付く。肩部の把手と胴部下半の把手は直交する位置にある。口縁端部を欠くが、ほぼ完形で出土した。残存高8.8cm、最大径2.5cmをはかる。唐三彩は椀の破片と考えられ、内外面に白・黄・緑・青色の釉をかける。平城京からの出土例としては、4遺跡目である。(玉田芳英)

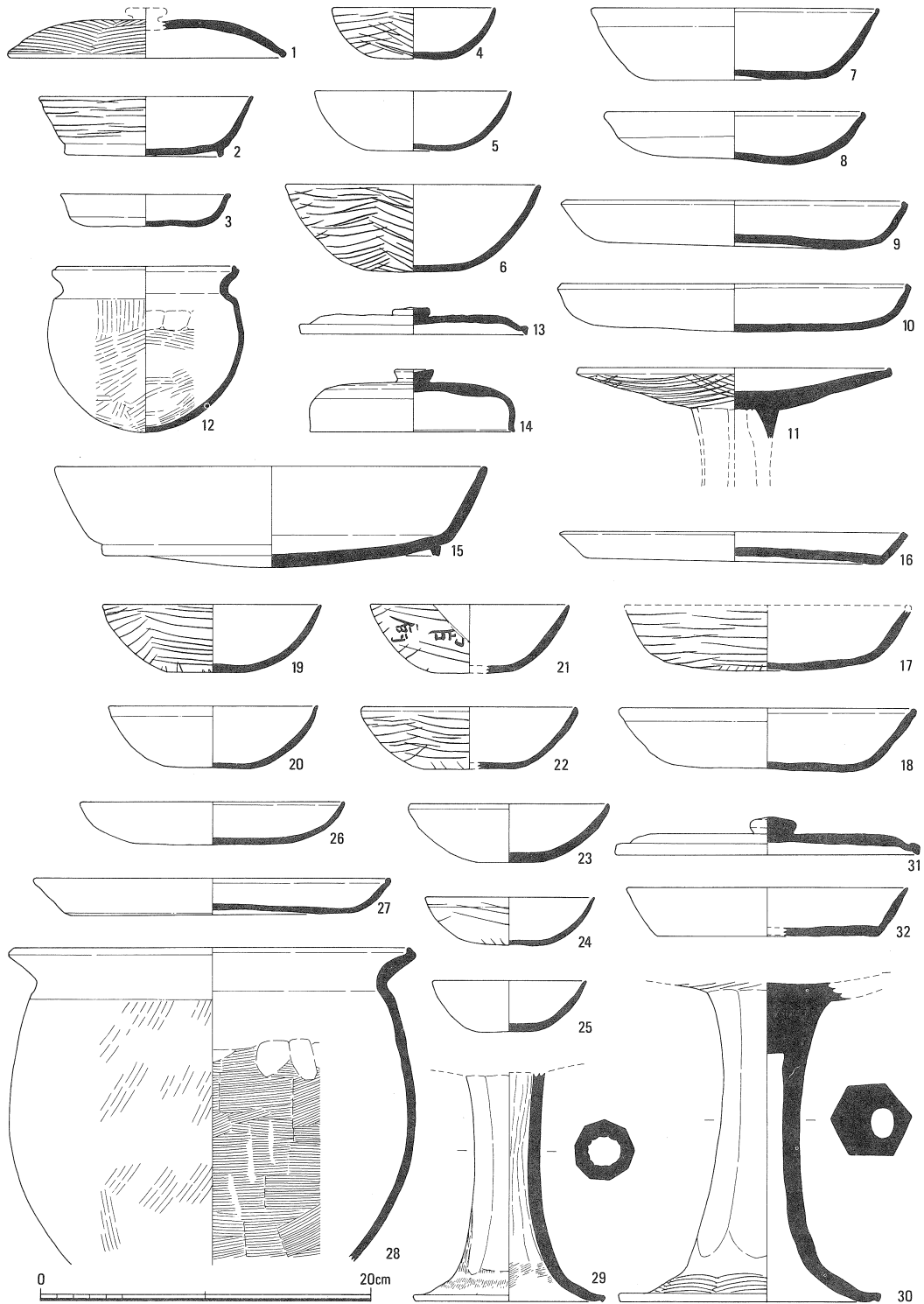


图32 出土土器 (1 : 4)

木製品

「長屋王家木簡」の出土した溝SD014、東二坊坊間路西側溝SD002、東西大溝SD160、それに各所の井戸などから大量の木製品が出土している。内容は、食事具、容器、祭祀具、工具、装身具、遊戯具など多岐にわたっている。それぞれの遺構での状況をみると、「長屋王家木簡」出土溝SD014では、人形、斎串、鳥形、刀形など、祭祀に用いた木製模造品のほか、曲物容器、しゃもじ、それに広口容器の蓋と考えられる大小さまざまな円板が多数埋没していた。また後述するように、細長いくり抜きの木箱と蓋10数点や、木履2点が出土したことも注目される。

坊間路西側溝SD002からは、各種の木製模造品や曲物容器、蓋板のほかに、人の横姿をしたマリオネット（あやつり人形）2点や、八角柱形サイコロなども出土している。東西大溝SD160でも、多くの木簡に伴って各種の木製品が大量に出土している。その中には、曲物容器の底板に多数の小円孔をあけた蒸し器、曲物容器底板の外面に字を陰刻し墨を点じた遺品、特殊な技法の漆器、荒目の布を黒漆で固めてつくる冠帽の漆沙冠など、注目すべき製品が少なくない。

「長屋王家木簡」出土溝、東西大溝とも、木簡が多く埋没していたので、埋土ごと取り上げており、大部分は、まだ水洗い作業がおよんでいない状況にある。従って、今後資料が増加することは確実であるが、この機会に、これまでにわかった二、三の事柄について報告しておく。

木履 「長屋王家木簡」溝SD014から2点が出土。そのうちの1点は、底部を失なうが、甲から爪先部分が残りに、小口は平坦面をなす。他の1点は踵底部ちかくの破片であり、腐食が著しい。前者は残存長11.8cm、小口部分の残存幅9.1cm。

平城京内での木履の出土例として2例目。従来、木履の初現時期については平安時代に下がるとも考えられていたが（『木器集成図録 近畿古代篇』 奈良国立文化財研究所史料第27冊 1985）、この資料によって奈良時代初めにさかのぼることが確実となった。

くり抜き箱 3月末現在、箱身8点、箱蓋6点を確認している。ヒノキの角材をくり抜いて身とする。蓋は2種類がある。いずれも板材の内面周囲を削り、中央

部を突出させて合わせ蓋とするが、上面を甲高に作るものと平らに作るものがあり、従来の同種の箱と共通の特徴を備えている。「長屋王家木簡」溝SD014からは箱身と蓋が合わせて13点出土し、完形の箱もいくつかある。このくり抜き箱は、一木をくり抜く点と、極端に細長い点が、史料にみる奈良時代の箱とはやや異なる。そこで以下に大きさと使用法について検討しておこう。

従来の出土例も加えて、奈良時代の箱の法量と、その内法について法量の分布を表10で示した。これまでの出土例では、内法の長さが30cmをこえ32cm前後で、同じく幅が3cm以上5cm以下であること（身9～11、蓋7～10）、また、深さが幅の $\frac{1}{2}$ に達しない2cm未満の浅く扁平な箱（身9～11）のあることがわかってきた。しかし、今回の出土資料で、内法の長さが30cm未満の比較的短いもの（身2、蓋6）があること、深さが幅の $\frac{1}{2}$ をこえ、もしくは幅と同等の深さのもの（身1・3・4）があることがわかった。

この箱の使用法を知るものに、坊間路西側溝SD002から出土した箱蓋（蓋7）がある。この表面には「□□并資人等上日帳」（第178次）とあって、そうした文書類を入れたものであろう。奈良時代の紙の幅は、正倉院文書などから27cm前後～30cm前後であったことが知られ、箱の内法は文書の紙幅と一致する。ところで、文書には、書状と巻物がある。一帳の紙の長さが30cm～50cm程で、十数帳を貼継ぐとすると、軸に巻いた巻物の場合、その直径は4cm～5cm程となる。また、折帖にした場合は、折幅を4cm前後とすると、厚さは数cmから10cm前後となる。表10からは、内法の幅と深さが4cmをこえるものはなく、深さは2cm前後のものが多い。従って、これらの箱の多くは書状を入れたのであろう。しかし、箱身1のように内法の深さと幅がほぼ同じ寸法のものについては、紙を貼継いでいく「上日帳」などの巻物を入れた可能性もある。ただし、その場合には、蓋をして上からある程度圧縮できるような、軸に巻かない形と思われる。なお、正倉院事務所の木村法光氏の御教示によれば、正倉院には、類似の箱が一例あり「澤栗木箱」と呼んでいる。表に「勅書櫃」と墨書があり、それに該当する文書が弘安年間に降ることから、箱自体平安末期と考えられている、という。

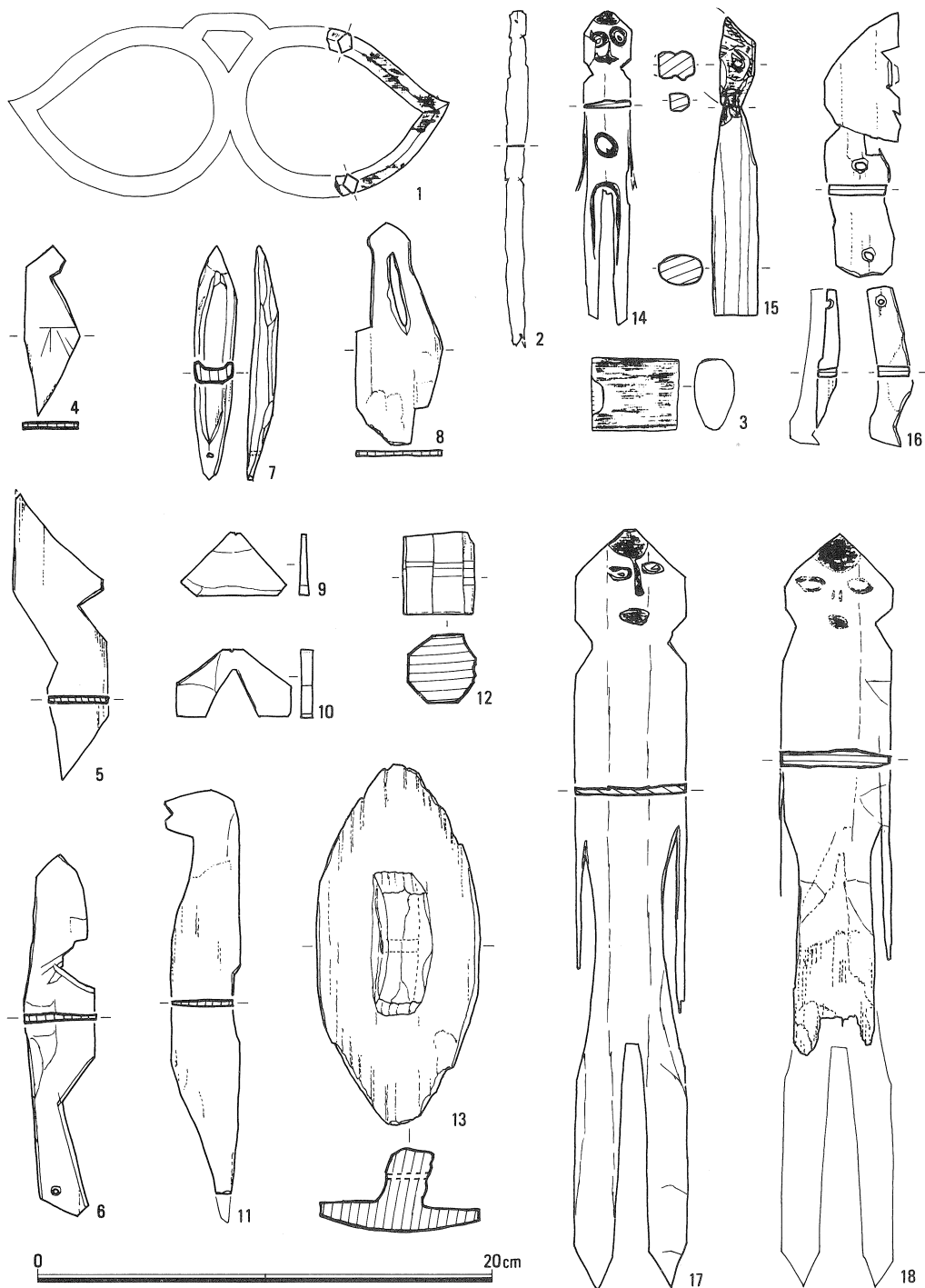


図33 出土金属製品・木製品Ⅰ（1：3）

- | | | | | |
|-----|-----|------|-------|-------------------------|
| 馬具 | 1 | 舟形 | 7 | SD160:1~3, 5~7, 17, 18, |
| 銅人形 | 2 | 人形 | 15~18 | SD014:4, 8~11, 13 |
| 刀装具 | 3 | サイコロ | 12 | SD002:12, 15, 16 |
| 鳥形 | 4~6 | 琴柱 | 9・10 | |
| 馬形 | 11 | | | |

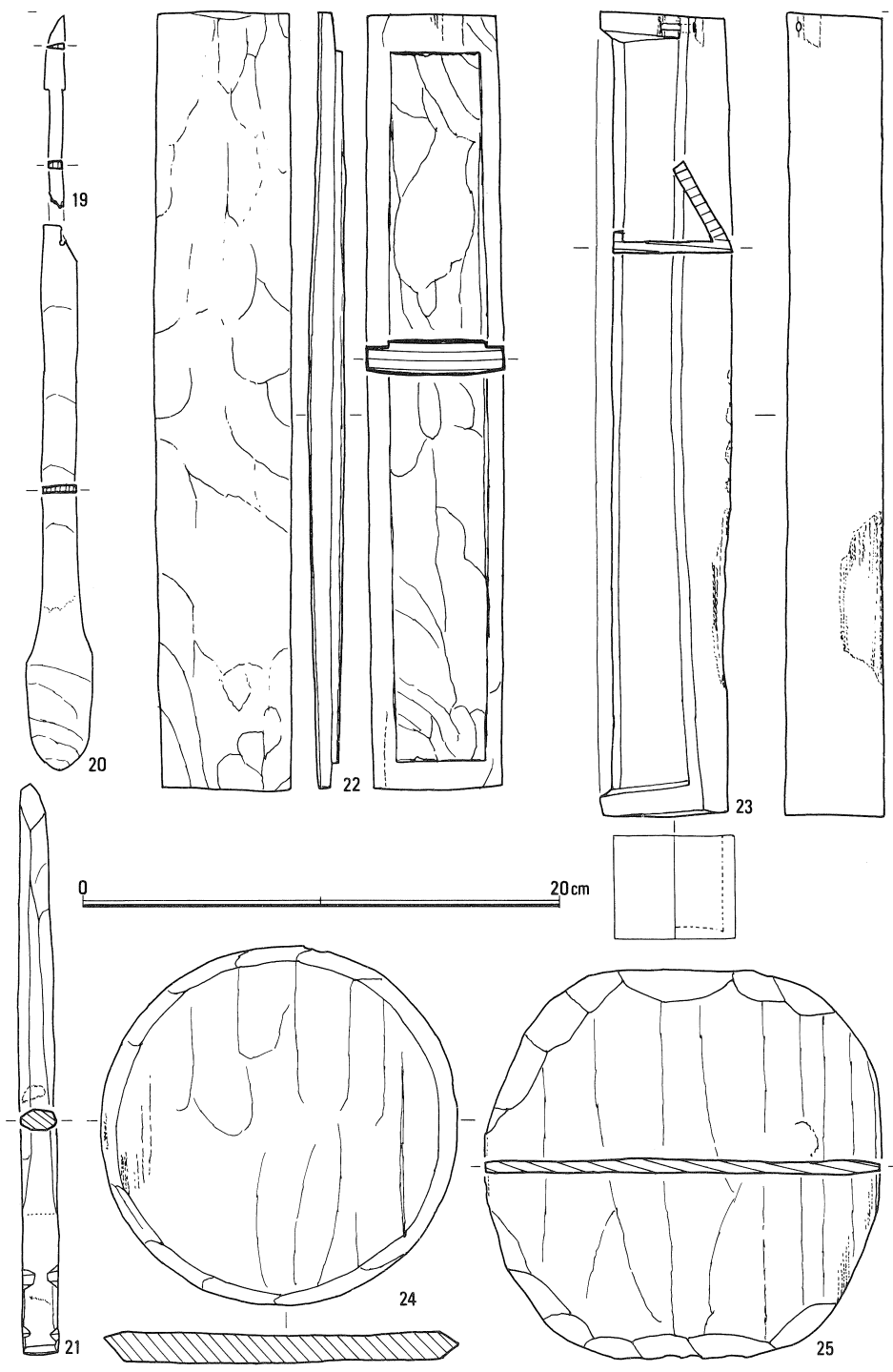


図34 出土木製品Ⅱ (1:3)

工具形	19	くりぬき箱	22・23	SD002:19
杓子形	20	蓋	24・25	SD014:20~25
刷毛	21			

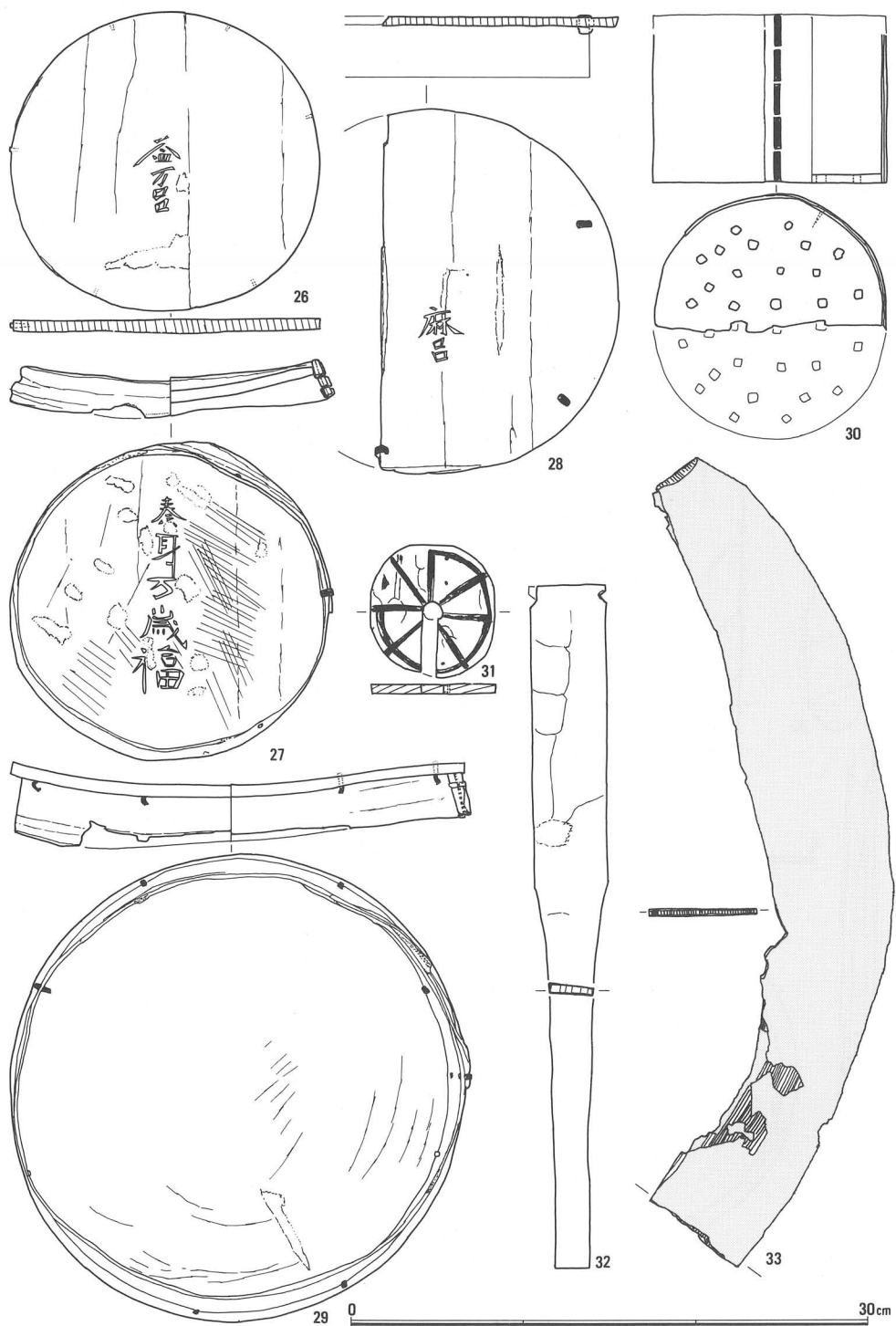


图35 出土木製品Ⅲ (1:4)
 曲物 26~30 SD014:32
 円板 31 SD160:26~31, 33
 封型木筒 32
 特殊漆器 33

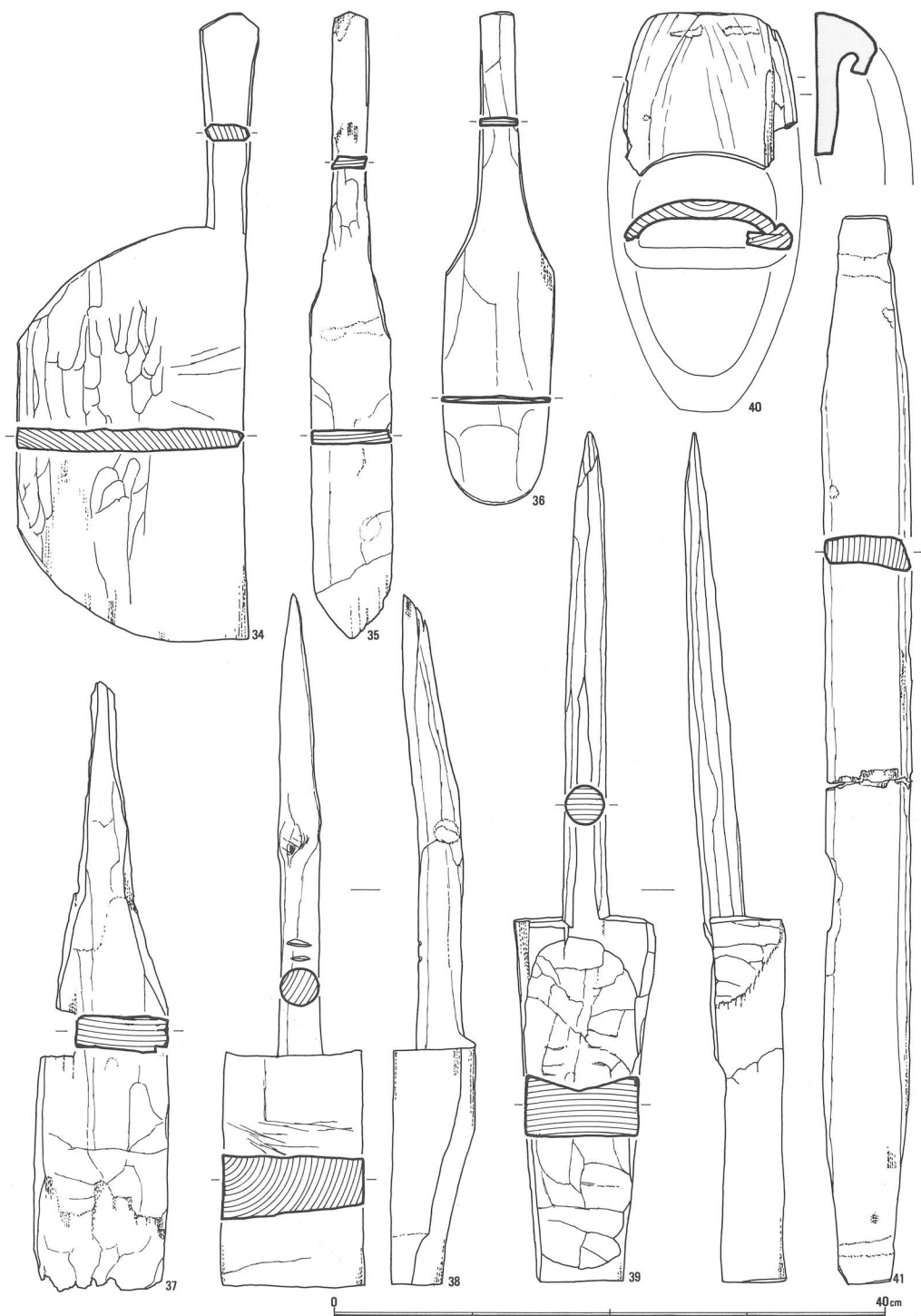


図36 出土木製品Ⅳ (1:5)

杓子 34~37 SD014:36・40 SB131:39

叩き板 38・39 SD160:34・35 SE096:41

木履 40 SB050:38 SE047:37

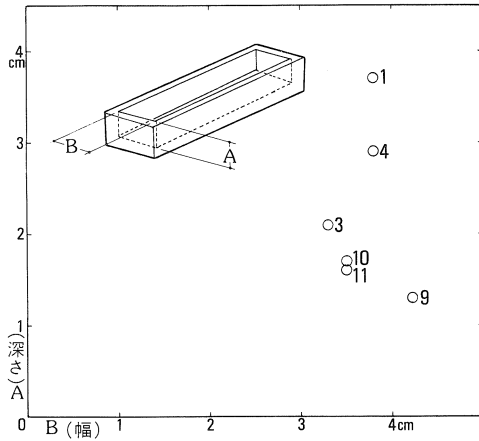


図37 箱身内法の幅と深さ

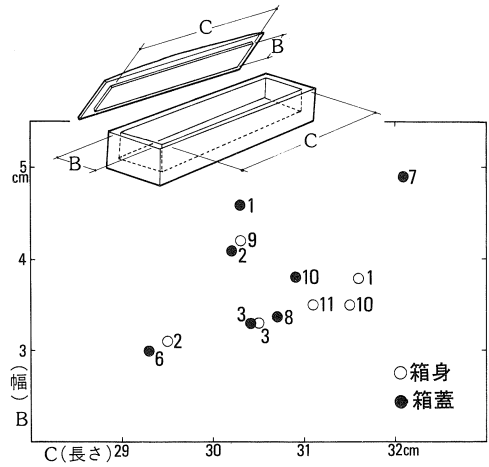


図38 箱身内法と箱蓋内面凸部の長さとは幅

表10 平城京・平城宮出土のくり抜き箱法量表

箱蓋 (単位cm)

	出土地	外寸 幅	長さ	凸部 幅	長さ	厚さ	備 考
1	木簡溝	6.4	34.5	4.6	30.3	1.4	完形
2	木簡溝	5.8	33.0	4.1	30.2	1.5	完形
3	木簡溝	5.0	33.0<	3.3	30.4	1.0	端部欠、身の3とセットか
4	木簡溝	5.3	31.5<	2.7	28.5<	1.6	端部欠
5	木簡溝	4.7	31.3<	3.2	29.9<	1.6	端部欠、身の1とセットか
6	SD 160	(5.4)	34.7	(3.0)	29.3	1.4	½残る
7	西側溝	5.1<	35.6	4.9	32.1	1.0	「資人上日帳」墨書
8	SD2700	4.8	33.8	3.5	30.7	1.2	完形
9	SD2700	6.8	24.5<	4.7	23.2<	1.1	½残る
10	SD3715	6.6 (34.9)		3.8	30.9	0.9	一端欠、甲平担

箱蓋
 1～5 今年度調査SD104
 6 東西大溝SD160
 7 東二坊坊間路西側溝SD002
 8・9 平城宮内裏東方の溝
 (第139次)
 10 第一次朝堂院東方の溝
 (第140次)
 箱身
 1～8 今年度調査SD 014
 9 平城宮第139次調査
 10 平城宮第140次調査
 11 東一坊大路西側溝(第39次)

箱身 (単位cm)

	出土地	外寸 高	幅	長さ	内法 深	幅	長	厚	備 考
1	木簡溝	4.1	4.7	33.7	3.7	3.8	31.6	0.4	蓋の5とセットか
2	木簡溝	2.6<	4.5	30.8	2.0<	3.1	29.5	0.6	½残る
3	木簡溝	3.3	5.1	34.1	2.1	3.3	30.5	1.2	長辺側板一部欠、蓋の3とセットか
4	木簡溝	3.9	4.9	25.4<	2.9	3.8	23.5	1.0	½以上欠、習書有
5	木簡溝	1.8<	2.8<	19.8<	1.2<	1.8<	18.8<	0.6<	½残る
6	木簡溝	1.2<	3.1<	16.8<	0.6<	2.5<	15.8<	0.6<	½残る
7	木簡溝	2.2<	4.4	18.4<	1.2<	3.0	16.9<	1.0	½残る
8	木簡溝	2.3<	4.2	13.3<	1.4<	2.9	11.5<	0.9	½残る
9	SD2700	2.3	5.0	32.1	1.3	4.2	30.3	1.0	両小口一部欠
10	SD3715	2.4	5.6	34.5	1.7	3.5	31.5	0.7	両小口欠
11	SD5050	2.7	6.0	34.0	1.6	3.5	31.1	1.1	完形、習書有、木簡番号3132

() は推定値

特殊な漆器 東西大溝SD160から出土した。現状は、偏平なやや環状で、現存長47cm、同幅7.5cm、厚さ0.45cm。もとの器物を特定できないが、特殊な技法の製品である。すなわち、イチイ科のカヤの細長い薄板を同心円状か螺旋状に巻いて素地とし、表裏に布着せをして下地を施し、黒漆を塗る。下地を含め漆膜は厚く、表面では布の縫い合わせ痕がわからない。素地の薄板は幅が2mm弱、厚みが1mmから1.2mmほど。重ねは約40条が確認できる。レトゲン写真によると、重ね合わせた薄板を縛った痕跡はなく、漆などで接着しているのであろう。同じ器物の破片が、現在進めている198次調査で検出した溝からも出土している。

類似の技法は、正倉院宝物の漆胡瓶（北倉43）、銀平脱合子（北倉25・154）、漆冠筥（北倉157）などに認められ、発掘品としては、滋賀県彦根市松原内湖遺跡の、奈良時代に属する漆器の断片がある（中川正人「松原内湖遺跡出土巻胎漆器断片の技法について」『滋賀考古学論叢4』1988.3）。いずれにしても奈良時代の木工・漆工技術を解明する上で重要である。

陰刻のある曲物 全部で4点がある。いずれも、曲物容器の蓋板あるいは底板の外面に字を陰刻し、墨を点ずる。陰刻は「秦身万歳福」、「益万呂」、「麻呂」、「□一人」とある。こうした例は従来ほとんどないこと、双鉤鎮墨という特殊な方法を取っていることなどから、特定の行事に関連した一括品か。

サイコロ 坊間路西側溝SD002から出土した木製のサイコロは、長さ3.6cm、直径3.2cmの八角柱状棒の各側面に、1本から8本の細い切れ目を順にめぐらせたもの。作りは粗雑である。

叩き板 南北棟建物SB131の南妻柱列東柱穴、SB050の柱穴から叩き板が出土した。掘立柱の礎板に転用していたもの。ヒノキ？の厚板から叩き部と握り部を作る。叩き部の外面はかなり摩耗している。民具例には、萱（藁）葺屋根を葺く際に使う叩き板があり、その形態が本品に酷似する。ただし、民具例は長さが1.5m以上あり、本例に比べるとかなり長い。

漆器大鉢 SB078の東北隅の柱穴の柱抜取穴から出土したもので、柱穴に重なって現代の攪乱坑があったためか、上半部を欠失する。復原すると口径が45cm、高

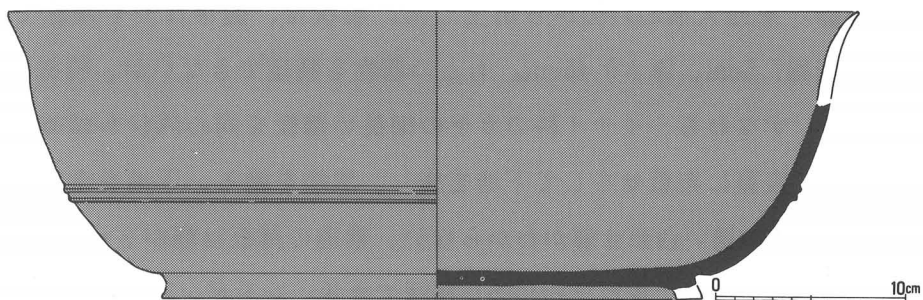


図39 漆器大鉢（1：4）

さ15cmほどになるとみられる。ケヤキ材を削ってつくった素地の全面に黒漆が塗られている。器形は高台のつく浅い鉢形で、胴部外面には2条の突帯が削りだされている。奈良時代の漆器としては例をみない大型の製品で、高台がこわれて低くなったあとも使用された形跡をとどめている。

金属器・石器・土製品

本調査で出土した金属器・石器・土製品には、銅銭、銅製人形、銅製素文鏡、馬具、刀装具、メノウ剥片、^{ふいご}鞆羽口、^{るつぼ}埴埴、などがある。

東二坊坊間路西側溝SD002では、和同開珎5点、万年通宝1点、神功開宝2点、素文小鏡1点、メノウ剥片1点などが出土している。万年通宝と神功開宝は、七・八坪坪境小路南側溝と坊間路西側溝SD002とが合流する付近で、西側溝の下層から出土し、坊間路西側溝の存続年代を考えるうえで注目される。

素文小鏡は、鏡縁を三角縁につくるいわゆる唐式鏡の例。鏡面をやや凸面につくり、鏡面から鏡縁まで丹念にヤスリ仕上げをする。三条二坊一・二・七・八坪の調査では4例目にあたる。直径4.6cm、重さ15gである。

東二坊坊間路東側溝では、調査範囲が狭いこともあり、わずかに万年通宝1点が上層から出土している。七・八坪坪境小路側溝SD011・012では、和同開珎3点、万年通宝1点、神功開宝1点、^{さほりようらく}佐波理瓔珞1点（以上193次A区）、サヌカイト製石鏃1点（190次）などが出土している。「長屋王家木簡」溝SD014では、多量の木簡、木製品とともに和同開珎2点が出土している。

東西大溝SD160から、銅製人形と馬具、および刀装具が各1点出土している。

人形は、土圧で「く」字に曲がっているが、完形で、長さ15cm、最大幅1cmである。顔の表現ははっきりしないが、細長い短冊形の銅板の上部に、頭部を表す浅い切り欠きがあり、下端部は短く二股に分れる。人形の側縁部はヤスリなどで仕上げておらず、素材となった銅板から切り離れたままの状態である。全体に腐蝕し、塗銀などの有無は不詳。

馬具は、^{くつわ}轡の鏡板の部分。奈良時代の^{うばらほみ}蒺藜銜と呼ぶ型式である。現存する長さは5cm、幅は7.3cm、復原長は18cmほどになる。鑄銅製。表面をヤスリ仕上げし、黒漆（烏油）装とする。蒺藜銜は正倉院宝物に数例があり、山口県宮原遺跡（『山口県埋蔵文化財報20』）、石川県寺家遺跡に出土例がある。ともに木屑層から出土しており、年代を天平年間の中頃（740年頃）におくことができる。

刀装具は^{はばき}はばきが1点ある。銅板を叩き延ばし、黒漆塗とする。層位からみて奈良時代後半か。

韃羽口、埴塙、鉾滓などは、各側溝など調査区全体からみつまっているが、一・二坪坪境小路側溝付近の大土坑（整地土？）から大量に出土している点が注目される。造営の際、邸宅内部に臨時の鍛冶工房を設けたのであろう。

その他に、東二坊坊間路西側溝SD002、東西大溝SD160からは、馬骨などの獣骨が出土し、同じSD160では、ハス科植物の中房やクリ、ヒョウタン、クルミ、モモなどの種子、種皮が多数出土した。（小池伸彦・金子裕之）

木 簡

1988年度の調査で木簡を出土した遺構は次の通りである。1；八坪にある木簡溝SD014（約30000点）、2；東二坊坊間路西側溝SD002（約400点）、3；東二坊坊間路東側溝SD001（7点）、4；二条大路南側溝の北の東西大溝SD160（約750点。ただし、第200次調査の出土品は含まず）、5；一坪の東端にある不整形土坑（12点）、6；二条大路南側溝SD154（1点）、7；三条条間北小路北側溝SD012（3点）、8；井戸SE023（4点）、9；井戸SE058

（1点）、10；井戸SE088（2点）、11；井戸SE096（2点）、12；井戸SE106（2点）、13；井戸SE126（1点）、14；井戸SE132（1点）、15；井

戸SE148（5点）である。

これらのうち、年紀のある木簡を出土したのはSD014・002・160である。SD014からは和銅4年～靈龜2年（711～716）、SD002からは和銅8年～天平元年（715～729）、SD160からは天平3年～10年（731～738）の紀年木簡が出土している。内容的に特に注目すべきはSD014とSD160から出土した木簡であり、以下、概要を述べる。

SD014出土木簡 遺構は幅3m、長さ21m以上の南北に長い溝である。溝とはいえ、南端は途切れており、堆積状況も流れた痕跡を見いだしがたい。大量の木簡はあまり時をおかずに廃棄されたと考えられ、一括遺物として極めて質の高い資料となる。木簡は「長屋王家木簡」と仮称しているように、長屋王の家政機関に関わるものである。

1は長屋王の宮に対して鰻が贅として運ばれたときの付札、2は雅楽寮から長屋王の家令所に対して平群朝臣広足なる人物の派遣を依頼した木簡であり、いずれも宛先が長屋王家である。これらの木簡と1987年度に出土した「長屋皇宮」の木簡などとあわせ考えて、発掘地が長屋王の邸宅跡であったことが確定した。また、この同じ邸宅には長屋王の正妻である吉備内親王も同居していたのではないかと考えられる木簡も出土した。4、5などがそれで、4は北宮に送られた品（この場合は文書函か）に付けられた木簡で、北宮が吉備内親王の宮であるという通説に従えば、この場所が吉備内親王の宮でもあるということになる。また5で米を支給した先は吉備内親王の居所と考えてよく、多数出土しているこうした米の支給木簡はいずれも邸宅内のやりとりと考えるべきであるから、吉備内親王の居所も邸宅内の一画にあったと推定できる。

7、8はそれぞれ藺司・御田司から野菜を進上したときの木簡である。こうした進上状も数多く出土している。いずれも大和およびその周辺におかれた藺や田からの文書木簡という書式であり、送り手の責任者は長屋王家から派遣された官人であると考えられる。つまり長屋王家が直接経営する土地が各所にあって、ひとつの経済基盤になっていたことを知りうる。

9、10は荷札の木簡である。長屋王家の荷札木簡には特徴がある。ひとつは木簡に記される国に著しい偏りが見られることであり、20国以上の国名が判明しているが、周防、近江、越前の三国で全体の半数以上を占めている。また、周防国の塩の木簡は、9に見るように荷札としての書式を比較的整えているが、近江国などの木簡は、10のようにしばしば国名、個人名、税目、年月などを省略しているのが目につく。こうした荷札木簡の特徴によりあるいは長屋王家と密接な関わりのある封戸の可能性も考える必要があるだろう。また、この他にも都祁に氷室があり、長屋王家が直接管理していたものと考えられるなど、貴族の家政経済を窺わせる史料が多い。

邸宅内には吉備内親王をはじめとする一族の他にも、多くの人々を抱えていたようである。11の考課木簡に見える家政機関の役人はもちろんのこと、12のような食料支給の対象となっている者を見ていくと、帳内、仕丁、少子といった雑用係、鋳物師、銅造、皮作、沓縫といった職人、経師や書法模人、帙師といった写経関係かと思われる人々と、僧、尼、医者、奴、婢等々である。そしてこれらの人々によって構成される家政機関の組織も復原が可能となり、それによって古代における一つの官衙のありかたが解明できるのではないかと期待される。

なお、発掘地の南に隣接する三条二坊六坪（宮跡庭園）の調査で、奈良時代前期の流路で、七坪の旧流路SD005の南延長であるSD1525から出土した木簡と、年代、内容ともに共通性が認められることも注目すべきであろう。

SD160出土木簡 この木簡は長屋王没後のものであり、「長屋王家木簡」と比べると、平城宮木簡に近い内容と構成である。特に目につくのは荷札木簡が多いことであり、なかでも贄の木簡がまとまって出土している。

13のような参河国播豆郡の海部が貢進する贄木簡は、まさに平城宮出土の木簡と同じ書式である。また、現在までの約30点という出土点数はこれまでの出土量に匹敵する。荷札の品目は海産物が圧倒的に多く、国別に見ると伊豆国が最も多い。伊豆国の荷札木簡は今年度分だけで30点近いが、いずれも天平7年のものであり、同一国の同年の木簡どうしを比較検討するというきわめて良質な資料と

なっている。

荷札木簡としては、他に15の木簡が目される。土毛は税の品目で、賦役令に規定はあるものの、他の史料にはほとんど登場せず、木簡としては初の例となる。また、貢進物としての蓮子というのも珍しい。

これらの木簡の特徴、および「長屋王家木簡」との対比からすれば、SD160の木簡群は個人の邸宅の木簡とは考え難く、公的な施設に関わる木簡といえる。文書木簡によれば、種々の機関のものがみられる。たとえば16は右京三条の坊令からの礫の進上状であるし、17は門の守衛に関わるもので「皇后宮」という語句がある。他にも大膳職で魚などを買った時の記録の木簡、左京職の官人の署名のある木簡などもある。こうして見ると、出土した木簡が、全体としてなんらかの官司に関わる一括資料として良いのかどうかは、今後の検討課題である。これから水洗、選別が始まる第200次調査のSD160出土木簡の調査成果を待って、十分に検討していかねばならない。

(寺崎保広)

SD014出土木簡

- | | | | |
|---|---------------------------------|--------------|-----|
| 1 | 長屋親王宮鮫大贄十編 | 214・26・4 | 031 |
| 2 | ・雅楽寮移長屋王家令所
平群朝臣広足
右人請因倭儷 | | |
| | ・故移 十二月廿四日
少属白鳥史豊麻呂
少允船連豊 | 220・37・3 | 011 |
| 3 | ・吉備内親王大命以符 婢筥入女□□□ | | |
| | ・ 五月八日少書吏国足 家令 家扶 | (266)・(26)・3 | 081 |
| 4 | 「封」北宮進上 津税使 | 300・27・3 | 031 |
| 5 | ・内親王御所進米一升 | | |
| | ・ 受小長谷吉備 十月十四日書吏 | 146・22・3 | 011 |
| 6 | ・移 奈良務所 専大物皇子右二処月料物及王子等 | | |
| | ・公料米進出 附紙師等 五月九日少書吏置始国足 家令 家扶 | 241・28・3 | 011 |

- 7・山背蘭司 進上 大根四束 遣諸月
交菜二斗
- ・ 和銅七月十二月四日 大人 255・30・4 011
- 8・耳梨御田司進上 芹二束 智佐二把
古白二把 河□毘一把 右四種進上婢
- ・ 間佐女 今月五日 太津嶋 304・28・4 011
- 9・周防国大嶋郡務理里佐伯部波都支御調塩
- ・ 三斗 221・44・6 033
- 10 蒲生郡南原里得衣米五斗 152・17・5 033
- 11 无位出雲臣安麻呂 年廿九 山背国乙当郡 上日 日三百廿
夕一百八十五 并五百五
- (262)・22・6 015
- 12・鑄物師二口飯八升帳内一口二升雇人□四升
- ・ 右四人一斗四升 受□□ 290・29・4 011
- SD160出土木簡
- 13 参河国播豆郡篠嶋海部供奉七月料御贄佐米楚割六斤 260・18・4 031
- 14 伊豆国賀茂郡稻梓郷稻梓里戸主占部枝志戸占部石麻呂調荒堅魚十一斤十兩
天平七年十月 六連六丸
- 433・33・3 031
- 15・武蔵国足立郡土毛蓮子一斗五升
- ・ 天平七年十一月 56・22・5 032
- 16・右京三條進礫六斛乘車貳両 一礼比古□ □
物部連加保□
- ・ 天平八年十月廿三日坊令文伊美吉牟良自 357・48.5・5 011
- 17・二門 佐伯 皇后宮 □□ 多
日下 下野 鴨田 合七人
- ・ □ □ 178・(29)・1 081

6 まとめ

今年度までの調査により、左京三条二坊一・二・七・八坪を占める長屋王邸内の中心部の様相と、その後の一・二・七坪の変遷がほぼ明らかとなった。以下、調査地の奈良時代の各時期における性格と、出土した遺物から明らかになったこと、それに問題点を指摘し、まとめとしたい。

まず、A期の大半は長屋王の邸宅の時期である。邸宅内には、大規模な主殿をはじめとして多くの建物が建ち並んでおり、掘立柱塀によるいくつかの区画があったことが明らかとなった。SD014から出土した「長屋王家木簡」によれば、妻の吉備内親王が同居していたと推定される。また、邸宅内には様々な家政機関があったことも判明した。今後は、検出したどの遺構がどの機関に関わるものなのかの検討が必要となる。

長屋王の死後には、出土遺物から、天平年間前半までも4町占地在が継続していると現状では見ている。遺構変遷ではA3期にあたり、敷地内をさらに細かい区画に分割する時期である。その性格は今後の検討課題であるが、二条大路南側溝北側の東西大溝SD160出土の木簡がそれに関するものであれば、公的な施設が置かれていた可能性もある。

また、C期においても敷地が4町になる可能性が高いことが判明した。しかし、A期と異なり、敷地内を区画する塀はない。南北棟が多く、A期のような規則的な配置計画も見られない。主殿と推定される建物SB175の構造の検討や、居住者の比定などを含めて、今後に残された課題は多い。

B期、D期においては各坪は独立した占地となり、それぞれの様相に違いがある。一坪は中心的な建物は未検出だが、整然とした配置が見られ、かつ敷地内をさらに細分する施設も未検出であることから、大規模な宅地であったと推定できる。D期に属する井戸や池状の遺構からは、「官」、「官厨」と書いた墨書土器や「地子米」と記した木簡が出土し、奈良時代末のこの地の性格を暗示している。二坪は、B期、D期ともに大規模な主殿を中心とした一町規模の宅地となる。両期ともに主殿は東の方に偏り、配置も主殿を中心とした左右対称の形にはならないこ

とが注意される。七坪には、中心的な建物は無い。坪内を細分する施設は検出していないが、井戸の数からみて、1／16町といった小規模な宅地になるのである。八坪については調査面積が少なく、詳細は不明である。

今年度は条坊関係遺構の溝跡の調査が多かったこともあり、多種多様な土器、瓦埴類、木製品、木簡などの遺物が出土した。その中では、とりわけ木簡が特筆される。まず「長屋親王宮」木簡により、広大な邸宅の主が長屋王であることが確定した。そのほかにも、長屋王家が直接経営する土地が大和、山城など各所にあり、経済基盤の一つになっていたことが判明した。また、邸宅内には、一族の他にも雑用係、職人、僧、医者など様々な人が居住していたことや、荷札木簡に書かれた多くの食料品名から、氷室を直接経営し、邸宅内には鶴や犬などの動物を飼っていたこともわかるなど、奈良時代の貴族の生活の細部をはじめ、多くのことが明らかになりつつある。SD160出土木簡では、長屋王以降でも邸宅がしばらくは公的な施設として機能していた可能性を考えさせる。また、一坪の井戸から出土した木簡などにより、奈良時代の終り頃には太政官関係の施設が存在した可能性があることも判明した。これらは、出土した遺構、遺物と文字資料が直接に結びつくまれな例で、大きな成果を上げることができたと言える。今後は、出土した大量の遺物の整理を進めるとともに、周辺の遺跡との関連を追求することが課題となる。

「そごうデパート」予定地の発掘調査は、一部を除き、今年度でほぼ終了した。遺構、遺物の上で大きな成果をあげることができたのも、予定地の $\frac{1}{4}$ の面積にわたって調査することができたことによる面が大きいと思われる。たとえば、「長屋王家木簡」は、通常の平城京の調査では発掘対象にされない地域から出土した。また、宅地の配置が主殿を中心として左右対称にならないことは、一部の調査だけから全体をうかがい知ることができないことを強く教えている。そうした面から見ると、左京三条二坊一・二・七・八坪の調査は、遺跡の中心部分は破壊されてしまったものの、今後の平城京の調査のあり方に一つの指針を示したものであるであろう。

(玉田芳英)

2 右京三条一坊十六坪の調査 第191-1次

住宅新築の事前調査である。調査地は、十六坪の南端中央部にあたる。発掘区は、東西6m、南北25mで、面積150㎡である。検出遺構は、旧流路1条、掘立柱建物1棟、溝1条、井戸1基などである。

土層は、上から表土、庄土、遺物包含層で、表土下0.5mで遺構検出面となる。主な遺構としては、奈良時代以前の流路が調査区北半にあり、南西から北東に流れる。幅約5m、深さ1.2mある。層位は上層が茶褐色、下層が灰色の砂層で、部分的に粘土層の箇所もある。茶褐砂層には弥生土器などを含むが、灰色砂層からは、流木のみで遺物の出土はなかった。

南端で出土した東西溝は、北肩を検出したにとどまる。現状では幅1m、深さ0.2mを測る。位置からは、十六坪と十五坪との坪境小路の北側溝にあたりと考えられるが、全容が不明なので、確定できない。西辺中央で検出の柱穴3個は、東西棟の東側柱と考えられ、南2個には柱痕跡がある。柱間は8尺等間である。

井戸は、その掘形は東西・南北各1mを測り、深さも約1mの3段横組みである。出土遺物は、ほとんどこの井戸に限られる。土器はおおむね奈良時代後期の平城宮Ⅳのものが多い。軒瓦では、軒丸瓦6133型式、軒平瓦6721Ga型式があり、この井戸は奈良時代末期に廃絶したと考えられる。なお墨書土器に、「木工所」「成」などがある。 (綾村 宏)



図40 調査位置図 (1:10000)



図41 第191-1次調査区全景 (北から)

3 左京四条二坊十五坪の調査 第191 - 3次

この調査は、住宅建設に伴なう事前調査である。調査地は当研究所が過去2度にわたり調査を実施（第145次調査、第156 - 8次調査）した、藤原仲麻呂の田村第推定地で、左京四条二坊十五坪にあたる。今回の調査地は第156 - 8次調査地に北接し、関連する遺構の存在が予想されたため、東西二つの調査区を設定した。

調査地の土層は、耕土、床土の下に河川の氾濫による砂礫と粘土の層が約50cm~70cmの厚さで堆積しており、その下は暗灰粘質土の遺物包含層、暗灰緑粘質土または暗灰緑砂質土の遺構面となる。

遺 構

検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物2棟と井戸1基、河川氾濫堆積の粘土層上面で検出した人と動物の足跡である。

奈良時代の遺構 掘立柱建物SB01は東西両調査区にまたがって、10尺等間で東西方向に並ぶ柱掘形である。6間分まで確認でき、第156 - 8次調査で検出した奈良時代末の東西棟掘立柱建物SB3050の北庇にあたりと考えらる。SB3050の

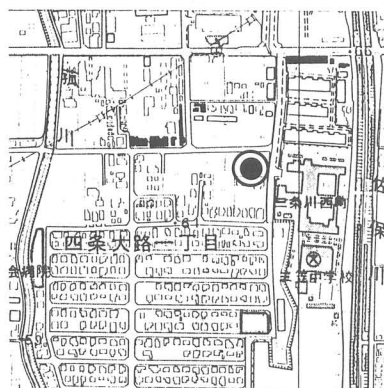


図42 調査位置図 (1 : 10000)

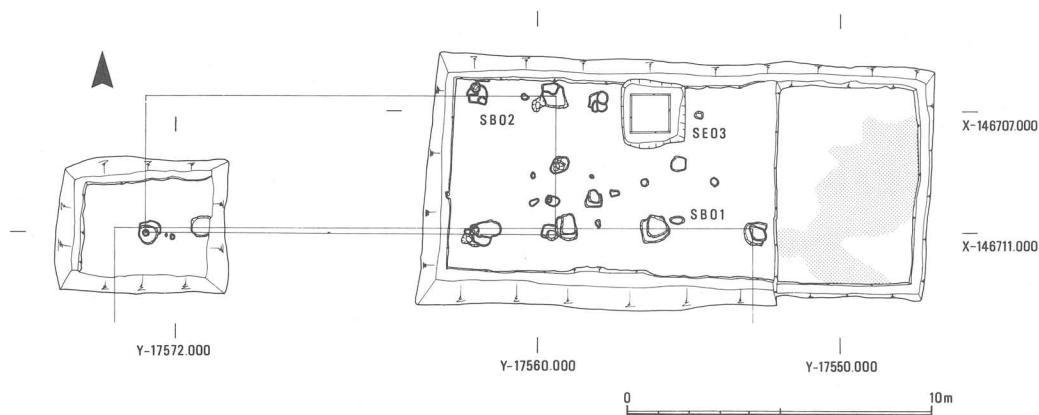


図43 第191 - 3次遺構配置図 (1 : 250) 網部分は足跡の範囲

南庇から11.4m（38尺）北にあり、庇の出が南側と同じ10尺とすると、身舎の梁間2間（9尺等間）、桁行7間（10尺等間）の南北庇付の東西棟建物となることが明らかになった。掘立柱建物SB02は、掘立柱建物SB01と一部重複し、それより古い東西棟建物である。西調査区の北壁に妻柱掘形の断面が認められ、建物規模は、梁間2間、桁行5間、柱間寸法は、梁間8尺等間、桁行9尺等間となる。柱掘形、柱抜取穴のいずれからも瓦塼類や根固めの石が出土する。柱抜取穴から出土した遺物などから奈良時代後半と考えられる。

井戸SE03は一辺約1.3mの方形横板組で、深さは約1.2m。井戸枠は底の1段を除き抜き取られていた。いずれの枠板も、上の段の枠板と結合する太柄の位置が中央から10～15cm前後、一方にずれている。別の井戸枠を切り縮めて用いたのであろうか。廃絶の時期は、奈良時代末と推定される。

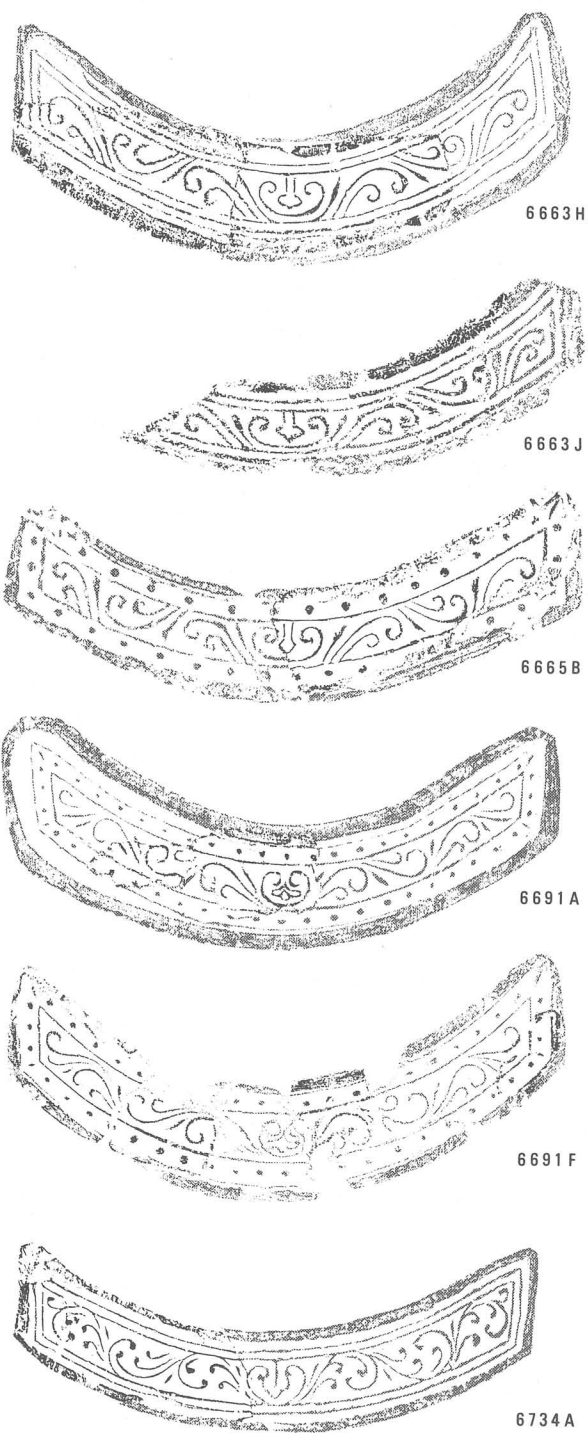


図44 第191-3次調査出土軒瓦（1：4）

奈良時代以降の遺構 東調査区の東南部で、厚い河川氾濫堆積のなかほど、粘土層の上面で多数の足跡を検出した。時期を決定する直接の資料はないが、粘土層の下は平安時代初頭の遺物包含層で、粘土層の上は近世の陶磁器を含む砂礫層である。人の足跡は少ないが、長さ20cm強で、東あるいは南から西あるいは北に向かっている。動物の足跡は、底の方で先端が二つに分かれており、偶蹄類、おそらく牛と考えられる。西あるいは北に向けて粘土層が薄くなっており、足跡は調査区の東南部にのみ残っていた。

遺物

奈良時代の遺物としては、遺物包含層、井戸、柱抜取穴などから軒瓦を含む瓦塼類、土器、木製品が出土した。

瓦塼類には、軒丸瓦5型式8点、軒平瓦5型式17点、刻印平瓦1点を含み、そのうち井戸からは、軒丸瓦3点、軒平瓦9点が出土した。建物SB02の柱抜取穴からは、軒丸瓦1点、軒平瓦4点が出土した。そのなかで、井戸SE03と建物SB02の柱抜取穴から出土した軒平瓦6691Fは同一体である。出土した軒瓦には、平城宮軒瓦編年の第Ⅱ・Ⅲ期のものがあるが、第Ⅲ期を主体とし、奈良時代中頃から後半にかけてのものである。

土器の多くは遺物包含層からの出土で、奈良時代後半の土師器・須恵器を主体とする。また、木製品としては、井戸の底から斎串7点が出土した。（小林謙一）

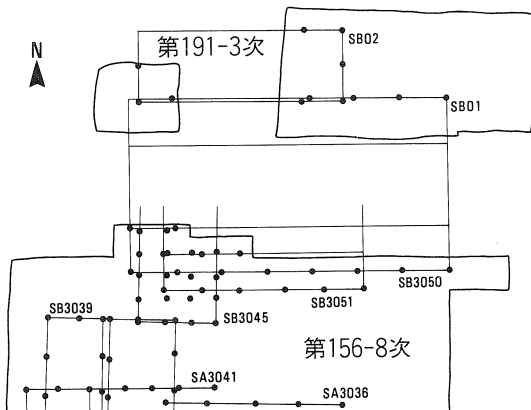


図45 第191-3次・156-8次建物配置図（1：500）

建物SB02		井戸SE03	
6308A	1	6227D	1
6663H	2	6282Ha	1
6691F	1	6282	1
6734A	1	6663A	1
		J	2
		6665A	2
		6691A	1
		F	3

表11 遺構出土軒瓦

4 右京一条二坊三坪の調査 第191-6次

店舗付共同住宅の建設にともなう事前調査である。一条条間路の南側溝と三坪内の宅地を検出する目的で、南北26m、幅6mのトレンチを設定した。調査地の基本的な層序をみると、上から約80cmの盛り土、20cmの耕土、10cmの床土があり、その下に遺物を包含する黄褐粘質砂土が5cm程度に薄く堆積する。遺構はこれらすべてを除去した地山面上で検出した。地山は、全体に黄色系の粘質砂土である。

検出した遺構は、奈良時代の建物が1棟、塀1条、東西溝1条、それに古墳時代の流路2条である。建物SB01は、調査区の中に全体が入る総柱の建物で、梁間2間、桁行2間の倉庫風建物である。柱間寸法は、梁間が1.6m、桁行が1.8mである。東西の溝SD03は溝幅0.5~1.0m、深さ20~30cmの浅い溝で、土師器、須恵器など少量の土器が出土した。

三坪の調査は、第174-24次調査として、今調査地の東で一度実施している。この時は、一条条間路の南側溝は検出していない。また、西方で行なった第106-6次、第141-14次の各調査でもそれらしい溝は見つかっていない。こうしたことから、南側溝は削平されて残っていないか、その位置が現在の一条通りの下になるか、どちらかであろうと考えられていた。今回検出したSD03は、位置からみれば可能性のある溝だが、溝の規模と形に問題がある。結論は今後の調査にまきたい。(田辺征夫)

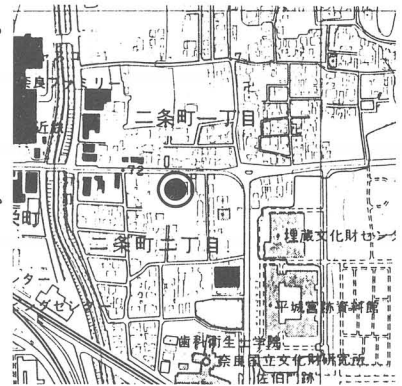


図46 調査位置図 (1:10000)

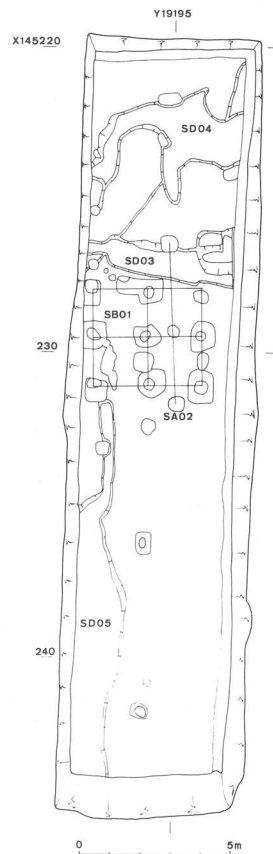


図47 遺構配置図 (1:250)

5 左京八条一坊六坪の調査 第191 - 11次

1 はじめに

工場建設に伴う事前調査である。六坪の調査は、1984年に株式会社スギノテクノの工場建設に先立ち、三坪を含む西南部約2800㎡（A区）と坪の北辺、東西中軸線付近で約100㎡（B区）を発掘している（奈文研『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』）。今回は、B区の東約20mの位置に南北30m、東西10mのトレンチを設け調査を行った。坪の東西中軸線は、今回の調査区のやや西寄りに想定される。

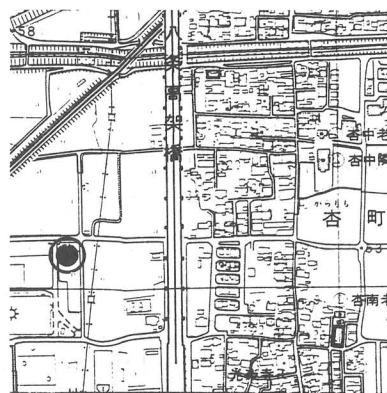


図48 調査位置図（1：10000）

2 遺構の概要

調査区の土層は、客土・旧耕土・床土・灰褐砂質土・暗灰粘質土の順で黄灰粘土の地山面に至る。客土から地上面までの深さは約1.4m。地上面は北が高く、南に向かって緩く傾斜する。図示していないが、暗灰粘質土面では多数の耕作溝を検出している。奈良時代の遺構には、掘立柱建物10棟・同堀1条・東西溝1条があり、すべて地山面で検出した。

東西溝SD773は、八条条間路南側溝にあたるが、北肩は調査区の外にあり検出できなかった。溝の堆積は、上から灰褐粘土・茶褐砂質土・暗灰粘土の3層に分れ、上層には瓦器片が、中層と下層には奈良時代の土器や瓦の細片が含まれる。

建物は、重複関係や配置から次の5時期に分かれる。

A期 八条条間路南側溝SD773の南肩にある堀SA3535が北限となる宅地で、北側に東西棟SB04・SB10を並べて配置し、南にもう一棟の東西棟SB08を配する時期。SB04・SB10の梁間の寸法は1.8m等間。SB08は、梁間2.4m、桁行2.4～3.0mである。

B期 北側に2間×4間の東西棟SB05を、南側に東西棟SB02A、棟方向不

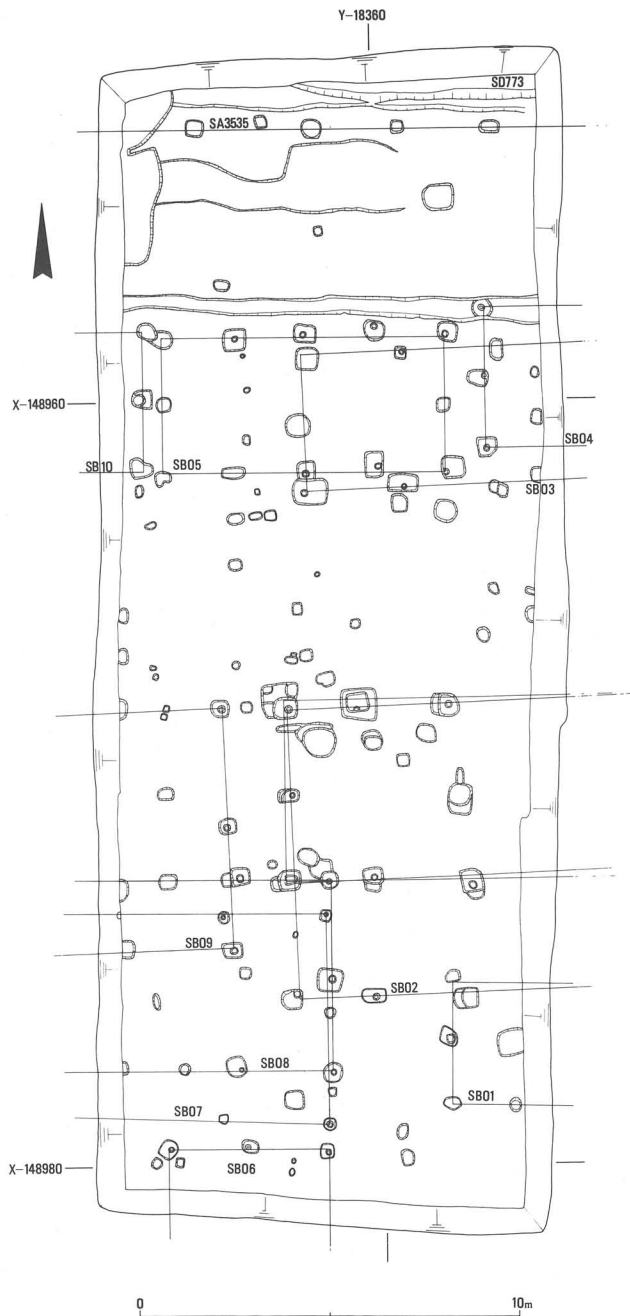


図49 第191-11次調査遺構配置図 (1 : 200)

明のSB06を配す。SB05は梁間・桁行ともに1.8m等間。SB02は梁間・桁行ともに2.4m等間。SB06は柱間2.1m等間である。

C期 北側に3間以上×2間の東西棟SB03を、南側にSB02Bを配す。両建物ともに、国土方眼方位に対し、北で西に2度程振れる。SB03は桁行2.4m、梁間1.2m等間。SB02Bの身舎の桁行は2.1～2.4m、梁間2.1m、庇の出は3.0mである。両建物は、ともにB期建物の建替えとみられ、SB03は前身のSB05よりやや東に位置をずらし、SB02Bは、新たに庇を設け、身舎はほぼ同じ位置で建て替えている。

D期 南寄りに1間×2間の東西棟SB09を配する時期。C期同様、建物の方位は北で西に振れる。柱間は、桁行2.7m、梁間3.0m。

E期 調査区南寄りに、2棟の東西棟SB01・SB07を配す時期。柱掘形は小さく、径20～25cm程の円形を呈す。SB01は桁行1.8m、梁間1.2m。SB07は桁行2.7m、梁間2.4～2.7m。

前述のように、建物は大きく5期に分れるが、柱穴等に遺物を含まず、各時期の絶対年代は不明である。

遺物は極めて少ない。八条条間路南側溝SD773から、奈良時代後半の土器片、瓦片が少量出土した。その他の地区では、瓦は極めて少なく、それも東西塀SA3535の南5mの建物がない範囲に限られる。現状では何等の痕跡もとどめないが、この部分に築地塀が存在した可能性が極めて高いと言えよう。

3 まとめ

今回の調査では、宅地割りに係わる遺構は、八条条間路とその南肩にある掘立柱塀SA3535を検出したにすぎず、そのため、検出した建物群が宅地の中で占める位置については、明解にすることはできなかった。なお、予想された古墳時代の遺構は、まったく検出されなかった。

(巽 淳一郎)

6 頭塔の調査 第199次

1 はじめに

1987年の第181次調査と同様、奈良県が行う整備復原事業に先立つ調査である。第181次調査は、頭塔の東北4分の1の範囲を対象としたが、今回はその西側の西北4分の1の範囲（約300㎡）について調査を行った。また、一部前回調査区の再調査および断ち割り調査も合わせて行った。

第181次調査の結果、頭塔は一辺約32m、高さ1.2m程の方形基壇の上に、階段状に7段に段築し、最上段を除く全面に石を貼った特殊な構造であることが判明した。また新たに石仏を発見するとともに、石仏の配置法の原則を把握し、基壇に2回の造替えがあることも確認している。

今回の調査は、前回の調査で課題として残された点、すなわち、多量に出土する瓦の使用法、基壇造り替えと現石積との関係、石敷のない塔頂部の施設の有無等の解明を目的に行った。

2 遺 構

基壇 今回西側基壇端の石積を検出し、基壇の東西幅が確定した。写真測量の成果がまだ出ていないので厳密な数値でないが、31.9mを測る。北面基壇端には、まったく石積は残らないが、崖の下端線と、後述する塔頂部の心柱痕跡との距離を測ると約16mという数値が得られることから、基壇南北長も東西長とほぼ同じ幅に復原できよう。

西側基壇端の石積は、階段状に控え積みされ、東側の石積法と異なる。また東側の基壇石積の外側に平らな石を敷いているが、西側には認められなかった。次に層位的に確認した3期にわたる基壇化粧と基壇の構築について記す。

I期基壇 地山面に、厚さ30～10cmの締りのない盛土と硬く締まった黄褐色～黄



図50 調査位置図 (1 : 10000)



図51 頭塔発掘遺構図 (1 : 150)

灰色粘質土を交互に積み上げ、上面近くでは小礫を混えた黄褐粘質土と黄灰砂質土で版築した基壇面を整える。しかし、この版築は全面に行われたわけではなく、今回の調査区では確認していない。主として第一次調査区の東面基壇に認められる。

基壇上面の石積の周囲に犬走り状に玉石を敷き、その外側に一段下げて拳大の礫を幅20cmにわたって敷きつめる。この石敷きによる化粧は第1段石積の内側にもぐるため幅は不明である。今回、この化粧の西北隅のコーナーを検出し、前回東北隅を検出しているので、方向および幅が確認された。東西幅は24.8mで、方向はほぼ国土方眼座標に一致する。両隅部では、I期基壇化粧に伴う柱穴P1とP2を検出した。

柱穴は基壇化粧する前に掘られており、根巻き石を伴う。西北隅部の根巻き石や柱根跡の周囲に赤色顔料が残っているので、柱は赤く塗られていたことがわかる。基壇全体に柱穴が配されていた可能性を考慮し、I期の基壇化粧が途切れる部分に小トレンチを設けて断ち割り調査を行ったが、柱穴は検出されず、また検

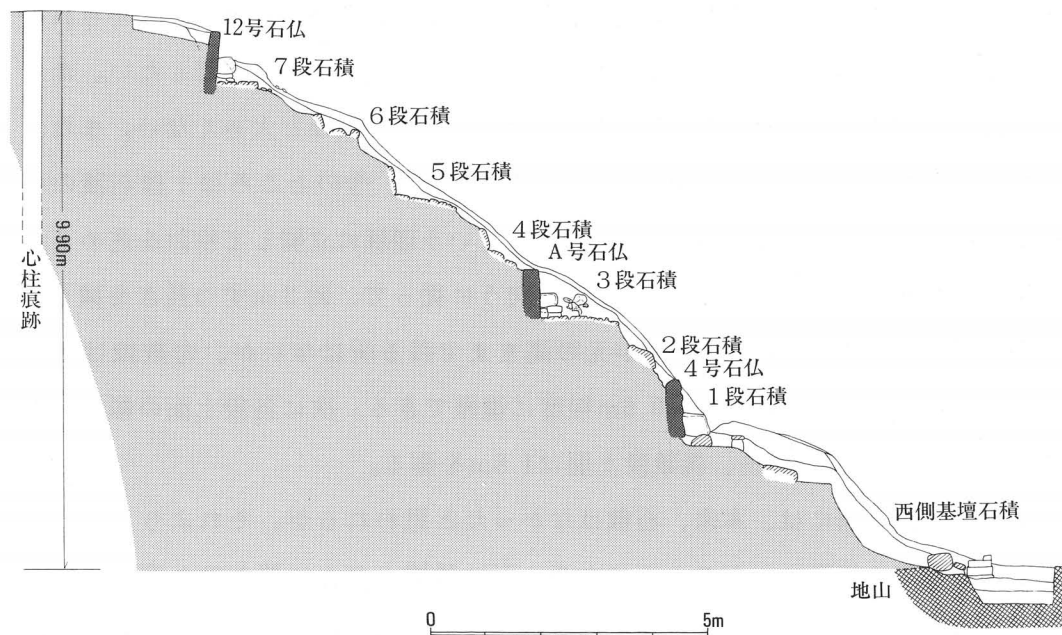


図52 頭塔中央南壁土層図

出しているⅠ期化粧に石の抜けた部分がないことから、隅にのみ柱が建っていたと考えられる。

Ⅱ期基壇 Ⅰ期の上に版築で約10cm程かさ上げし、上面に細かいバラスを敷く。また石積近くに玉石敷がバラス敷の上に配される部分もある。この玉石敷の方位は、第1段石積の方位にほぼ合う。しかし、バラス敷は、第1段石積の内側にもぐる。

Ⅲ期基壇 前述のⅡ期基壇上面には、多量の石や瓦が転落しているが、それらを整理せず、その上に土を盛って新たに基壇を構築する。版築によって築いているが、石積の周囲60cm程の範囲が比較的平坦で高い。基壇縁辺に向って次第に低くなり、斜面をなしている。Ⅱ期基壇との比高は、最も高いところでは60cm以上もある。特に基壇化粧を行わず、斜面部分の随所には転落した石や瓦が顔をのぞかせている。

7段の石積 第1段の石積は、前述のⅢ期基壇上面に築かれていること、また、Ⅰ・Ⅱ期の基壇化粧が第1段石積の下にもぐっていくことから、拡張して積み替えたことは明らかである。2段以上の石積と石敷についても、改修の可能性も考えられるが、正式な図面の作成と基壇の断ち割り調査の結果を待って結論をだしたい。ただ2段以上の石積みとⅠ期基壇化粧の方位の差は、1段石積ほど大きくない。また、石積や石敷に特にみだれた部分も認められないので、今のところは1段石積のみ改修され、それより上位の部分は当初のものという理解に立脚して検討を進める。

第1段石積長は24.2mを測るが、上位に向うに従って、約3mずつ長さを減じ、7段石積では6.2mとなる。石積が元の高さまで残る所はないが、奇数段は1～1.1m、偶数段はやや低く0.5～0.6m程度に復原できる。次に各段上面の幅は、奇数段上面が狭くて約1.1m、偶数段上面は1.8mを測る。

改修の1段上面には、本来、石敷はなかったと思われるが、それより上位の各段上面の石敷の特徴は以下のようなものである。石は基壇上の上に置かれた客土に敷かれている。石敷の面は平坦ではなく、下に向って傾斜をつけ、なおかつ、中心から両隅に向って次第に高くなるように葺かれている。つまり屋根勾配に葺かれて

いるのである。

2段の西北隅、4段の東北、西北両隅には石を抜いて溝状にした部分を検出している。この溝状遺構は、石積の直下にはじまり、入隅の方向にのびる。I期基壇化粧の両隅に検出した柱穴、石の葺き方から判断して、ここに隅木を置いたものと考えられよう。

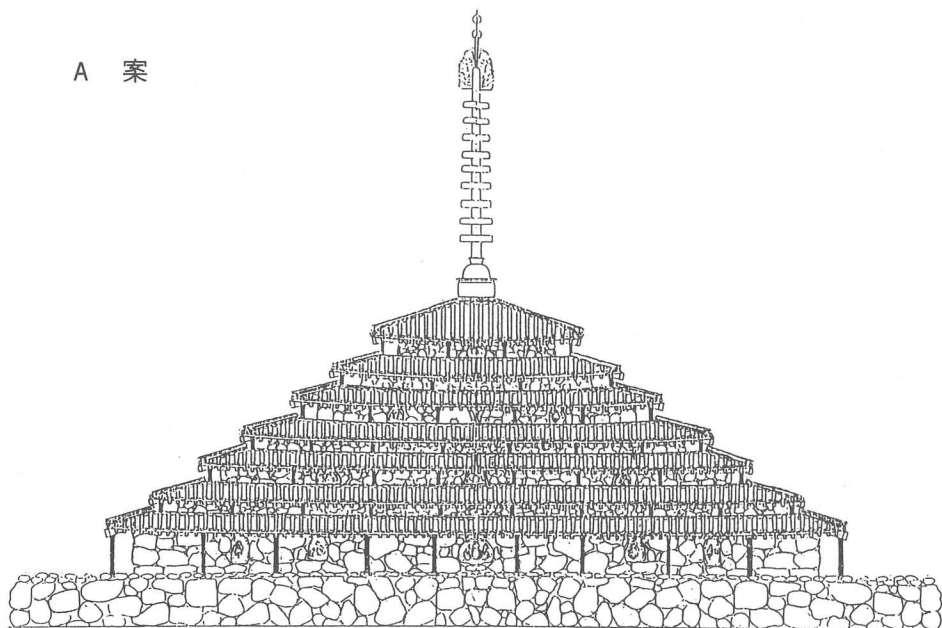
塔頂部の遺構 今回、7段上面の中央、後世に安置された五輪塔下の調査も行った。五輪塔の台石の更に下には、凝灰岩製の板石2枚が敷かれていたが、1枚は盗掘坑に割れて沈んだ状況で検出した。盗掘坑は、平面形が不整楕円形で長軸径80cm。そして坑の中央付近が一段と深く掘り下げられ、地表下90cmにまで及ぶ。

盗掘坑を掘り上げ、坑の壁を検討した所、基壇土ではなく硬く締まった粘土質の土があらわれた。壁を追って行くと径46cm程の円形坑になり、心柱痕跡P3であることが判明。6段あるいは5段上面に礎石を据えている可能性を考え、2m程掘り下げたが礎石には当らなかった。おそらく、礎石は基壇下の地山面に置かれ、基壇の構築時に心柱を立て、段築しながら柱を安定させたのであろう。柱痕跡の壁周辺には、炭化物や灰が残り、落雷による火災で廃絶したものである。柱痕跡の埋土は、締りのない暗灰褐土と黄灰粘質土と交互に埋め戻す。粘質土面は非常に硬く、突き固めたのであろう。

石仏 従来の調査によって石仏は、各面それぞれ1段に5体、3段に3体、5段に2体、7段に1体、あわせて44体が配置されていたことが明らかになっている。今回、新たにA～Fの6体を検出したが、北面1段目の中央石仏の西及び同3段西寄りの1体は抜き取られていた。また、西面の3段北寄りの石仏B、同5段西寄りの石仏Cには彫刻の跡が認められない。A・Dは独尊坐像で光背状に化仏10体が半円状にとりまく。従前から知られている8号石仏と同趣の石仏である。Eは後世上半部を打ち欠かれている。頭塔の石仏のほとんどが如来形であるが、Fは菩薩が中心となる石仏である。

頭塔の構造復原 以下に述べるような状況証拠に基き、頭塔の本来の構造を復原してみよう。

A 案



B 案

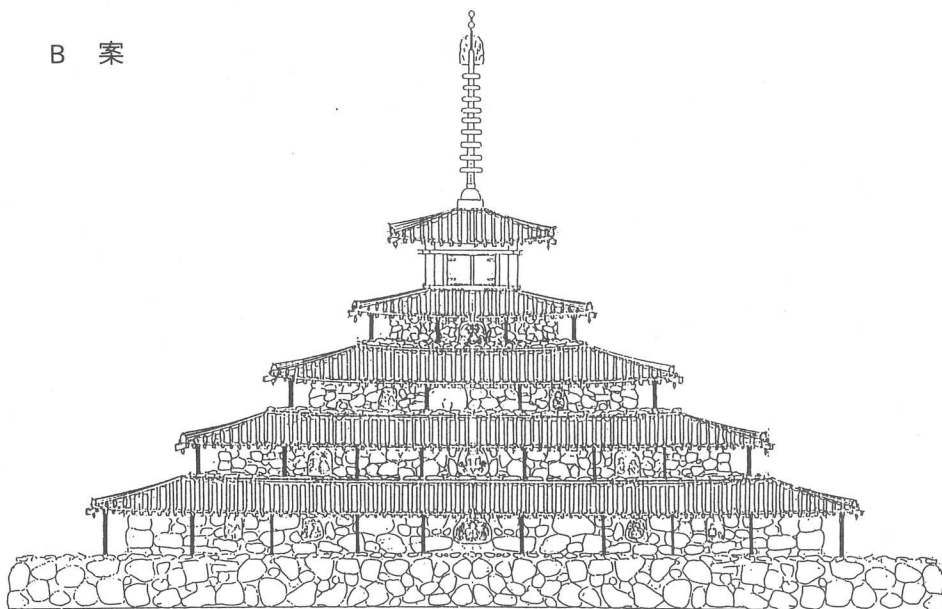


图53 頭塔復原案

- ① 7段に段築し、各段上面の石敷は屋根勾配に葺かれ、隅に隅木を置いたと見られる痕跡を留める点。
- ② I期基壇化粧の東北・西北両隅に隅木を受ける柱が立つ点。
- ③ 中心に心柱が立つ点。
- ④ 瓦類が多量に出土し、しかも各段に分布する点。
- ⑤ 垂木を塗った際に付着したと思われる朱が付いた軒平瓦が存在すること。
- ⑥ 東大寺式軒瓦が主体で、基壇土から出土する土器の年代や文献史料の記述から、東大寺の僧実忠が作ったとされる「土塔」と考えられること。

以上の諸点から、桁・隅木・たる木で屋根を架け、瓦を葺いていたことは明らかである。そして、各段の石積が各層の塔身となり、心柱には相輪を取りつけたたぐい稀な塔に復原できよう。各段上面に屋根を架け、塔頂に相輪を設置すれば、七重の塔になるし（A案）、また各段の石積に桁を置いて屋根を架けた場合には、複数段の石積は屋根に隠れ四重の塔となり、最上部に木造の塔身が1層ないし3層必要になる（B案）。色々な復原図が考えられるが、文献に見える「土塔」という表現を重視すれば、A案の方がイメージに合うように思われる。

頭塔の変遷 当初の頭塔は、A案あるいはB案のような稀有な型式の塔であったが、相輪に雷が落ち、少なくとも頂部施設は崩壊した。I期基壇両隅の柱痕跡はII期の基壇面でも検出されることから、II期基壇面の造替期には、塔頂部以外はまだ瓦葺屋根が残っていたと考えられる。そして、以下のような根拠から塔頂部には、相輪に代わって凝灰岩製の六角屋蓋の十三重塔が建ったと考える。北面の6段上面の石仏前から、実際に凝灰岩製の六角屋蓋石塔が出土し、心柱痕跡の上及び周辺に凝灰岩の台石が置かれていたこと。『七大寺巡礼私記』には、頭塔は「十三重の大墓」と記され、平安末期には、十三重の何等かの施設の存在が認められること、そして、それが、石塔にふさわしいと考えるからである。

3 出土遺物

瓦類 総数168点の軒瓦、多量の丸平瓦のほか熨斗瓦、面戸瓦などの道具瓦も出土している。軒瓦のうちわけは、奈良時代158点、平安時代3点、中近世7点と

なる。奈良時代の軒瓦のうち、最も多いのは東大寺式軒瓦で、軒丸瓦6235Mが67点、軒平瓦6732Fが83点出土している。他に重圈文軒丸瓦6012Cが3点、重郭文軒平瓦6572が5点ある。

土師器 奈良時代の土器は少ない。石仏Cの近辺の基壇土から完形の須恵器の壺Eが、また他の場所の基壇土から土師器・須恵器の小片が出土しているにすぎない。いずれも奈良時代後半に属す。平安時代前期～中期の遺物も少なく、陰刻花文緑釉椀片、越州窯系青磁椀片等がある。量的に最も多いのは、平安末～鎌倉時代の土師器の小皿で、他に東海系山茶碗、同大平鉢・青磁・白磁椀なども出土している。土師器の小皿は、石仏供養の灯明皿として使われたもので、仏龕内や石仏周辺の基壇崩壊土中から出土した。また土製品としては、奈良時代後半の土馬の破片が数点出土している。

金属製品 銅銭4枚、銅製金具、鉄釘、鉄片等が出土している。銅銭は基壇崩壊土から和同開珎1点が、塔頂部の盗掘坑埋土から、和同開珎1点・神功開宝2点・

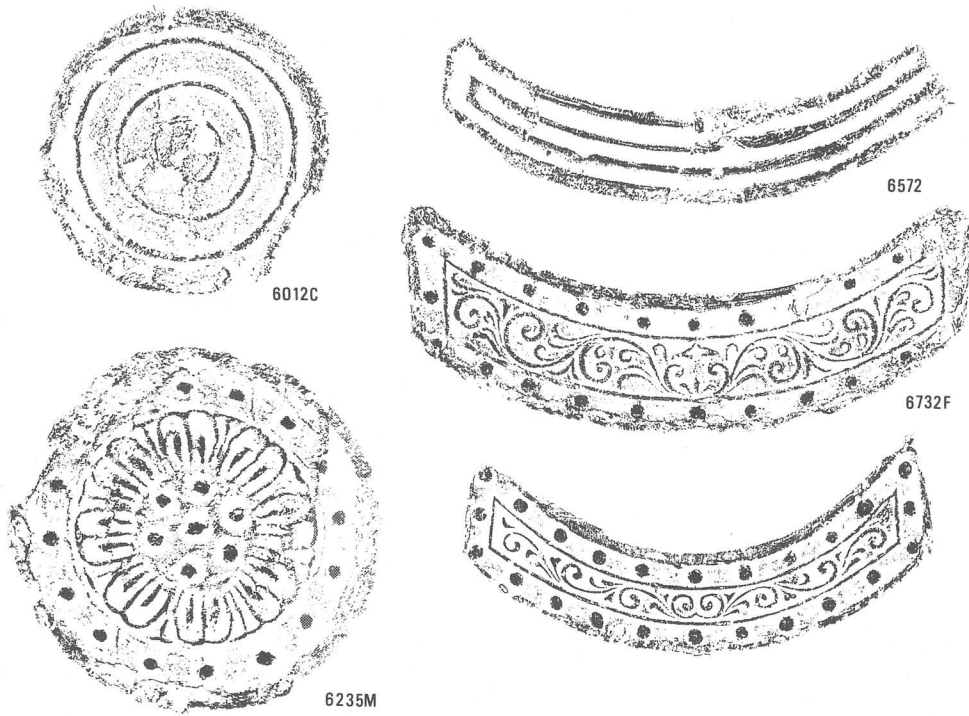


図54 頭塔出土軒瓦（1：4）

隆平永宝1点が出土している。

なお、電磁探査の結果、各段上面の各所に金属反応を確認しており、西大寺東塔のように基壇築成時に銭をばらまく地鎮が行われたことが推測される。盗掘坑の埋土の銭は、凝灰岩石塔の舍利荘嚴具の可能性が高く、石塔に変わった時期の決め手になる。

石製品 前述した六角屋蓋石塔蓋のほかに、各段上面や基壇上面から平安末～鎌倉時代の凝灰岩製の石塔類が多量に出土している。奈良時代の六角屋蓋の多重塔としては、奈良市田原町の県史跡塔の森の凝灰岩製の十三重石塔と正倉院蔵の三彩七重塔が有名であるが、頭塔出土品はそれらより新しい型式で平安前期頃のものとして推定される。

4 おわりに

従前の調査と合わせると、頭塔の北半分の調査を終えたことになる。その結果、きわめて珍しい構造の塔の姿が浮かび上がったわけである。出土遺物やその年代、文献史料から判断して、8世紀後半に東大寺の僧実忠が築造したと言う「土塔」が、この頭塔であった蓋然性が極めて高いと言えよう。次に今後の課題として、いくつかの点を明記し、まとめたい。

I期とII期の基壇化粧に伴う第1段石積を確認し、規模を把握するとともに、第2段以上の石積に改修の跡があるかどうかを検証すること。

次に塔本体と石仏の関係であるが、各面最下段中央の石仏は、四方仏を表わし、その周辺及び上段には釈迦八相や教典に基づく題材の石仏も配されていると言われている。このようなあり方は、木造多重塔の初層の内陣の四方に、四方仏や釈迦八相や教典に基づく題材を塑像の群像で表わすのと共通性を持つ。頭塔の場合は、塑像の代わりにそれを石で表わすが、各面の石仏が一体何を物語ろうとするのか、仏教美術史、図像学など各方面からの研究が待たれる。そのためにも、早急に資料の公開がのぞまれよう。

(巽 淳一郎)

7 西大寺境内の調査

1988年度の防災工事に伴う発掘調査は本堂の北と西、本坊の北と西、本堂と本坊の間、愛染堂の東側の南、塔跡から南門に至る参道、南門の南で行った。発掘区はいずれも幅が狭く、条件が良いところで1.5m幅で実施した。発掘区は調査の順に従って便宜的にⅠ区～Ⅵ区まで設けた（調査区位置図）。

調査地の基本層序は、表土・遺物包含層・地山であり、平安・鎌倉・室町時代の遺物包含層は少なく、地山直上に江戸時代以降の堆積層のある場所が多い。地山から現地表面までは、本堂周辺のⅠ区では60～70cm、他は1.0～1.5mである。

1 遺構

Ⅰ区 幅50cm、延長57mの発掘区で、本堂の北と西の位置である。発掘区東端から中央部にかけては地山の直上に50～60cmほどの瓦堆積がある。瓦は焼土と一緒に層をなしていて、西大寺が火災にあった後に一括して投棄されたのであろう。瓦堆積から出土した大量の瓦のうち、軒丸瓦は27点、軒平瓦は32点で、鬼瓦片、三彩垂木先瓦数点が出土している。軒瓦は奈良時代末期から平安時代初期のものであり、平安時代初期に、この一帯が造成されたことを示す。

軒瓦の所見と合致する可能性がある火災の記録としては、承和13年（846）に講堂（あるいは金堂）が、延長5・6年（927・928）に塔が罹災している。今回の発掘地点が金堂や講堂とは離れていて、東西両塔の間であるので、延長5・6年（927・928）の罹災を採用しておく。

Ⅰ区の中央部に幅2m、深さ30cmほどの南北溝SD01がある。SD01の西肩に円形の土器据え付け穴があるが性格は不明である。Ⅰ区の西3分1に掘立柱の柱穴が3つあり、全体の形状は不明だが建物（SB02）である可能性がある。

Ⅱ区 地山直上から現地表面まで1m～1m50cmは近世以降の堆積である。地山上で検出した小穴や小溝も中世以降のものと思われ、中世以前に遡る遺構はない。

Ⅱ区の西トレンチ中央部で東西溝SD03を検出し、その南3.5mの位置で、人頭大の石で護岸した施設（SX04）を検出した。東西溝か池の護岸施設か不明である。

SX04から北には落ち込みがあり、ここから軒瓦が出土している。

Ⅲ区 本坊の東で、幅3m深さ1.5mの南北大溝SD05を検出した。溝と言うより堀であり、全体の形状や規模はわからないが、長さ15mにわたり検出していて、南北にさらに延びている。埋土からは中近世の遺物が出土しており、中世から近世にかけて寺域を区画していた、あるいは寺域内での区画を示す堀の可能性がある。

Ⅲ区の本坊表門の南寄りで石組遺構SX06を検出した。一抱えもある石を2m×1mの範囲に置き並べたもので人工的な施設であると考えられている。湧水の激しい地点であり、湧水に関連する石組遺構とも考えられる。SX06は地山を一段下げた土の中に据えられている。

SX06の南2mほどで柱立柱穴を1つ（SK07）を検出した。長手方向で1mほどの長方形の掘方で地山に掘られていて、奈良時代の遺構であろう。対応する掘立柱がないので性格は不明である。

Ⅲ区の本堂西では小穴群SK08を検出した。Ⅲ区13区～15区で、掘立柱の柱穴二つを検出した。地山面での検出で、奈良時代の遺構である。

Ⅲ区の東塔の西付近で奈良時代の井戸SE16を検出した。直径2mほどの円形で、地山を2.5mほど掘り込んでいる。井戸枠は残っていない。西大寺造営時に一気に埋めている。この井戸の北方の包含層で三彩垂木先瓦数個体分が出土した。Ⅲ期南辺部は現地表から50cmほどで地山である。南端で掘立柱穴らしい柱穴二つを検出した。

Ⅳ区 東端で掘立柱穴三つを検出し、建物か塀の一部である。塀SA12とする。時期不明の東西溝がある。

Ⅳ区の西端の曲り角付近の包含層から大量の瓦が出土している。瓦を一括投棄しているし、焼土が混じっていてⅠ区の瓦堆積と酷似している。同じ性格で同時期の整地である可能性がある。

Ⅳ区の西よりに幅1.5mほどで地山を切込んだしっかりした南北溝SD13がある。SD13は奈良時代の南北溝と推定されるが、伽藍内あるいは条坊内の2分1とか4分1とかの整った数値の位置をしめしていない。SD13のさらに東へ5mほど

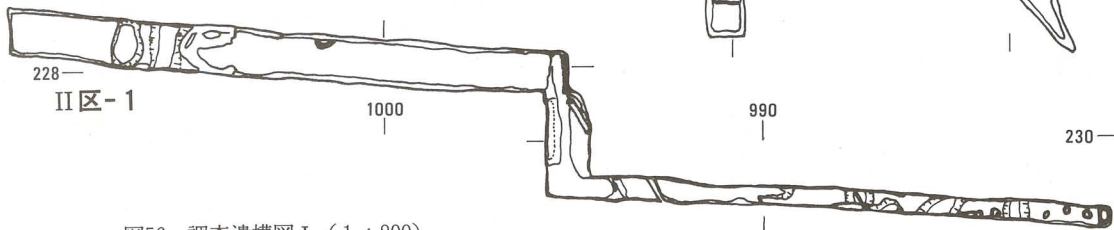
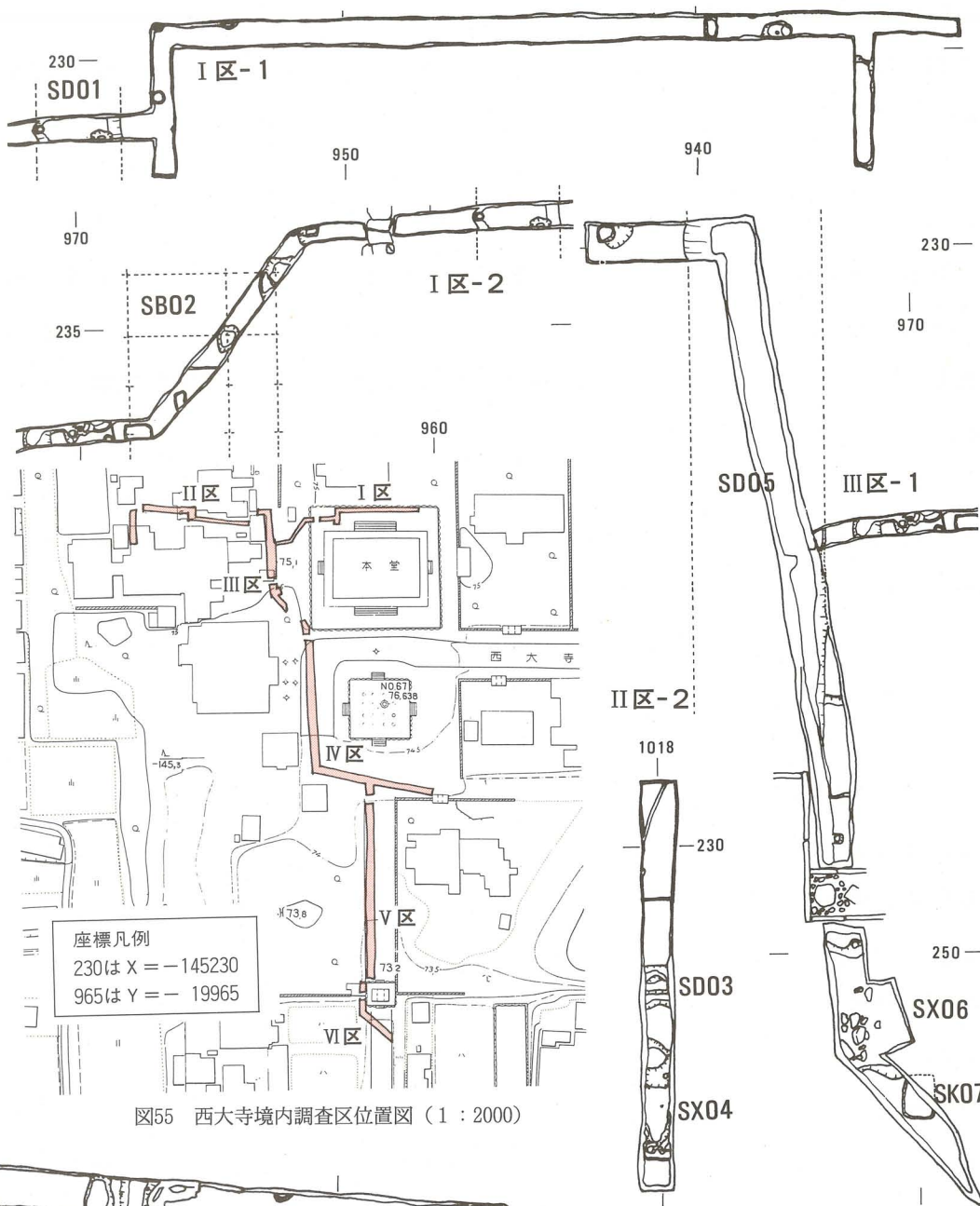


図56 調査遺構I (1:200)

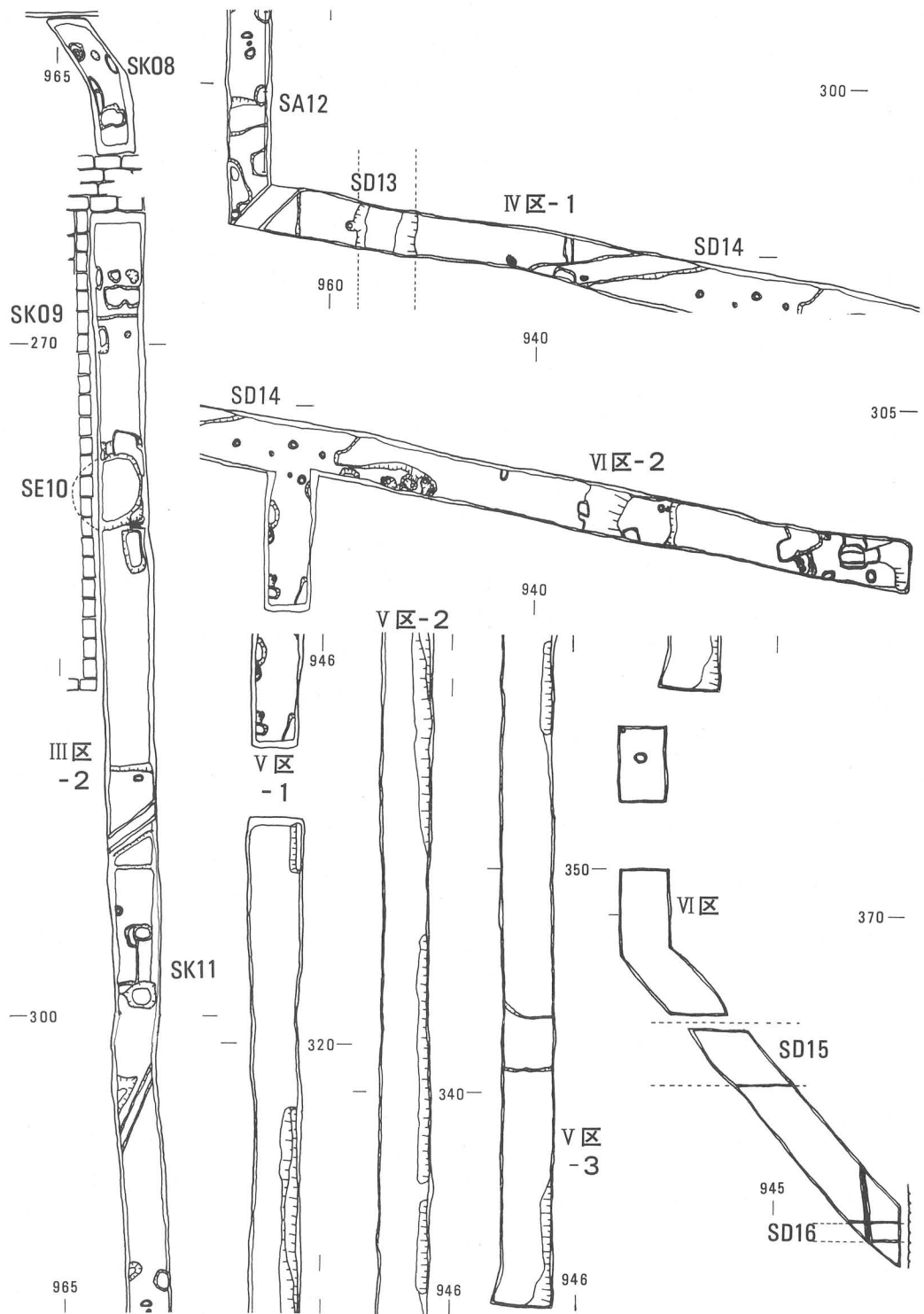


图57 調査遺構图Ⅱ (1 : 200)

のところから東へ東西溝SD14があるが、中世以降の溝であろう。V区は塔跡の南辺にあたるが塔と関連する遺構はなく、SD14から東に小穴群があるものの顕著な遺構はない。

IV区の発掘区の東端は前年度の発掘区と2mほど重複し、東端で掘立柱穴1つを検出しているが、建物・塀の一部かどうかかわからず性格は不明である。

V区 V区は南門から塔跡へ至る参道西側に幅1.5m長さ50mの発掘区を設け、地山まで掘り下げたが、遺構はない。地山直上まで近世・現代の堆積である。発掘区東端で東へ高まる肩の一部を検出したが、これは発掘区が東辺部より一段と低い旧地形であったことを示す。奈良時代から近世までの瓦が出土した。

VI区 地山面で東西溝2条、SD15とSD16を検出した。SD15は南肩のみ検出し北肩は未発掘地にあると思われる。幅2m、深さは20cmある。埋土に遺物を含まないで時期は決め手を欠くが、地山によく似た埋土であり奈良時代と考えておく。奈良時代の西大寺の中心部の南を限る施設に伴う東西溝と考えられる。

SD16は幅60cmほど深さ20cmほどで、中世以降の溝である。

遺構のまとめ I区からV区の地点は、奈良時代の西大寺伽藍中心部であるものの、いわば中心建物の中のオープンスペースにあたる。ここで検出した奈良時代の遺構のうち掘立柱の柱穴は伽藍建設以前の建物・塀とみられるが、伽藍中心部で行った儀式に伴う仮設の建物・塀であったとも考えられる。IV区は中心建物の一つである塔に近いトレンチだが、塔に関連する施設はない。奈良時代に遡る溝を数条検出しているが、その性格は不明である。 (上野邦一)

2 瓦埴類

今回出土した瓦埴類は、I区で瓦溜りを検出したこともあって、膨大な量である。ここでは、一応の整理ができた軒瓦を中心に、述べることにする。

軒瓦は、軒丸瓦107点、軒平瓦131点が出土し、道具瓦には、鬼瓦3点、隅木蓋瓦2点、獅子口1点、烏衾1点、三彩垂木先瓦、緑釉埴がある。

軒瓦のうちわけを見ると、中世の軒瓦が多い。今回の調査区が本堂周辺を中心とするものであり、叡尊による13世紀中葉から末にかけての復興に関するもの

表12 時代別軒瓦出土点数

	軒丸瓦	軒平瓦	計
奈良	7	63	70
平安	33	5	38
中世	47	49	96
近世	20	14	34
計	107	131	238

と考えられる。奈良・平安時代は、軒丸瓦と軒平瓦とで出土点数にひらきがある。軒丸瓦は、平安時代のもの（12～15；第58・59図の番号、以下同じ）が多く、9世紀代と推定される単弁16弁の13が、26点と最も多量に出土した。15は薬師寺と同範。西大寺創建の6236型式A・H種（1・2）は計3点しか出土しなかった。

軒平瓦は、創建時の6732型式K・M・N・Q種（4～7）が合計47点あり、67

32型式F種（9）3点と、種不明の5点を加えた55点が6732型式である。なお、今回は6732型式R種（8）は出土しなかったが、これも創建時の軒平瓦である。平安時代の軒平瓦には21・23がある。

西大寺所用軒瓦の様相は、ここ3カ年にわたる防災工事関係の発掘調査によって、かなり明確になってきた。これまでは、軒丸瓦6236A－軒平瓦6732K・M・Qが西大寺所用軒瓦として知られていたが、さらに、軒丸瓦6236H、軒平瓦6732N・Rをこれに加えることができたほか、6732K・M・Qの良好な資料をえた。

軒丸瓦6236型式は、大きなくぼんだ中房と2枚の子葉を並べた偏平な弁を特徴とし、外縁は素文の直立縁である。A・D～F・H種があり、A・D・Hが西大寺から出土する。このうち、Dは西隆寺と唐招提寺に同範例があり、西隆寺の所用瓦である。なお、Eは唐招提寺と新薬師寺、Fは西隆寺から出土する。

西大寺所用の軒平瓦は、いわゆる東大寺式の範疇にはいるものであるが、東大寺の諸例と比較すると、①中心飾り内の三葉文は左右の二葉が内彎する（N種以外）か、基部で相互につながる（M種以外）、②中心飾りの対葉花文左右には外側に巻き込む小葉（第1単位第2支葉）がない、③唐草の先端が玉状に膨らむ、④唐草各単位の主葉が短い（M種以外）、⑤唐草第1単位第2支葉が1葉である、⑥唐草第3単位の外にある小葉が1葉である（M種以外）、などを特徴としてあ

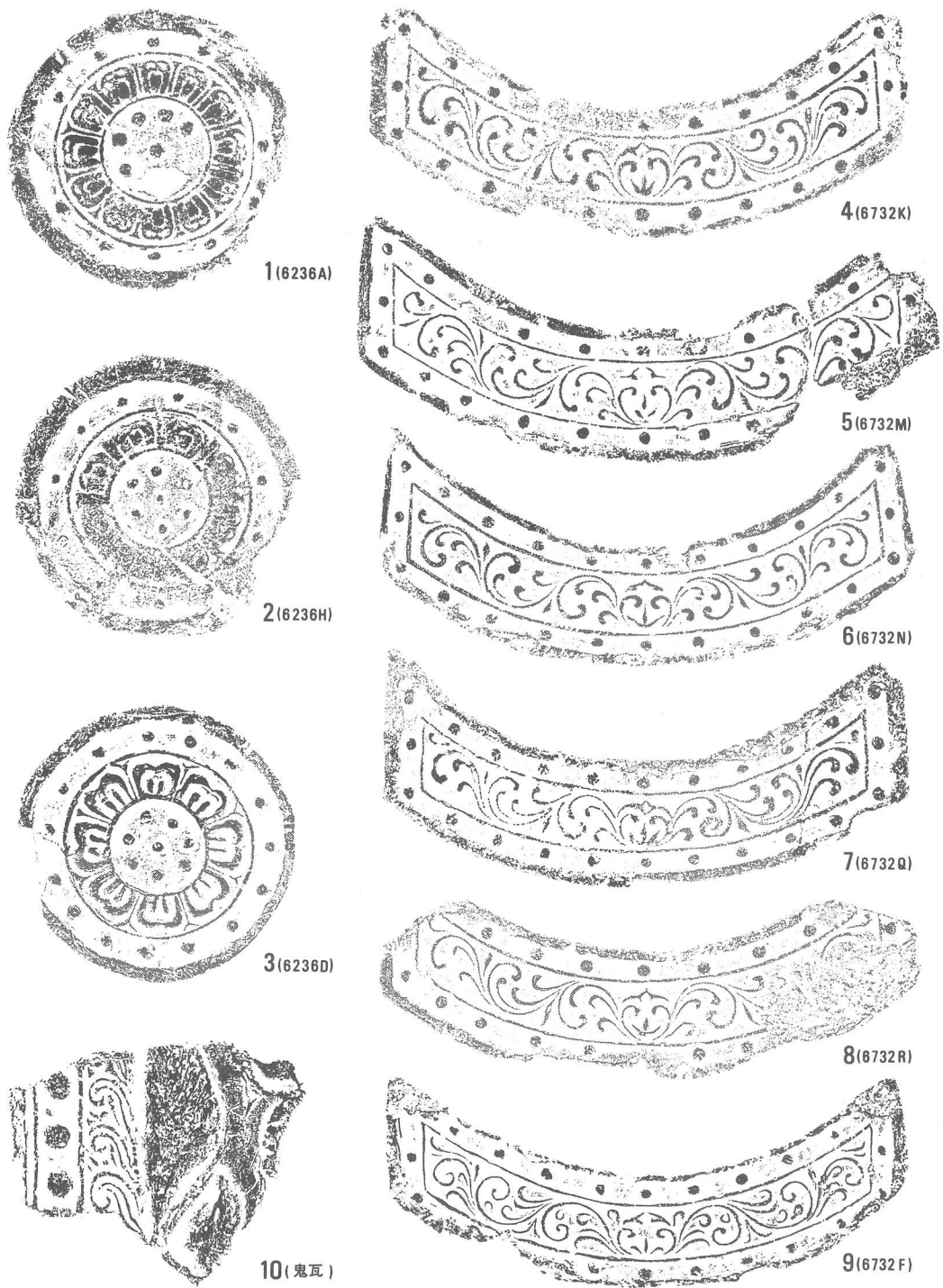


图58 西大寺境内出土軒瓦 I (1 : 4)

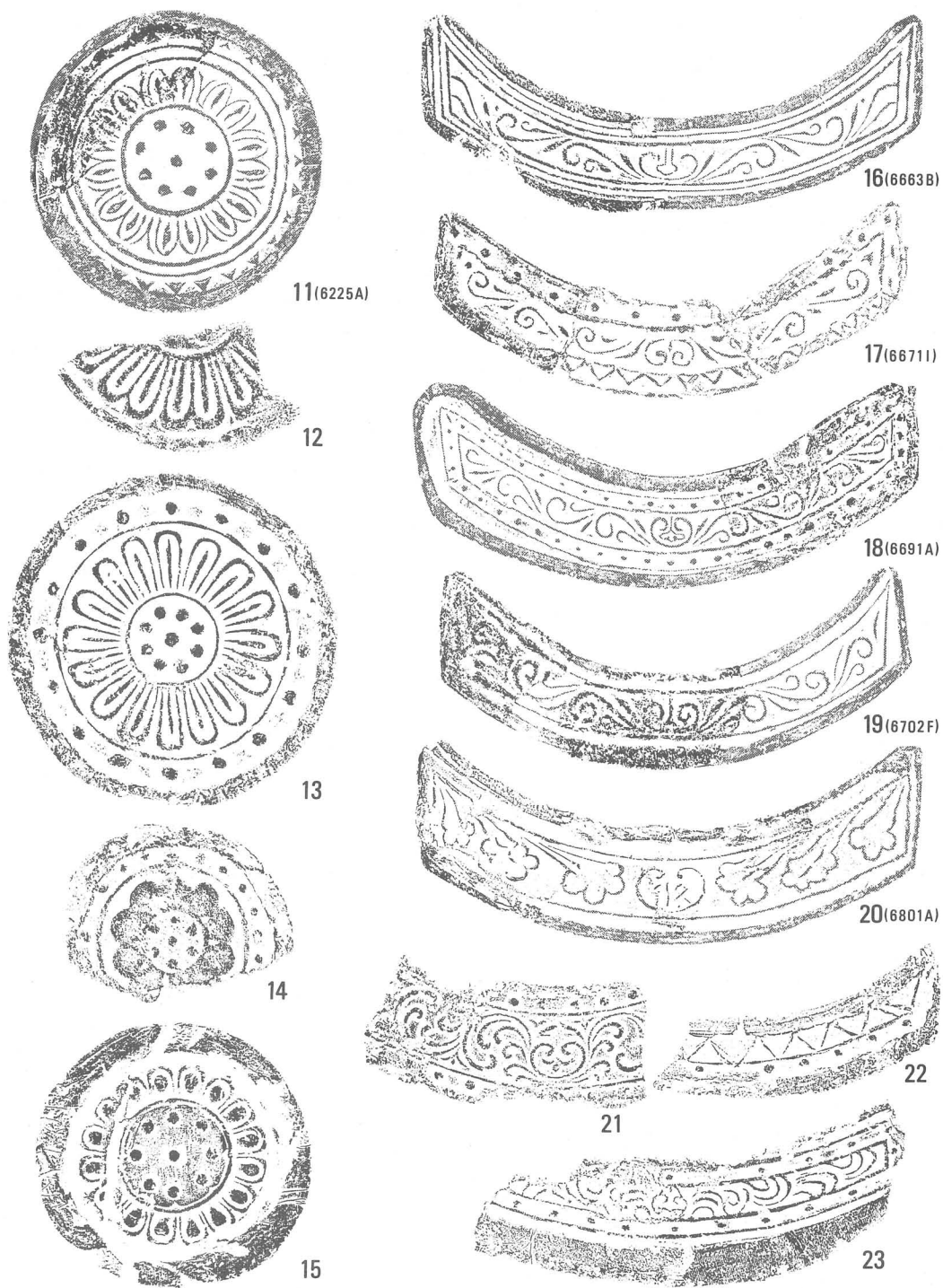


图59 西大寺境内出土軒瓦Ⅱ (1 : 4)

げることができよう。④～⑥は、東大寺所用の6732型式でも、唐草が分解したものの（例えば、D・I種など）とは共通する特徴であるが、①～③は西大寺特有の特徴とすることができよう。

軒平瓦6732Qは、西大寺のほか、平城宮、長岡宮、山城・谷田瓦窯に同範品がある。6732Qには唐草左第3単位に範割れのない段階の製品と範割れ後の製品があり、谷田瓦窯からは範割れのないもの、西大寺からは両者が、平城宮からは範割れ後のものが出土する。

西大寺からは所用軒瓦以外にも、奈良時代の軒瓦が出土する。今回は、軒丸瓦6133、6225 A（第59図11）、6236 D（第58図3）、軒平瓦6663 B（第59図16）、6671 I（17）、6681 A、6691 A（18）、6702 F（19）、6801 A（20）、内区に線鋸齒文をおく新型式の22、が出土した。このほか、これまでの発掘調査で、軒丸瓦：6135 A、6235 C、6279 Aa、6281 B、6284 A、6313 C、6314 A、6316 M、6348 A、軒平瓦：6641 C、6646、6681 E、6682 A、6711 A、6721 E・F、6739 C、6761 Aが出土している。

このうち、西大寺造営に関連する軒瓦としては、まず、西隆寺所用の6235 C - 6761 Aがあげられる。6739 Cも同文の6739 Aが西隆寺から出土する。このほか、6236 Dは西隆寺と唐招提寺、6316 Mは称徳山莊推定地（右京一条北辺四坊六坪）に同範例があり、22も唐招提寺に類品があるので、造営時期のものとしてよいだろう。6801 Aも平城宮軒瓦編年第IV期（天平宝字元年から神護景雲年間）におかれる軒平瓦で、これも年代的に西大寺造営に合致する。また、さきに6732型式として一括した6732 F（第58図9）は、東大寺のほか、新薬師寺、頭塔、平城京内からも出土する軒平瓦である。頭塔は神護景雲元年（767）の造立と伝えられ、あるいはこのころ西大寺にも供給されたのかもしれない。それ以外の型式は、西大寺造営以前の瓦である。西大寺創建前の宅地に関連するものであろう。

鬼瓦（10）は、過去にも西大寺で採集例があり、薬師寺に同範例がある。三彩垂木先瓦は、褐・緑・白の三色で四葉重弁の花文を描く。これまでに出土している垂木先瓦と同じ意匠である。（花谷 浩）

8 薬師寺西面回廊の調査

薬師寺の伽藍復興計画の一環として、回廊の再建に伴う事前調査を行なった。今回の調査は西面回廊のほぼ中央部を対象にしたもので、回廊の規模を確かめることと、金堂にとり付く軒廊の有無を確認することを目的として実施した。調査期間は昭和63年11月30日～平成元年1月11日、調査面積は350㎡である。

1 遺 構

回廊の遺構は、礎石はすべて抜き取られており、礎石下の据え付け掘形と、礎石抜き穴、基壇、基壇外装、暗渠、雨落ち溝を残す。また、基壇の西3分の1

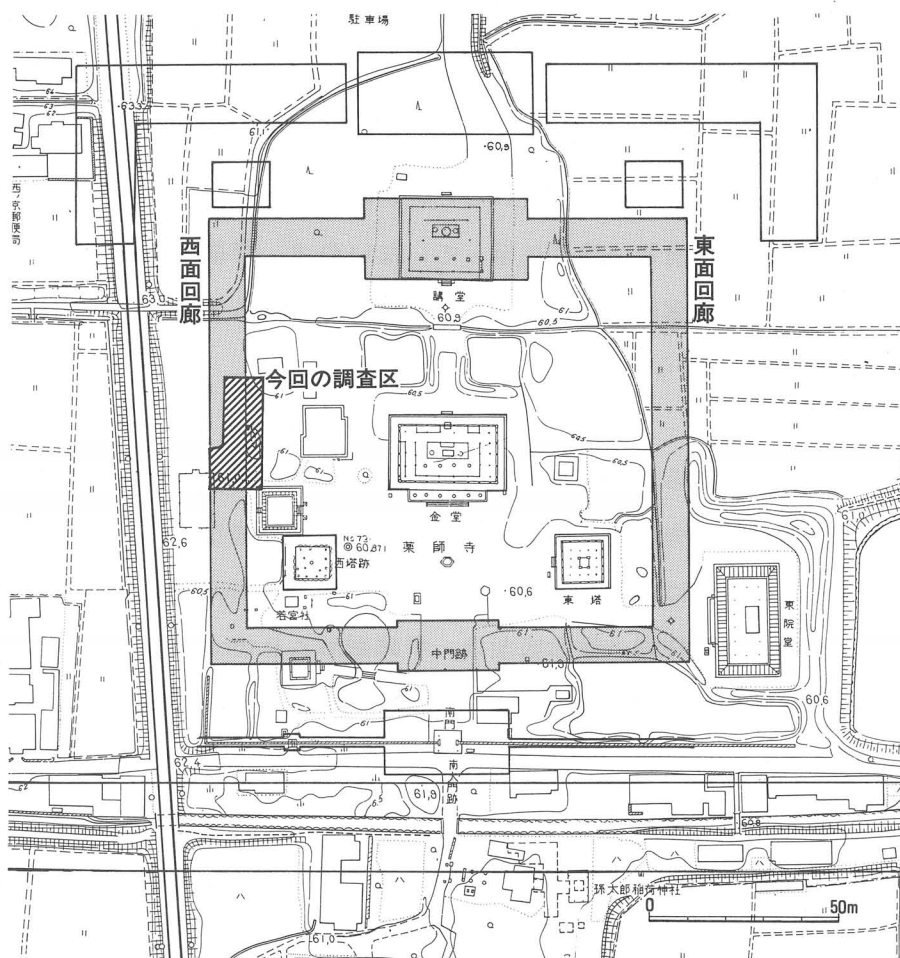


図60 調査位置図 (1 : 2000)

は近世の南北大溝によって破壊されている。

これらの遺構は、従来の調査と同様に、単廊と複廊とに分かれる。

単 廊

西南入隅から数えて11間目から7間分にあたる礎石据え付け掘形10箇所（東側柱列8箇所、西側柱列2箇所）を確認した。このうち、1箇所は、暗渠掘形底面でその存在を確認している。据え付け掘形の間隔は、南北（桁行）方向が3.75m、東西（梁行）方向が3.5m強である。据え付け掘形は一辺1.2～1.8mの方形または、不整形で、深さは約1mあり、上部の30cmほどを除いて、破碎した瓦片を大量に入れてつき固めている。これには大量の軒瓦が含まれ、すべて本薬師寺所用瓦と同範である。

基壇は、砂質または粘質の軟弱な地盤の上に粘質土で版築風に築成し、据え付け掘形はその上面から掘り込んでいる。断面観察によると、礎石を据え付けたあと、さらに基壇土の盛土を行なっていることが確認できる。この段階の基壇規模は、基壇外装、雨落ち溝等の施工に至っていないので、詳細な数値をあげることはできないが、後の複廊建物時の基壇拡張の様子からみると、東側柱心位置から約1.4mが基壇末端とみられる。

複 廊

礎石はすべて抜き取られ、礎石据え付け掘形およびそれに重複する礎石抜き取り穴が残る。掘形は、中央柱列と東側柱列の合計14箇所を検出した。入隅から数えて、11間目から7間分にあたる。掘形は、一辺1.6m～2mの円形、方形ないしは長方形を呈する。東側柱列の掘形底面は、単廊掘形より40cmほど浅い。複廊中央柱列掘形は東側柱列掘形より20cm浅い。掘形の間隔は、南北（桁行）方向が4.12m、東西（梁間）方向が約3.0mである。掘形には、瓦片を敷いてつき固めた部分があるが、単廊掘形の場合と比べて、瓦片の量はごく小量であった。

中央柱列の柱間に凝灰岩切石を2列に並べた遺構が検出された。幅約0.6m、厚さ10cmで、その位置から壁下の地覆に関係する遺構と考えられる。また、南から3間目の中央位置に、回廊を東西に横断する石組暗渠がある。この暗渠は、凝灰

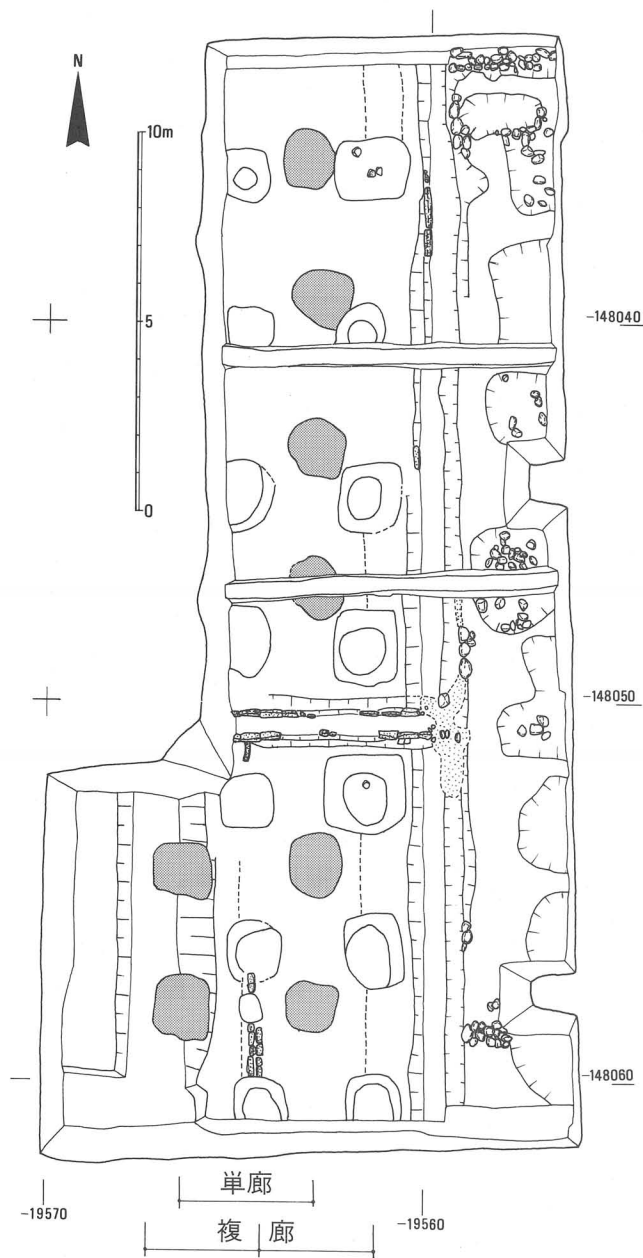


図61 西面回廊遺構配置図 (1 : 200)

岩切石を側石とする構造で、暗渠内面で幅45cm、高さ45cm、長さ4.9m分を検出した。底面にも凝灰岩粉末が遺存しているので、当初は底石も凝灰岩製であったと思われる。側石は崩壊がいちじるしいが一部、当初の上端を残す。蓋石は遺存していない。暗渠の中の堆積土には焼土の層があり、その後かなり埋まっている。最終的には開渠になっていたようである。暗渠南辺に接して、南北方向の凝灰岩

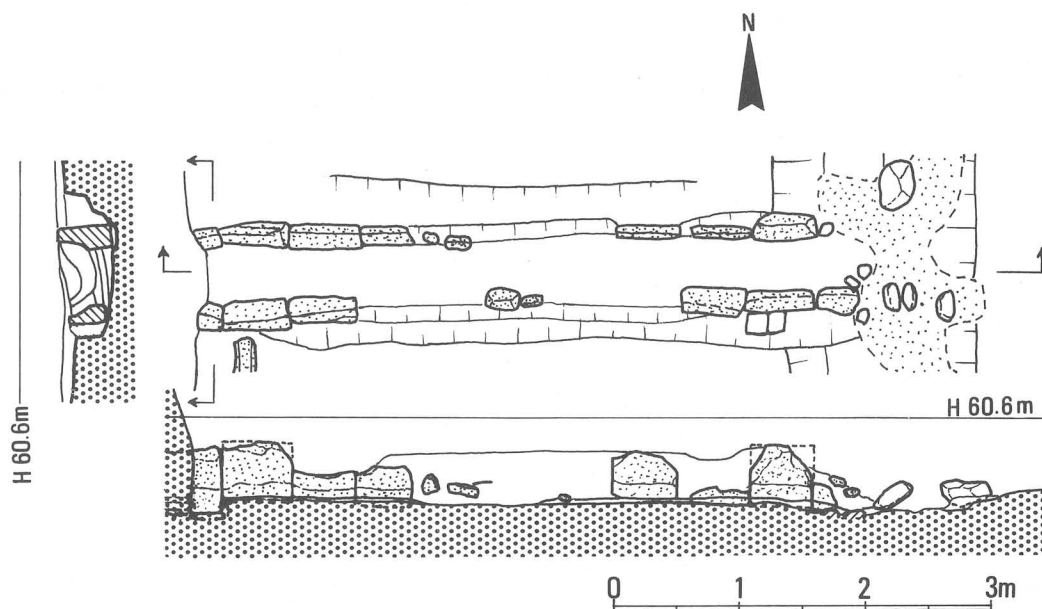


図62 暗渠遺構図（1：60）

切石が遺存しており、先述した壁下地覆に関連すると思われる。

基壇は、前述したように単廊基壇を拡幅している。東側柱列の複廊掘形は、重複関係からみてこの拡幅の後に掘り込んでいることが明らかである。基壇外装は、地覆がなく、羽目石を直接立てたもので、南北に2箇所あり、当初の位置を保っている。東側柱心との間隔は、ほぼ1.5mである。羽目石の大きさは、幅は北側が1.1m、南側が70cm、厚さはいずれも20cmで、上端は崩壊しており、現状での高さは23cmである。南から5間目にある羽目石状の凝灰岩切石は、当初の位置ではなく、移動している。

基壇東側の雨落ち溝は、基壇羽目石を西側石としており、東側石と底石も当初は凝灰岩であったが、後に崩壊し、溝内の堆積が進んだのちに東側石位置は玉石に改修されている。玉石は最終期には散在した状況になっている。雨落ち溝の規模は、当初、羽目石と東側石間の内法で80cm、改修時には60cmに狭っている。なお、調査区東北隅の東西方向の玉石溝は、焼土層の上に築かれており、再建後の雨落ち溝に連なるものである。

2 回廊の造営と変遷

薬師寺回廊が当初単廊で計画され、その後、複廊で完成されていることは、すでにこれまでの調査で明らかにされており、今回も同様の状況を再確認したことになる。

基壇築成

造営前の周囲の状況は、細砂質の地山が基盤となっており、発掘区北端中央から、東南方に流路があり、全体に旧地形は南下がりであったと推定される。とくに、発掘区南半は細砂質で、軟弱な地盤であり、単廊掘形を深く掘って内部を入念に築き固めているのは、このためであろう。

単廊から複廊へ

単廊は、桁行が12.5尺、梁間は12尺となり、従来の復原寸法とは異なる。単廊は礎石の据え付け工程まで進行しており、礎石据え付け後にさらに基壇上の築成が行なわれている。しかし、基壇外装までは工事が及んでいない。その後、礎石は抜き取られ、掘形は埋め戻される。そして基壇が拡幅され、複廊の礎石据え付け掘形が掘られ、回廊は複廊として完成された。その後この回廊が火災で焼失し、さらに再建されていることは、暗渠内の焼土の存在、東雨落ち溝に上層・下層の2時期があり、上層の雨落ち溝護岸の玉石が焼土層の上に設けられていることなどから明かである。この火災は、遺物の年代からも、天禄4（973）年の火災とみて矛盾がない。

ところで、複廊の柱間についてみると、今回の調査区では、桁行柱間は、6間

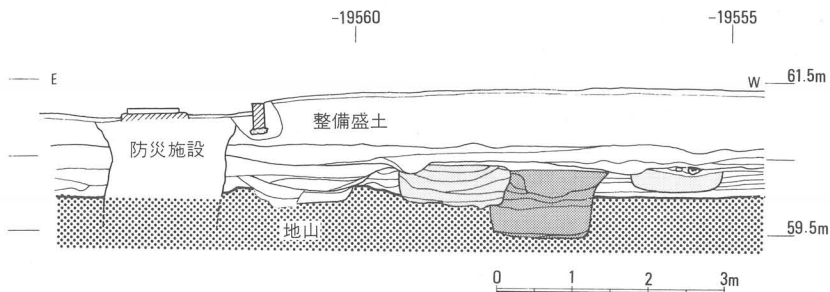


図63 西面回廊基壇断面図（1：100）

分の平均が4.16mであって1尺=29.7cmとすると14尺となり、これまでに知られている南面回廊（13.5尺）、東面回廊（13.6尺）と比べてやや長い数値をとることが注目される。いっぽう梁間は約3.0mで、10尺とみてよい。軒の出については、雨落ち溝心までの距離からみて約2m、すなわち7尺とみられる。

なお、先述したように、造営前の旧地形は、南下がりと考えられるが、回廊も南下がりに造営されたかどうかとも問題になる。回廊基壇面は全面的に少し削平されているので、間接的な方法で推定せざるを得ない。まず今回調査区で基壇高復原の手がかりとしては、①南から1間目の壁下地覆、②南から3間目の暗渠に南接した壁下地覆、③暗渠側石の3箇所レベルがある。これらはいずれも当初の高さを残していると考えられるもので、これらから基壇上面の標高を復原するとほぼ60.5mとなる。西南隅回廊で求められた基壇標高は60.6mであるから、この2箇所で、大きな違いはなく、少なくとも西面回廊の南半部基壇については、水平に造営されたと見たほうが良いことになる。

軒廊の有無

今回の調査のもうひとつの目的であった金堂と西面回廊をつなぐ軒廊の有無について述べる。調査の結果は金堂に向かう東西方向の基壇はもとより、雨落ち溝等の痕跡もなく、回廊基壇、雨落ち溝とも南北に通っている。また、仮に基壇が削平され、礎石が失われたとしても、礎石下の据え付け掘形はその深さからみて遺存するはずであるが、そうした痕跡も全くない。従って、軒廊は、当初から存在しなかったと判断できる。（千田剛道）

3 出土遺物

瓦埴類

瓦埴類は、多量の丸・平瓦のほか、軒丸瓦93点、軒平瓦99点、鬼瓦4点、隅木蓋瓦1点、鳥衾1点が出土した。軒瓦は、薬師寺創建の軒丸瓦6276Aa（2）・Ab（3）・E（4）、軒平瓦6641G（11）・H（12）・I（14）・K（15）が多数を占め、6276ではAaが、6641ではG・Hが主体である。この出土傾向は薬師寺伽藍全体の傾向と同じである。

表13 軒瓦集計表

軒丸瓦		軒平瓦	
～奈良時代	33	～奈良時代	54
平安時代	37	平安時代	30
中世	11	中世	4
近世以降	12	近世以降	12

6647Cb (13) は、これまで6647 Fとして報告していたもの（『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第45冊 1988年 p. 112 - 113 fig. 51 - 207）であるが、今回瓦当のほぼ完形に近いもの

が出土し、藤原宮所用の6647Ca（従来6647 Cと報告していたもの）の彫り直しであることが判明した。CbはCaに比較して唐草文が太くなり、蕾が蔓に接続する。6647Cbは藤原宮の本薬師寺にも出土例がある。Cbの左脇区界線を内側に彫り直し、上外区左端の珠文が界線と交差するCcも本薬師寺から出土している（『飛鳥・藤原宮発掘調査概報6』1976 p. 52）。6647Caは平瓦部凸面に横方向の平行叩きを施し、顎部貼り付け面に重弧文風の刻みを入れるが、Cbは平瓦部凸面と顎面に縦方向の縄叩き目を残し、顎貼り付け面に刻みを施さないのが特徴である。

6276 - 6641の補足瓦である6304 E - 6664 Oの組み合わせは、軒丸瓦6304 E (5)が1点のみ、奈良時代後半の軒瓦も6663 FとK (16)が1点ずつ出土したにすぎない。このことは、西面回廊が造営当初に完成し、奈良時代にはそれほど手を加えられていないことを示すのであろう。

平安時代では、6276 - 6641を模したと思われる、軒丸瓦6（薬師寺39型式）と軒平瓦18・19（薬師寺248・245型式）が多い。天禄4（973）年の大火ののちの再興に用いられた瓦である。再建回廊に関しては、天元3（980）年に周防国守清原元輔が「造薬師寺廊功」で叙位を受け、造営にあたった平超と増佑が10世紀の終わりごろに別当に就任していることから、11世紀の初めに完成したと考えられている。軒丸瓦7（薬師寺60型式）、8（薬師寺78型式）、9（薬師寺86型式）、軒平瓦17（薬師寺261型式）も平安時代である。

その後、『嘉元記』によれば、康安元（1361）年の大地震で金堂や塔が傾いたほか「中門・廻廊悉顛倒。」とある。中世以後の軒瓦が少ないのは、そののち再興されなかったことによるのであろうか。江戸時代の絵図に回廊の姿はない。

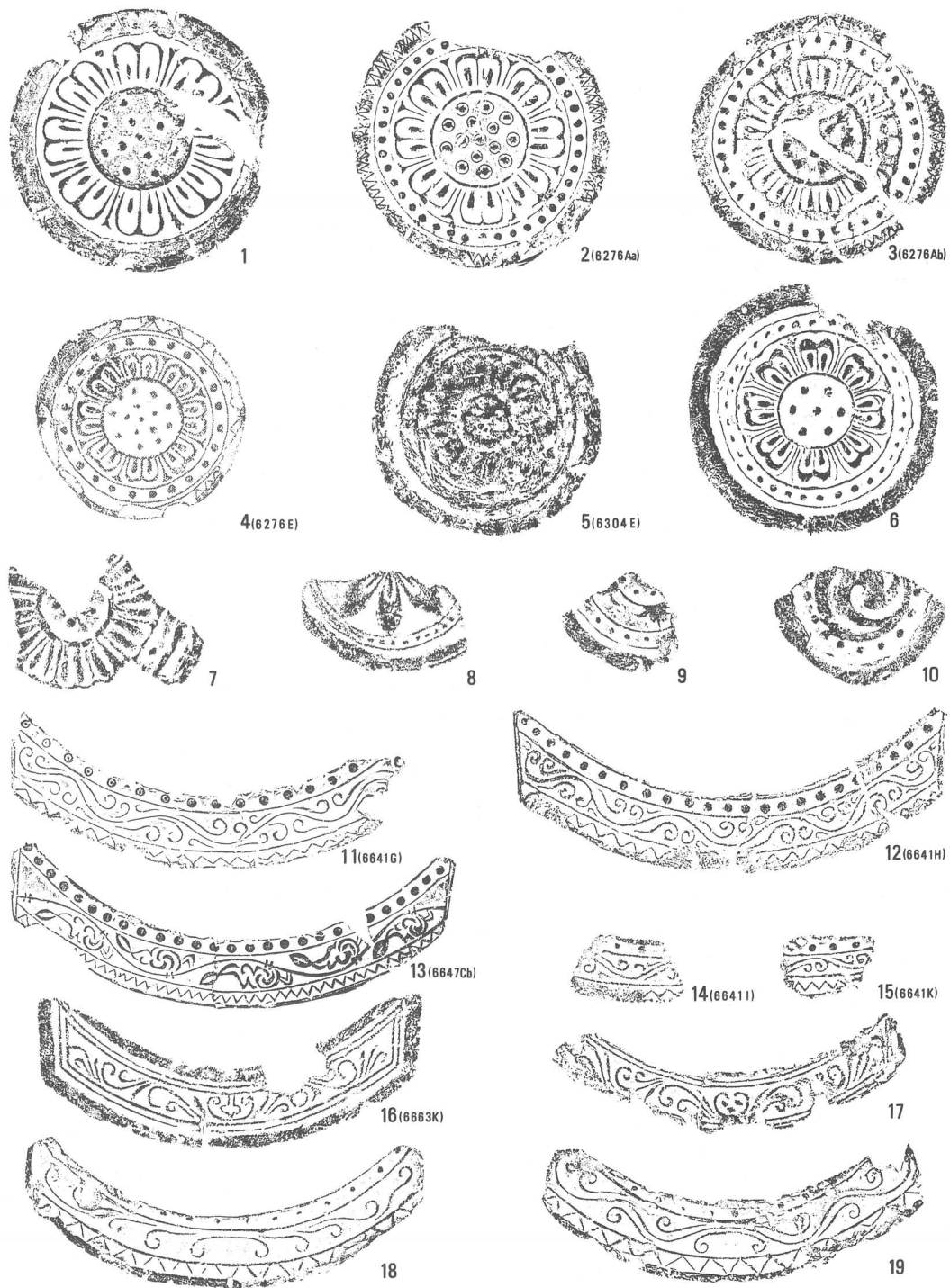


图64 藥師寺西面回廊出土軒瓦（1：5）

今回出土した瓦には、新形式は含まれてはいないが、遺構出土の軒瓦に注目すべきものがある。

調査区南部で検出した単廊の礎石据え付け掘形のうち、西側の2ヶ所を断ち割り調査したところ、多量の瓦を何層にも入れて突き固めていることが分かった。このなかには、軒丸瓦6276Aaと外区素文の複弁8弁の軒丸瓦1（薬師寺6型式）、軒平瓦6641G・H、6647Cbと重弧文軒平瓦が含まれる。瓦はすべて10cm角位の大きさに割り砕かれており、しかも二つの掘形から出土した軒瓦は互いに接合する。丸、平瓦は未整理だが、おそらくかなりの頻度で接合するものと思われる。つまり、単廊の礎石据え付け掘形に瓦を入れるとき、瓦はあらかじめ適当な大きさに砕かれており、複数の掘形が平行して埋め立てられた様子を窺い知ることができる。

一方、複廊の礎石据え付け掘形からは、軒丸瓦6276Abが出土した。6276Aaの瓦範が強く摩滅したもので、単廊の礎石据え付け掘形からは出土していない。6276Abは本薬師寺での採集例が報告されており（保井芳太郎『大和上代寺院志』1932 図版第二八 疏瓦6）、現状ではAa・Abの差をそのまま単廊と複廊の工程時間差に結び付けるわけにはいかない。今後の本薬師寺の調査を待って、再評価したい問題である。（花谷 浩）

土 器

少量の土師器・須恵器のほか、大量の近世陶磁器がある。遺構に伴うものでは、暗渠内堆積土出土の土器があり、これには8世紀後半の須恵器から11世紀代の土師器まで含まれる。

木 簡

木簡は2点あり、いずれも調査区西端の南北大溝から近世陶磁器を伴って出土したものである。釈読できる1点の表裏面の釈文をかかげる。（千田剛道）

- ・ タヘンヲロカニ
- ・ セ□ンチサ